



小中村義象先生肖像

小中村義象



寫眞につけておくる文

小生はもと肥後熊本の武士苗字は池邊といひき、  
今は故ありて、東京小中村氏を名のりぬ。文久元年  
十月に生れたれば、いまだ年若くして、履歴といふ  
ほどの事はなし。たゞこの容貌のみ御見おぼえお  
き下されたし。

明治廿七年九月

小中村義象

國文

國文とは我々國民の思想をあらきあらはす文章をいふ。人として思想あらきものなけれど、文章を用ゐるものゑならん。それとも、その書きやうによりて、我思想の人と通じかぬることあり。よりにて文章を學ぶ必要あり。又既に文章を學ぶとき、  
まことに上手なる人と、まことに上手なる人とを、誰も望むこととして、人情の自然なり。  
文法を研究するも、何の爲らといふも、我思想を正しく文章にあらきあらきせん爲なり。古今の人の文章を讀むも、何の爲らといふも、それを見て、我思想を養ひ、そのあらきをせよべき文章の工合を覺え、おねて、文語のいふんを知らん爲なり。されば、國文の科より、文法を學ぶこと、古今の文章をよみて、これを味ふこと、常に相伴いせざるへからず。この二つを車の兩輪とも、鳥の兩翼ともいふべきなり。



文法の事、文典の科にていふべき事なれど、こゝはあいたせ、  
解釋科にて、專古今文章の上まついていふべし。その古今と  
いふ中にも、今人の事、よき安すけれど、解釋する必要なし。され  
ど、必竟の古文を解釋することゝなるなり。  
そもく、我國にて、古文といへど、古事記の文、祝詞、宣命の文等  
なれども、これらの専門學者の考究をへきものにて、普通用  
ゐるへからせ。又竹取物語、宇津保物語、伊勢物語、源氏物語、枕草  
紙等のふな文、大よ今日の文章の助となることもあれども、  
普通教育に用ゐるべきものよきあらず。その後生れ出たる今  
昔字治の類、著聞十訓等、さて、平家保元以下の戰記文、神皇正  
統記、公事根元、徒然草、方丈記、又徳川氏時代よあらされたる漢  
學者のふける國文、國學者のふける通俗文等をぞ專考究すへ  
きもの能る。但し僧徒のふけるよき、厭世主義多く、戰記文よき  
句調を貴ひて、艷麗よ過きとるところあれど、讀む上よも、習ふ  
上よも大よ注意せざるへからせ。

余もこのよび、本會の國文講師を囑托せられていなる書よ  
つきて解釋せんら甚窮せり。徒然草をとらんら、余もこの書の  
を目的とせざるをいふよせむ。方丈記をとらんら、まゑ然り。  
正統記、公事根元等をとらんら、また然り。故よ余の普く全國よ  
行へれ居る教科書を聞きあつめあるよ、これをあ一ならせ。あ  
つ、余の意よ適せざるものも少あらせ。よりて、一篇の字書や  
うのものをあらはして、孰よも通用をへきものよせんと思ひ  
しらと、それた容易の事よあらせ。たまく、會主再來りて、和  
文軌範を本として解してよといさる。打かたふかるよふし  
能きよあらねど、たゞ前言をくりかへしありて、せん方なけ  
れど、そがいふまよよきることゝあらぬ。されど、二號以下よき  
らの書中よ集めある文の摸範とせへきものよとをとり出し  
畧解批評して、諸君と相見ゆべし。

又こゝよいふへき事あり。國文を研究する上よき、我國太古よ  
り發達せし歌といふものよ、事を忘るへからせ。これ喜怒哀樂



のあらわれたるものにして、人麿の歌をよみて、その人よあひあることく、貫之の歌を吟じて、直よその人の來るることき心ちをるものよて、感情の上より知らせく、その文學思想を導く大効あれきなり。況やこれのよき固有の文學よて、開國以來今よあらぬものなるをや。余もこの點よりしてをりをり古人の名歌もしく、忠臣義士などの歌を解釋することあるべし。こよ國文を講ざる前よ、聊らおもふ旨をうくなむ。

明治廿六年十一月天長節日園生の菊の露を硯よ受けて、

小中村義象識

○國文講義

小中村義象述

さきに、和文軌範に載せたる書によりて、講述せんことを約せしも、また思ひかへして、專神皇正統記、徒然草、土佐日記等を摘解せんことに決せり。尤

神皇正統記

この書は、北畠准后親房卿の著なり。卿は村上源氏にて、權大納言師重の子なり。元亨三年大納言に任せられ、世良親王の傅たりしが、後この親王薨したまひしかば、悲しみのあまり剃髮し、仕を致して、ひきこもられき。時に後醍醐天皇は、北條が暴戾を逞せせたまひ、遂に軍をおこして、高時を滅され、建武中興の政となりぬ。親房再出で、仕へまつり、從一位に叙し、大臣に准せられき。足利尊氏叛きて、南北兩朝とわかれさせたまふにいたりて、親房は南朝の元老として、帝政を輔けまつりしこと多し。

延元三年かの土總の海の浪風より、親房の船は常陸につきければ、小田治久か



こもれる城に入りぬ程なく賊高師冬攻來て治久降りにければ親房は關民部少輔宗佑か守れる城に退き入りぬかくて相持つこと久し時に吉野には天皇崩御したまひて後村上天皇位につかせたまひ四面大かた賊に降らぬものなし親房悲憤のあまりこの神皇正統記をあらはしたりといふされは冒頭に大日本は神國なり天祖始て基を開き日神長く統を傳へたまふ我國のみこの事あり異朝にはるの類なしこの故に神國といふなりとかけらるの識見の卓絶なるはざるものにていつこまでもその天祖の正系を受つがせたまひその天祖手授の神器を傳へさせ給ふは吉野の天子にして京都なるは偽朝なるよしを憤慨せるが一篇の骨髓なりされはその卷末に今のみかど後村上天皇また天照大神より以來の正統を受けましくぬれはこの御光に争ひ奉るものやあるべきとかける照應の正しきを見るべし。

さて親房卿は事成らで再び吉野にかへり後村上天皇に仕へまつり准三宮となり笠なから宮に入ることとをさへにゆるされぬかくて正平七年賀名生にて薨せられき卿は和漢梵の三學に通し著はされしと正統記の外に職原抄元々

集東家祕傳二十一社記古今集註等あり藤原宣房源定房と共に後三房と稱せられて博學のきこえ高かりき歌は新葉集にあまた見えてその氣品の高きことおのつから推しはかられ文はこの正統記を見れば吾人の手本とするに足るべし書をもよくせられしことは近頃卿のかかれし文書とものかれこれ見ゆるにて知るべしあゝ文あり武ある卿のこときをこそ我々の龜鑑とは見るべけれ。

(イ) 三種の神器

三種の神器世に傳ふこと日月星の天にあるに同じ鏡は日の体なり玉は月の精なり劔は星の氣なり深き習ひあるへきにやそもくかの寶鏡はさきに記し侍る石凝姥命の作りたまへりし八咫のみかみ玉は八さかしの曲玉玉屋命作りたまへるなり劔は素盞烏尊の得たまひて大神に奉られし叢雲の劔なり。



三種ノ神器ヲ、日月星ニタトヘテ説カレタル、貴クメダシ、深キ習ヒあるヘキ  
にヤトハ、深遠ナルイハレアルベキコトナラント、憚リ貴ビテイヘルナリ。そも  
トハ前ヲ抑ヘテ後ヲ起ス詞、石凝姥、玉屋ノ二神ハ、天孫降臨ニ陪侍セル五  
部神ノ中ナリ。工藝ニ熟練セラレシコト、見ユ。天岩戸段ニ初テアラハレシ神  
々ナリ。劔は素戔嗚尊の得たまひてトハ彼尊出雲國肥ノ河上ニテ、八股大蛇ヲ  
斬リテ、ソノ尾ヨリ獲玉ヒシカバ、私ニ持ツベキモノニアラズト姉尊大神宮ニ  
奉ラレタルコトヲ云フナリ。叢雲ト云フハ蛇ノ居ル上。常ニ雲氣立チケレハ名  
ケキトゾ。サテコレマテハ三器ノ由來ヲカケリ。

この三種につきたる神勅は、まさしく國をたもちますべき道  
なるべし。鏡は一物をたくはへず、私の心なくして、萬象を照す  
に、是非善惡の姿あらはれすといふことなり。この姿に従ひて  
感應するを徳とも。これ正直の本源なり。玉は柔和善順を徳と  
す。慈悲の本源なり。劔は剛利決斷を徳とす。智惠の本源なり。こ

の三徳を翁受けすしては、天下の治まらんこと、誠にかたかる  
べし。神勅明にして、詞約やかに旨廣し。剽へ神器にあらはした  
まへり。いと忝き事にや。

三種につきたる神勅トハカノ神代紀ナル天壤無窮ノ神勅、マタ仲哀紀ニアル  
文ナドヤウノ意ヲイハレシナラン。コノ文ノ前ニ鏡は一物をたくはへす云々  
トイヘル以下、智仁勇ノ三徳ヲコレニヨソヘラレタル、イカニモサル事ナラン。  
コレヲシモ御心トナシタマハ、イカデ天下ノ治マラザルコトアラン。又一般  
臣民コレヲ心トナサバ、人タル道ヲ踏ミ違フコトハアラサルヘシ。ア、皇國開  
闢ノ初ヨリ、コノ貴キ道ハ行ハレケルナリ。何ゾ儒教ヲ待テ智仁勇ヲ説クコト  
ナセン。詞約に旨ひろしトアル、コレ實ニ神勅ノ御意ヲ得タル文ナリ。滔々万言  
アリトモ、君臣父子ノ大倫絶エテ行ハレズバ、一文ニモ價セサルヘシ。神器にあ  
らはすトハ、ソノコトノ意味ヲ器ノ形ニ顯ハシ玉ヘルナイフナリ。

中にも鏡を本とし、宗廟の正体とあふがれたまふ。鏡は明を形



とせり、心性明かなれば、慈悲決斷は、うの中にあり。又まさしく御影をうつしたまひしかば、深き御心をとどめたまひけんかし。(云々)君も、臣も、神明の光胤を受け、或はまさしく勅を受けし神たちの苗裔なり、たれか、これを仰き奉らざるべき。この理をさとりて、うの道にたかはずば、内外典の學問も、こゝに極まるべきにこそ。

鏡を本とし、トハコレヲ天祖ノ御靈トシテ、祭ラセ玉フ事ヨリ、カノ吾兒視此寶鏡。當猶視吾ト詔ヒシ、イトモく、貴キ御事アレバナリ。方々歳ノ後トテモソノ鏡ニ向ハセ玉ヒテ、御影ノウツリ玉ヘルハ、即天祖ノ御遺体ナルワケニテ、父子ノ御情油然トシテ起リ玉フベシ、サテハコノ皇位ノ悠久ニシテ一系ニマシマスコト、當時天孫ノ降臨セサセ玉ヒシコトマデアリく、ト見エ奉ラル、コトナレハ、オノツカラ天職ヲ盡クサセ玉フ御事トナルベシ。我國ノ大道大倫實ニ此ニ存ス。深ク鑑ミ奉ルヘキナリ。

君も臣も云々皇室ノ御事ハイフマデモナシ。我々臣民トテモ、悉ク天神天祖天皇皇子皇孫等ヨリ分レタルモノナリ(審別トテ韓漢ノ飯化人ノ未アレトモ今ハ殆ト同族ノヤウニナレリ)ソノ本ヲオモヘバ、イカテ孝道ヲ盡サマルコトヲ得ン。コノ孝道ハ即忠トナリテ、忠孝一本ノ國体ノアリカタキコトヲ辨フヘシ。内外典内典トハ佛書、外典トハ儒書ナリ、當時ノ詞、多クノ書ヲ讀ム目的ハコノ大倫大道ヲ知ルニアリトナリ。

(口) 日本武尊

景行天皇四十年、東夷多く叛きて、邊境さむがしかりければ、又日本武の皇子を遣はす。吉備の武彦、大伴の武日、を左右の將軍として、相副へしめたまふ。十月に枉道して、伊勢の神宮にまうで、大倭姫命に、まかり申したまふ。かの命、神劍を授け、慎みてなにおこたりそと教へたまひけり。

東夷蝦夷ドモナイフナリ。王化ニ服セズ、常ニ邊境ノ人民ヲ掠ムル、ワルモノナ



リ。コノ頃ハ大ニ東北諸州ニハビコリシモノナリ。ざわがしトハ、即夫レ等ガ騷動スルナイフ。又日本武の皇子をつかはすトハ、是ヨリ先、コノ皇子ヲ熊襲征伐ニ遣ハシタマヒ、凱旋セラレシ後、幾程モナク、又遣ハサレケレバ、カクカ、レタルナリ。枉道トハ直ニ命セラレシ地ニ赴カズシテ、伊勢ニ廻リタマヘレバ云フナリ。神宮ハ天祖ノ大座ニオハシマセバ、ワザ々々參詣セラレシコト、サモアルベシ。大倭姫命皇子ノ伯母君ニアタリマス。紀記ニハ大ノ字ハナシまかり申したまふ辭退シタマヘルコトニテ、即訣別ノ詞ヲ述ベラル、チイフナリ。古事記ニヨレバ、コノ時皇子アマリニ屢々戰地ニ赴カセラル、チ悲ミ憤リテ、ヤ、父天皇ヲ恨ミタマヘル由ノ御詞アリ。日本紀ニハ、少シモサルコトハ見エズ。皇子ノ猛キ御心ヨリ思ヘハ、サヤウニ恨ミ言ナドイハル、筈モナキヤウナレト、伯母君ノ慈悲深キ容貌ニ、自然アハレノ情ヲ催サセタマヒテ、或ハ古事記ニ傳ヘタル如キコトヲ宣ハヌトモイハレジ。又反ツテソレガ眞情ニテ皇子ノ皇子タルトコロナラント思ハル、フシモアリ。近來皇子ヲ保護スル爲ニ古事記ヲ誤ノヤウニイヘル人モ見ユレハ一言シオクナリ。神劍天叢雲劍ナリ。コハ姫命ノ

持タセタマヒタレバ、コノ度ノ大事ニ皇子ニ賜ヘルナリ。慎みてなれこたりを慎ンテ怠ルコト勿レト誠メタマヘルナリ。なるノ格トテ文法上禁止ニ用キルコトアリ。コハ必なトノ間ニ、詞ヲ入レテ用キル法ニテ、行くことなかれヲなゆきろ、散らすことなかれヲならしむるナトイフナリ。コ、ナルモ即ソノ類ナリ。コチなすト濁リテイフハ甚非ナリ。コレ文法亂レシ時代ヨリアヤマリテ呼ヒ來リシコトニテ、ケリチゲリナト云フト全シ。惡慣習ニ依ルコトナカレ。サテ本書ニハ火打袋ヲモ添ヘテ賜ハリシヨシ記セリ。コノ書ニハ、畧セラレタリト見ユ。

駿河にいたるに、賊徒野に火をつけて害し奉らんことをはかりけり。火の勢免かれかたかりけるに、はかせる叢雲の劍、自らぬけて、傍の草を薙き拂ふ。これより名をあらためて、草薙の劍といふ。又火打をもて火を出して、向ひ火をつけて賊徒を焼きころされにき。

駿河にいたるに云々紀ニヨルニ賊徒皇子ヲ欺キマツリテ鹿狩セントテ誘ヒ



入レ、サテ火ヲツケテ審セント謀リシナリ。はかせる太刀ハ腰ニ取佩クモノ故  
ニイフ。佩イテイラツシヤル劍ト云フコトナリ。草薙劍ノ名、コレヨリ起レリ。火打  
テもて云々火打袋の石ヲトリ出シテ、ソレヲキリ出シテ、コノ方ヨリモ火ヲツ  
ケタマヘルヲ向火トハイフナリ。カクスル時ハ、本ノ火ハ壓サル、トイフ。サテ  
コノ地ハ、今燒津トイフト古事記ニアレバ、富士ノ裾野ナリ。目今ハ瀛車ノトマ  
ルトコトナレリ。

これより船に乗給ひて、上總にいたり、轉じて陸奥國に入り、日  
高見の國に至り、ことく蝦夷を平けたまひて、かへりて常  
陸を経て、甲斐に越え、又武藏上野を経て、碓日坂にいたりて、弟  
橘姫といひし妾を忍ひたまふ。(上總へわたりたまひし時、風波  
あらかりしに、尊の御命をあがなはんとて、海に入りし人なり。)  
東南の方を望みて、我、孀者耶とのたまひしより、山東の諸國を  
あつまといふなりとぞ。これより、道をわけ、吉備の武彦をは、

越の國につかはして、不順のものを平けしめたまふ。

これより云々皇子の東征ノ道スヂノコトハ古人色々ニ説アリ、コヽニハイフ  
ベキ要ナケレハ畧ク、日高見コノ地名一定セズ。延喜式ニ、陸奥桃生郡日高見神  
社トアル地ニヤ。常陸風土記ニモ信太郡ハモト日高見ト云ヒシヨシ見エタリ。  
弟橘姫、注ニアル如ク、アハレナル御事ナレバ、思出シ玉ヘルモ理ナラズヤ。我孀  
者耶トハ我カ妻タル橘姫ア、ト歎カレタル聲ナリ。者耶トハ深ク歎クコトバ。  
今ニ至ルマデ、東國ノコトヲ吾妻ト云フハ、コノ故事ニ本ツクモノナリト云フ。  
コレ紀記ノ傳フルトコロナリ。

尊は信濃より尾張に出てたまふ。かの國に宮簀媛といふ女あ  
り。尾張の稻種の宿禰の妹なり。この女を召して、淹留りたまひ  
し間、五十葺の山に荒神ありときこえければ、劍をは宮簀媛の家  
に留めて、陸よりいでます。山神化して、小蛇になりて、御道に横  
はれり。尊またきこえて、過ぎたまひしに、山神毒氣を吐きけ



るに御心みたれにけり。それより伊勢に移りたまふ。能褒野といふところにて御病甚しくなりければ、武彦の命をして、天皇に事の由を奏して、終にかくれたまひぬ。御年三十なり。天皇きこしめして、哀しみたまふことかきりなし。群卿百寮にれほせて、伊勢國能褒野にをさめ奉られしに、白鳥となりて、大倭の國をさして飛ひ、コトヒキ彈琴の原といふところに留まれり。其所に又陵を作らしめられければ、又飛ひて河内の古市にとまらる。その所に陵を定められしかど、白鳥又飛ひて天にのぼりぬ。依りて三の陵あり。かの草薙の劔は、宮簀媛、崇め奉りて、尾張にとまりたまふ。今の熱田の神にまします。

宮簀媛コレ尾張國造ノ女ニテ、皇子ノ先ニ東方ニ赴カセタマフ時ニモ、立ヨリタマヒシ家ナリ。イトマ御心ニトマリシ人ト見ユ。五十葺の山云々近江ノ伊吹山ナリ。カノ山ニ荒フル神(王命ニ從ハヌ山賊カ)アリトキ、王ヒテ、ソレ殺シテン

トテイデマスナリ。劔ヲコノ家ニ、ノコサレシコトヲ御附ノ人、諫メ申シ、カトモ、手ニテツカミ殺サンナド、勇ミ猛ケリテタ、シ、由、記ニ見エタリ。またぎこえて、跨リ越エタマフナリ。毒氣云々コレニフレテイト御心ミダレヨワリタマヘルゾ悲シキ。伊勢ニ移りたまふトハ初メハ京都ニ歸リ玉ハン御心ナリシカトモ、愈々苦シクナリ玉ヘハ、尾張ニ歸ラントテ、コノ國ニ來リマセルナリ。能褒野、伊勢鈴鹿郡ナリ。延喜式ニ、コノ御陵ノ事ヲカキテ、兆域東西二町、南北二町、守戸三烟トアリ。白鳥ニナリ玉ヘルコトイカナルコトナラン知ラズ。カ、ル御傳ヘアリト見オクヨリ外ナシ。彈琴原ハ太和葛上郡富田原谷二村ノ間、古市ハ河内古市郡、今モ白鳥陵トイフトゾ。熱田神宮申スマデモナシ。コノ神宮實ニ宮簀媛ノ創意ニ成レルナリ。

ソモ、日本武尊ト宮簀姫トノ御間カラノ事ハ、古事記中卷、及ヒ熱田縁起ニ具サニ見エタリ。御贈答ノ御歌ナドモアリ。記ニノセタル尊ノ今ハノキハノ御歌ナル、をどめの床のべにわがれきし劔の太刀、その太刀はやトノタマヒタルガ如キ悲シキ極ミト申スベシ。アハレ一時ノハヤリ御心ヨリ、カノ御劔ナスデ



オキタマハズバ、カ、ル憂キメニハ逢ヒタマハジモノヲ思ヒマツルコトニイ  
ト悲シクテナン。

因ニ云、崩ト云ヒ陵ト云フコトハ、天皇ニ限リテ用キルヘキ字ナレトモ、日本武  
尊ハ、何事モ、天皇ニヨリヘテ執アツカヒタマヒシ故ニ、古クヨリカ、ル文字ヲ  
モ用キラレタリト見ユ。景行天皇モ、常ニ我子ニシテ我子ニアラズト貴ビタマ  
ヒシモノナヤ。

(八) 日本人種

(應神天皇記の中)

異朝の一書の中に、日本は吳の太伯が後なりといふといへり。  
かへすく、あたらぬ事なり。昔日本は、三韓と同種なりといふ  
ものありしが、彼の書を、桓武の御代に、焼きすてられしなり。

今ノ如ク開ケタル世ニハ、日本人ヲ支那ノ子孫ナドイフヤウナツマラヌ學  
者ハナケレトモ、古ハサヤウナ<sub>コ</sub>云フモノモアリキト見エタリ。異朝の一書の  
中、晉書トイフモノニ、日本ハ吳ノ太伯ノ子孫ト云フ説アルナドヤ初ナラン。コ  
ノ事ハ、日本紀纂疏(一條兼良公ノ著)ニモ、ハヤク辨セラレタリ。南北朝ノコロマデ

ハ、コノ説ヲ唱フル僧ナドモアリシナリ、吳ノ太伯ガ時トハ、本ヨリ年代ガ大違  
ヒナリ。かへすく、クレク、モト云フカ如シ、詞ヲ丁寧ニ、懇ニクリカヘシイフコ  
トナリ。昔日本ハ云々、コハ桓武天皇ノ朝ニ行ハレシ説ニテ、早ク日本ニ飯化シ  
タル三韓人ノ子孫トモガ、何トナク固有ノ國民ニ對シテ、頭ノ擧ヲヌヨリ、僞書  
ヲ作りテ、三韓モ日本モ同人種ナリ、輕重スヘカラズト云フ意ヲ世人ニ示サン  
トセシコトアリ、コレハ甚政道ニ害アル事ユエ、天皇ノ大同四年二月ニ、禁止セ  
ラレシナリ。ソノ書ハ倭漢總歷帝譜圖ト云ヒキ、詳ナルコトハ、日本後紀ニアリ。  
天地開けて後、素盞<sub>スサノ</sub>尊<sub>ノミコト</sub>、韓<sub>ノミコト</sub>の地に到りたまひきといふことあ  
れば、かれらの國々も神の苗裔ならんこと、あながち苦しみな  
きにや、それすら昔より用おさることなり。天地神の御末なれ  
は、なこしか代<sub>ヨシ</sub>下れる吳の太伯か後にはあるべき。

素戔嗚尊、天照大神ノ皇弟ナリ。韓の地、三韓即今ノ朝鮮ナリ。素戔嗚尊ハ、御子五  
十猛命ヲ率テ新羅ニ到リマセルコト日本紀ニアリ。かれら、三韓人ナイフ。あな  
かち強テトイフニ全シ。苦しみなきにや、苦しキコトハナカラントイフ意。うれ



すら、ソノ國デサヘモナリ。コ、ノ意ハ、韓國ニハ、素盞鳥尊ノ行キマセルコトアレハ、三韓ヲ日本人ノ同種トイフコトハ、強チニ不都合ハナカレント思フナ、ソレデモ、桓武ノ御代ニ書ヲ燒ステラレシホドノ事ナリト、後ノ文ヲ強クキカセシタメニカケルナリ、天地神ノ御末我國ニテ、昔神ト云ヒシハ、皇祖皇宗ノ御靈若クハ國家ニ大功アリシ人タチノ靈チイフナリ。サレバ、ウツリテハ現在ノ天皇ヲモ、神ト申シ、コト多シ。コ、ニイフ天地神トハ、天神地祇ニテ、皇祖皇宗ガタノ御上チイフト知ルヘシ。御末なれは開闢以來一系正シクマシマス天皇ハ申スマテモナシ、一般臣民モ、皆血脈正シキコトチイフナリ。なてし如何カナリシハ強助辭。代下れる云々遙ニ代ノ下レル吳太伯ナトカ末ニハアレントナリ。あるへきアルヘキヤ、アズト反シイフナリ。へきハなてかの結ビナリ。

三韓震旦に通してより以來、異國の人多くこの國に皈化しき。秦の末、漢の末、高麗百濟の末、うれならぬ蕃人の子孫も來りて、神皇の御末と混亂せしによりて、姓氏錄といふ文をも作られき。それも人民にとりての事なるへし。異朝にも、人の心まぢくなれば、異學の輩のいひ出せる事か。後漢書よりぞ、この國の事をばあらくしるせる。符合したるともあり、又心得ぬ事もあるにや。唐書には、日本の皇代記を、神代より光孝の御代まで明かに載せたり。

三韓震旦、震旦トハ印度ノ事ナリ。ソレラノ國ニ通シテ以來ナリ。皈化しき、  
皈化トハ外國人カ日本ノ王化ヲ慕ウテ來リ住ミテ我戶籍ニ入り、我國人トナルチイフしき、シタトイフコト。それならぬ云々、秦漢高麗百濟ソレニアラヌソノ外ノ外國人ノ子孫モ來リタルト云フナリ。蕃人トハ外國人ノコト。神皇ノ御末、日本人ノ事、姓氏錄 コレハ日本人民ト外國人ノ子孫ト段々混亂シ、又日本人民ノ中ニテモ、互ニ系圖ノ分ラヌヤウニナリテ、不都合ナル事ガ多イ故ニ、嵯峨天皇ノ時、中務卿今ノ宮内大臣ノ如キモノ、萬多親王ニ勅テ下シテ、撰述セシメラレシモノナリ。此ノ時、親王ハ現在ノ日本人ヲ三通リニ區別セラレタリ。神別(コ)ンハ神天武皇以前ノ神々ヨリ分レタル家、タトヘバ、藤原氏、大伴氏、ナトノ如シ皇別(コ)ンハ神武天皇以後皇室ヨリ分レタル家、タトヘバ、橘氏、源氏、ナ



トノ如シ。蕃別(コ)レハ外國人ノ子孫ナリ。タトヘハ秦氏坂上氏ナトノ如シト云フ。カヤウナ御世話アリシモ、必竟人民ニツイテノ御事ナリトナリ。異朝にも云々、吳ノ太伯云々ナト云ヒ出シ、ハ、支那ニテモ異學ノ輩多キユエニ、ソノラガイヒフラシ、コトナラントナリ。まぢく、定マラヌコトナリ。區々トイフ字ヲ訓ム。後漢書云々、以下事ノ序ニ日本ノ事ノ彼ノ邦ノ書ニ見エタルヲカ、レタリ。

(三) 仁德天皇

第十七代仁德天皇は、應神第一の子、御母は仲姫の命、五百城入彦の皇子(景行)の女なり。大鷦鷯の尊と申す。應神の御時、菟道の稚郎子と申すは、最末の御子にてましまししを、うつくしみたまひて、太子に立んと思しめしけり。兄の御子たち、うけがひたまはざりしを、この天皇、獨うけがひ申し給ひしによりて、應神よるこびまして、菟道稚郎子を太子とし、この尊を輔佐になん定めたまひける。

うつくしみ、慈愛セラル、コトナリ。太子、皇太子ナリ。兄の御子、大山守命ナドタイフ。うけがひたまはざりしを、御承知ナカツタテ、ナリ。うけがひトハ承諾スルコト。輔佐、太子ノ輔佐役ニテ後ノ傳ナド云フ職ニアタル。應神かくれましまし、かば、御兄たち、太子を失はんとせられしを、この尊さとりて、太子と心を一にして、かれを誅せられにき。こゝに太子天位を尊に譲りたまふ尊かたくいなみたまふ。三年になるまで、互に譲りて位を空しくす。

太子を失はん云々、大山守命、太子ヲ恨ミ妬ミテ殺サントセラレシコトヲ云フ。この尊、仁德天皇ナリ。かれ、大山守命ナリ。かたくいなみ玉ふ、固辭セラ、ル、コトナリ。位ヲ空しくす、父帝崩御ノ後ナレバナリ。

太子は山城の宇治にまします。尊は攝津の難波にましけり。國々の御調物も、あなたをなたにうけとらずして、民の愁となりしかば、太子みづから失せたまひぬ。尊おどろきたまふことかざりなし。されど、遁れまますへき道ならねば、癸酉の年即位、攝津



國難波高津の宮にまします。

あなれこなた、太子ノ方ト天皇ノ方トナリ。みつから失せ玉ひぬ、自殺シダマヒシコトヲイフ。かきりなし、際限ノナイホド驚カレシヲイフ。されど云々サハイヘド今ハ到底御位ニツクコトヲ遁レタマフコトナラチバ癸酉ノ年即位セラレキトナリ。道トハ行クヘキトコロヲ廣クイフ詞ニテ、コ、ニハ位ニ即キ玉フヘキ道ナリ。

日嗣をうけたまひしより、國をまづめ、民をあはれみたまふとためしもまれなりし御事にや。民間の貧しきことを思オモして、三年の御調ミツナをどゞめられぬ。高殿にのほりて見たまへば、賑はしく見えけるによりて。

高き屋にのほりて見れば烟たつ

民のかまどはにぎはひにけり

とぞよませましくける。さて猶三年を許されければ、宮の中破れて雨露もたまらず、宮人の衣やふれて、そのよそはひも全

からず。帝はこれを楽しみとなん思しめしける。かくて六年といふに、國々の民おのゝ参り集りて、大宮つくりし、色々の御調を備へける。とぞ。ありかたかりし御政なるべし。天下を治めたまふこと八十七年、百十歳おほしましき。

日嗣を受け云々、天位ニ上リマシタルコトヲイフ。日嗣トハ天照大神ノ定メ玉ヒシ御位ヲ継々ニ受ケツキタマヘル故ニイフナリ。ためしも云々、仁愛ノ例モ稀ナリシコトナラントナリ。高き屋に云々、コノ御歌ヲ古クヨリ天皇ノ御製トオモヘルハ大ナル誤ナリ。コノハ延喜ノ時、藤原時平大臣ガ、日本紀竟宴トイフコトアリシ時、竟宴トハ古ヘ御前ニテ日本紀ヲ進講シ一卷了レハ、宴ヲ開キ玉ヒテソノ中ノ重ナル事實ヲ題ニシテ、各歌ヨムコトアルヲイフ。コノ天皇ヲヨメル歌ナリ。天皇ニナリカハリテソノ心持ニテヨミシ故、イツシカ誤リテ御製ト傳ヘラントナルナリ。歌ノ大意ハ、イマ高き屋ニノボリテ見ワタセバ、アノヤウニ烟ガタツコトヨ、サンバ人民オノオノ豊カニ羨焚ナドシテ賑ハ、シク富メルコトナラントイフ意ナリ。雨露もたまらず、たまらず、ハ滯ラヌニテ、漏



ルコトナリ。よそおひ、裝飾ナリ。ありかたかりし、メツタニナイ結構ナ御代ト云フナリ。俗ニアリガタイト云フハ、少キモノハソノ物自然ト貴クナルヨリウツレル詞ナリ。

(ホ) 中臣氏蘇我氏を滅す (皇極天皇記の中)

この時に蘇我蝦夷の大臣馬子大并臣の子にその子入鹿、朝權を専らにして、皇家をないがしろにする心あり。その家を宮門といひ、諸子を王子と名むいひける。上古よりの國記重寶皆私の家に運ひおきてけり。中にも入鹿悖逆の心甚し。聖德太子の御子達の科よなくましくしをもほろぼし奉る。

この時、上ヲ受ケタル文ニテ、皇極天皇ノ時ヲイフナリ。朝權を専らにし云々、蘇我氏ハ武内宿禰ノ裔ニテ、世々大臣トナリ、朝廷ニアリテ權力ヲ專ニセルヲイフ。ないがしろ、輕蔑スルコトナリ。蝦夷等カ叛逆心アリシコトハ、歴史ニテ能ク辨フベシ。その家を云々、自分ノ家、自分ノ子等ヲ天子ニヨソヘテイフナリ。國記重寶、古ヨリ朝廷ニ傳ハレル國家ノ記録ヤ(コレハ聖德太子ガ馬子ト

謀リテ撰述セラレタル舊事紀ヲ初メ、歷代ノ御記録類ヲイフナルベシ。貴重ナル寶器ナドヲ悉ク自分カ家ニ運ヒオキタルコトナリ。コレ皆專權ノ舉動ナリ。中にも云々、サヤウナル、ワルキモノドモノ中ニテモ、入鹿カ尤悖逆ノ心甚シカリキトナリ。聖德太子の云々、山背大兄王等ノ科モナクテアラセラル、テ我カ氣ニ入ラズトテ殺シ申シ、テ云フナリ。蘇我ハ聖德太子ノ爲ニ、ソノ權ヲ得タルコト多カルニ、サテモ、恩義ヲ知ラヌ獸ナリケリ。

ここに、皇子中大兄ナカノオホエと申すは、舒明の御子、やがてこの天皇の御所生なり。中臣の鎌足の連といふ人と、心を一にして入鹿を殺しつ。父蝦夷も家に火をつけてうせぬ。國記重寶皆焼けにけり。蘇我の一門、久しく權を取れりしかども、積惡の故にや皆滅びぬ。山田石川麿といふ人ぞ、皇子に心かよはし申しければ、滅びざりける。

中大兄、後ニ天智天皇ト申ス、やがて、即ト云ニ全シ。この天皇、皇極天皇ヲイフ。コノ天皇ハ女帝ナリ。中臣の鎌足の連、中臣ハ氏、鎌足ハ名、連ハ姓、心を一



にして、同心ニナリテナリ。コノ入鹿誅戮ノ事ハ誰モ知リ居ル有名ノ事ナリ。ラセぬ、死ニ失セタルコトナリ。國記重寶、前ノ文ニ照應ス。コノ亂ノ爲ニ古代ヨリノ記録重器ハ燒ケテ傳ハラズナリシコト誠ニ残念ト云フベシ、コノ皆蘇我が罪ナリ。取れりしかども、取リテアツタケントモナリ。積惡の故にヤ云々、馬子以來惡ヲ積ミ重チシ故ニヤアラフ悉ク滅ビタリトナリ。山田石川麿コノノミハ中大兄皇子ト竊ニ心ヲ通ハシ居タリシニヨリテ殺サレサリキトナリ。コノ石川麿ハ後ニ庸ヒラレテ大臣トナレリ。

この鎌足の大<sup>ア</sup>臣は、天兒屋根命<sup>ア</sup>の二十一世の孫なり。昔天孫天降りたまひし時、諸神の上首にて、この命殊<sup>ミコト</sup>に天照大神の勅をうけて、輔佐の神にまします。中臣といふことも、二神の御中にて、神の御心を和らけ申したまひける故とぞ。その孫天種子<sup>ア</sup>の命、神武の御代に、祭事をつかさどる。上古は神と皇と一にましくしかば、祭をつかさどるは、即ち政をとれる也。政の字の訓にても知るへし。天孫、瓊々杵尊ナリ。上首云々、天孫降臨ノ時ニ、殊ニ天兒屋根命ニ神勅アリ

シコトヲイフ。コノ事ハ誰モ知リ居ルコトナレハ省ク。上首トハ、カシラナリ。中臣といふことも云々、大神ト天孫トノ中ニ居リテ事ヲ取リシヨリ起レル氏ナリ。上古ノ氏ハ、カヤウニ職掌ヲソノマ、ニ付ケタルカ多シ。齋部、山部、服部、ナト擧ルニ暇アラズ。上古ハ云々、神ヲ祭ルコトハ、即チ政ヲスル本トナルモノナリ。政ノ字ヲマツリコト、訓メルモ、祭事ノ義ナリ。必竟スルニ、我國ニテ神ト崇メ奉ルハ、多クハ皇祖皇宗ノ御事ナリ。コノナルモ天照大神ヲ申スナリ。サレハ天皇ハ、ソノ御子孫トシテ、ソノ皇祖ノ定メラレタル御位ニ上リ玉ヒ、ソノ遺サレタル民ヲ治メ、ソノ開カレタル土地ヲ有シ玉ヘシハ、何事ヲナサル、ニモ先ツ皇祖ノ神靈ニ告ク玉フハ、孝道ノ大本ニシテ、實ニ我國倫理ノ大基礎ナリ。コト祭政一致トイフ。中臣氏ハ即チコノ御間ノ事ヲ預レル家ナリ。

その後、天照大神、始めて伊勢の國に鎮りまし。時、種子命の末、大鹿島命祭官になりて、鎌足大臣の父、小徳冠御食子までも、その官にて仕へたり。鎌足に至りて、大勳を立て世に寵せられしによりて、祖業を起し先烈をさかやかされける、止むことなき



事なり。かつは神代よりの餘風なれば、然るへき理<sup>こと</sup>とこそおほえ侍れ。後に内臣に任し、大臣に轉し、大織冠となる。<sup>正一位の名なり</sup>又中臣をあらためて、藤原の姓をたまへり。

始めて伊勢の國云々、彼ノ倭姫命ノ奉シテ伊勢ノ五十鈴ノ川上ニ鎮坐セシメ給ヒシヲイフナリ。小徳冠、位ノ名。大勳を立て云々、カノ入鹿誅戮以來ノ勳功ヲイフ。さかやかされ、輝シタルコトナリ。止むことなき、貴キ事ナリトナリ。かつは、一ツニハト云ハンガ如シ。神代よりの餘風云々、天兒屋根命以來コノ家ノ歴史ヲイフナリ。藤原云々、コノヨリ中臣氏ハ、古ノ如ク專ラ祭祀ノ事ニノミ預リ、藤原氏ハ、政治ノ事ヲ取ルニ至レリ。内臣トハ後ニイフ内大臣ノコト、藤原トハ大和ノ地名葛原ヨリ起レリ。コハ氏ニテ姓トハ云フヘカラサレトモ、早クヨリ慣例トシテカクカキシナリ。此事ハ折ヲ得テ委シク辨ヘン。

(ハ) 和氣清麿

(稱徳天皇記ノ中)

道鏡は、法王の位を授けられたりしを、猶あかずして、皇位につかんといふ志ありけり。女帝さすかに思ひわつらひたまひけ

るにや、和氣の清麿といふ人を勅使に差して、宇佐の八幡宮に申されける。大菩薩さま、託宣ありて、更に許されず、清麿皈參して、有のまゝに奏聞す。道鏡いかりをなして、清麿かよほろのすぢを断ちて、土佐の國に流しつかはす。

法王の位、稱徳天皇道鏡ヲ寵シ玉フアマリニ、法王ト云フ位ヲ設ケテ、ソレヲ與ヘラレタルナリ。コノ時ニハ、法王宮職ト云フ官省モ出來、マタ法參議ナトイヒテ、僧徒ニテ樞要ノ官ニナリシモノ頗ル多ク、名分ノ紊レタルト甚シカリキ。猶あかずして、道鏡ハソレニテモ飽キ足ラズシテ、天位ニ即ントセシナリ。女帝稱徳天皇ナリ。さすかに、シカスカニノ約レルナリ。本分ヲ失ハヌヲイフ。サウハサウナガラト云フガ如シ。女帝ハ道鏡ヲ愛シ玉ヘントモ皇位ニ即ントマデスルヲ思ヒ煩ラヒタマフナリ。宇佐八幡宮、伊勢ニツマキテ御崇敬アリシカバハル、御使ヲ立テ、伺ハセタマヒシナリ。大菩薩、八幡宮ノ事ヲカヤウニ佛徒ノ方ヨリ云フナリ。コレ本地垂迹ナド云フ説ニテ、取ルニモ足ラヌコトナリ。さま、託宣、我國家開闢以來、君臣定矣、以臣爲君、未之有也、天日嗣必立



皇緒無道之人、宜早掃除ナト宣ヒシ事ヲイフ。清麿ハ、コノ神教ヲアリノマヽニ御前ニ奏シタルナリ。故ニ道鏡ハ大ニ怒リテ、清麿カ神教ヲ矯シ者トシテ罪ヲ科セシナリ。よほろのすち、腰ノ筋ナリ。脚ノ筋ヲ切り斷チテ流罪ニ處セシナリ。土佐、コハ大隅ノ誤ナルベシ。清麿ノ姉法均コノ時、土佐ニ流サレツレバ、混セシモノト見エタリ。

清麿愁ひかなしみて、大菩薩を恨みかこち申しければ、小蛇出できて、その疵をいやしてけり。光仁位に即きたまひしかば、則めしかへさる。神威を賞び申して、河内國に寺を立て、神願寺といふ。後に高雄の山にうつしたつ。今の神護寺これなり。このころまでは、神威もかくいちしるき事なりき。道鏡終に望まじくせず、女帝もまた程なくかくれたまふ。宗廟社稷をやすくするとは、八幡の冥慮たりし上に、皇統を定め奉るとは、藤原の百代の朝臣の功なりとぞ。

かこち、歎クコトナリ。託ノ字ヲカク。俗ニカコツケルト云フモ、コレト全言ニ

ヤ。清麿ノカク歎キ恨ミシハ正義ノ棄レテ、邪説ノ行ハル、故ナルベシ。身ヲ決シテ事ニ當リシ、大忠臣ノイカデ一身ノ事ヲ恨ミ歎クコトアラシヤ。光仁位ニ即キ云々、コレ藤原百川ナドカ擁立セシナリ。百川ハ素ヨリ忠直ナリシ人ニテ、清麿トハ心合ヒノ中ナリキ。サレハ清麿カ不幸ニ陥リシ間ハ、ミツカラノ封戸ヲ割キテ救ヒタリシ事モアリキ。故ニ光仁天皇御即位後、直ニ清麿ヲ召シカヘサレシナリ。神威ヲ貴ヒ云々、八幡ノ神威ナリ。高雄ノ神護寺ハ山城國葛野郡ニテ有名ナル和氣氏ノ寺ナリ。宗廟社稷云々、コヽハ安クセシ。コトハ、マタ皇統ヲ定メ奉リシ。コトハ、功ナリキ。トゾナド過去ニ書クベキ所ナリ。傳寫ノ誤ニヤ。冥慮トハ、神ノ幽冥ニアリテ慮リ玉フコトヲイフ。コノ所ハ我歴史中尤研究シオクヘキ所ナリ。能々心ヲトメテ考フベシ。

(ト) 人道論

(嵯峨天皇記の中)

凡そ男夫は稼穡を勤めて已も食し、人に與へても飢るさらしめ、女子は紡績を事として、みづからも衣、人をもあたゝかならしむ。賤しきに似たれども、人倫の大本なり。天の時に隨ひ地の



利によれり。

數語簡單ニシテ能ク男女ノ道ノ大本ヲ説キ盡サレタリ。文章泥マズカアマリアリ。

この外、商估の利を通ずるもあり、工巧の態を好むもあり、仕官に心さすもあり、これを四民といふ。仕官するにとりて文武の二道あり。座して以て道を論ずるは、文士の道なり、この道に明かならば、相とすに足れり。征て以て功を立つるは、武人のあさなり、このわざに譽あらば、將とすに足れり。されば、文武の二は暫くも捨てたまふへからず。世亂れたる時は、武を右にし、文を左にす。國治まれる時は、文を右にし、武を左にすともいへり。古に右を上にする、よりにてしかいふなり。かくのことくさまと、なる道を用ゐて、民の愁ひを休め、各あらそひなからしめん事を本とすべし。民の賦歛を厚くして、みづからの心をほしきまゝにするとは、亂世亂國の基なり。

商估、商業ニ従事スル人ナリ。工巧、工業ニ従事スル人ナリ。仕官、官員ニナラントスル人ナリ。四民、農商工士ナリ。コノ中農カ本ナレハ、初ニカ、レシナリ。座シテ云々、コレ文官ノ務トスル所ナリ。相トハ宰相ノコト。征て以て云々、コレ武官ノ職トスル所ナリ。將トハ大將ノコト。文武左右ノ説ハ時ニ隨テ輕重アルズキタイヘルナリ。民の賦歛云々、賦歛トハ税ノ事ナリ。ソレノミチ厚ク重クシテ上タル人ハ我カ愁ノマ、チナサバ、民人争ヒ起リテ國家亂世ノ基トナルモノナレハ、能ク注意スヘシトナリ。四民ノ中ニテモ上ニ立ツ人ノ心持ヲ專ラ戒メラレタルナリ。

(チ) 國を治め、身を修むる道を論ず (全上)

抑も民を導くにつきて、諸道諸藝皆要樞なり。古には詩書禮樂を以て、國を治むる四術とす。本朝は四術を立てらるゝとたしかならされども、絶傳、明經、明法の三道に、詩書禮を攝すへきにこそ、算道を加へて四道といふ。代々に用ゐられ、其職をおかるとことなれば、委しくするすにあたはず。醫、陰陽の兩道またこ



れ國の至要なり。

抑モ、コノ詞ハ上ヲ承ケテ下ヲ起ス時ニ用井ルガ本ナリ。サレバコノモ上ニ  
況ヤ人ノ臣トシテ、ソノ職ヲ守ルヘキニ於テチヤト云フ語アルヲウケタルナ  
リ。サレバソノ文ヲモ引クヘキナレドモ、冒頭ニ引クヘキ語ナラチバ、カク抑モ  
ヨリ採リ用非タリ。決シテ抑モテ發語トオモフヘカラズ。要樞、大切ナコト  
ト云フカ如シ。古ニハ云々、支那ノ古チイヘルナリ。本朝ハ云々、紀傳、明經、明  
法算ハ大學寮ノ學科ナリ。サレドモコノ頃ハ既ニ滅ビテ、タマソノ家々ノ學問  
トナレルナリ。紀傳ハ歴史科、明經ハ修身及ビ政治科、明法ハ法學科ナリ。コノ三  
道ニ詩書禮ハ攝行セラル、トナリ。算道ハ獨立セリ。醫ハ醫道、陰陽ハ陰陽道ナ  
リ。醫者ハ申スマテモナシ。陰陽ハ當時ソノ寮サヘアリテ盛ニ行ハレシモノナ  
リ。

金石絲竹の樂は、四學の一にて、専ら政をす本なり。今は藝能  
のことくに思へる、無念の事なり。風を移し俗を易ふるには、樂  
よりよきはなしといへり。一音より五聲十二律に轉して、治亂

を辨へ、興衰をしるへき道とこそ見えなれ。

詩書禮樂トイヒタル、ソノ樂ヲ論セルナリ。無念、今云フト全シ、風ヲ移シ、俗ヲ  
云々、實ニ音樂ハ、人ヲ善ニモ惡ニモ導クモノナレバ、古人モカク云ヘリシナ  
リ。一音より云々、五聲トハ、宮、商、角、徵、羽ナリ。五音トモイフ。十二律、六律六呂  
チイフ。六律トハ、黃鐘、大簇、姑洗、蕤賓、夷則、無射チイヒ、六呂トハ、大呂、夾鐘、仲呂、林  
鐘、南呂、應鐘チイフ。凡ソ音樂ハコレヲノ律呂ニ叶ヒテ治亂興衰ヲ知ル道トナ  
ルモノニシテ、感ミノモノニハアラズ。

又詩賦歌詠の風も、今の人の好むところ、詩學の本には異なり。  
まかれども、一心より起りて、よろづの言の葉となる、末の世な  
れども、人を感じせしむる道なり。これをよくせば、僻をやめ、邪を  
防く教なるべし。かよれば、いづれか心の源を明め、正に返る術  
なからん。輪扁が輪を削りて、齊の桓公を教へ、弓工か弓をつく  
りて、唐の太宗を悟らしむる類もあり。乃至圍碁、彈碁の戲まで  
も、愚なる心を治め、輕々しきわざを留めんが爲なり。但その源



にもどづかずとも、一藝は學ぶべき事にや。孔子も飽食終日心を  
用ゐるところなからんよりは、博奕をだにせよと侍るめり。  
まして一道をうけ、一藝にもたつさはらん人、本を明め理をさ  
とる志あらば、これより理世の要ともなり、出離のはかりこと  
よもなりなん。一氣一心にもどつけ、五大五行により、相剋相生  
を知り、みづからもさとり、他にもさとりしめん、萬の道その  
理一つなるべし。

詩學の本には異なり。今人詩歌トイヘバ、タゞ花鳥風月ニ浮カル、コト、ノ  
ミ思ヒテ、彼ノ邪無シト云フ所ニ眼ヲツクルモノ、少キテイハレタルナルヘ  
シ。しかれども云々、サハイヘ、人ノ眞ノ一心ヨリ起リテ、萬ノ言ノ葉トナレル  
モノナレバ、本ニハ異ナレドモ、人ヲ感セシメテ、僻邪ヲ防ク、教トハナルヘシト  
ナリ。かゝれば云々、カヤウニ論シテ見レバ、世ニ行ハル、モノ孰レカ人ノ心  
ノ源ヲ明ラメテ、正ニ皈ル術ナキモノアラントナリ。輪扁加云々、コハ莊子天  
道篇ニアルコトニテ、輪扁アル時、齊ノ桓公ガ書ヲ讀ミ居リシテ見テ、讀書ハ古

人ノ糟粕ノミ。自ラ心ヲ養ハシカズトノ意ヲ、オノレガ輪ヲ削ル術ニ徴  
シテ、教ヘタルコトアルタイフ。弓工加云々、コハ貞觀政要ニアルコトニテ、弓  
工アル時、太宗カ良弓十數ヲ示シテ、誇リケルニ、工、木心正シカラサレハ、脉理皆  
邪ナリ、弓剛勁トイヘ、箭ヲ遣ルニ直ナラズトイヒシヨリ、太宗大ニ悟リテ、治  
國ノ道ノ六ツカシキヲ感セシコトアリ。イツレモ有名ナル故事ニテ、心ヲ正ス  
ガ本ナルコトタイフナリ。乃至、若クハトイハシガ如シ、彈棊、今世ハアマリ  
ナケレドモ、古ハ專ラ行ハレシモノナリ。コレラノ遊戯モ、大カタ未ニノミ流レ  
タレドモ、ソノ本ハ心ヲ正シクスルニアルモノナリ。出離、俗界ヲ脱スルコト。  
五大五行、大トハ地、水、火、風、空、行トハ木、火、土、金、水ナリ。相剋、相生、トハ五行  
ノ相配合スルコトタイフナリ。タトヘハ、木ハ火ヲ生シ、水ハ火ニ剋ツ類ナリ。コ  
レラハ、イツレモ陰陽學ノ盛ニ行ハレシコロニイヒシモノナリ。深く考ヘント  
思フナラハ、ソノ道ノ書アマタアラン。  
コノ二章ノ論ハ、人ノ身ニトリ、國ヲ治ムル事ニ於テ、最モ大切ナル事ナリ。議論  
公平、能クソノ要ヲ得、文章マダ優ナリ。コノ識見アリ、コノ文章アルモノ、天下今



幾人カアル。猶原書ニヨリテ前後ノ文テモ味ヒ見ルベシ。

(清和天皇記の中)

(リ) 冬嗣及び良房

大かたこの大臣、遠きおもんばかりおぼしけるにこそ。子孫親族の學問を勧めんために、勸學院を建立す。大學寮に東西の曹司あり。菅江の二家、これをつかさとりて、人を教ふるところなり。

この大臣、冬嗣公ノ事ナリ。公ハ内麻呂ノ子ニテ閑院大臣トイハレシ人ナリ。遠き慮云々、目前ノ事ニアラズ遠慮アリタテアラウトナリ。ソハ子弟教育ノ事ヲ厚ク世話セラレシ事トイフナリ。勸學院、三條ノ北、壬生ノ西ニアリキ。弘仁十二年ニ、大臣自己ノ俸祿ヲ割キテ建テラレシナリ。大學寮に云々、大學寮ハ、今ノ大學ノ如シ。紀傳、明經、明法、書算ノ諸道ニ分科セリ。菅原大江ノ二氏ハ、紀傳道ノ(歴史文章ナリ。後專ラ文章ヲ主トシテ文章道トイヒタリ。博士タリ。故ニ)ユノ二氏ニテ東西ノ二曹ヲ建テタルナリ。東曹ハ大江音人、西曹ハ菅原清公。かの大學の南に、この院を立てられしかば、南曹とぞ申すめる。

氏の長者たる人、むねど、この院を管領して、興福寺及びひ氏の社の事を取行はる。

南曹、勸學院ヲ大學ノ南ニ建テラレツレバ、東西ノ二曹ヲ東曹、西曹トイフ例ニテ、ヤガテ南曹トイフトアリ。申すめるハ申スサウシヤノ義。氏の長者、一氏ノ中ニ各々ソノ譜第官位ノヨキ家ヲ長者ト云ヒテソノ一族ノ頭ニセシムルナリ。ユハ藤原氏ノミニハ限ラザリキ。むねど、專ラトナリ。興福寺、奈良ニアリ。山科寺トイヒタリ。藤原氏ノ氏寺ナリ。今ハ滅ビテ塔ノミノコレリ。氏の社、即チ春日大明神ナリ。コレハ藤原氏の氏神ナリ。鹿島、香取、天兒屋命比咩神ヲ祭ル。

良房の大臣攝政せられしより、かの一流に傳はりて、絶えぬことになりけり。幼主の時はかりかとおぼえしかど、攝政關白も定まれる職になりぬ。おのつから攝關といふ名をとゞめらるゝ時も、内覽の臣をおかれたれば、執政の義かはるとなし。

良房、冬嗣公ノ子ナリ。攝政、天子幼沖ノ御時ニオクモノナリ。古ハ皇族ナリ



シテ、コノ時ヨリ藤氏ノ職トハナレリ。關白、天下ノ政ヲ關リ白スト云フ事ニテ、攝政ヲカヘシマツリテ後ニ、尙天皇ヨリ命令アル時ニ置ク職ナリ。攝關トハ攝政關白ヲ畧シテイフ語。内覽、内ニ政ヲ覽ル義ニテ、名ユソカハレ、ソノ實ハ攝關トカハリナケレバ、カクイハレタルナリ。

藤原氏ハ天兒屋命以來、朝政ヲ輔ケマツリシ家ニテ世々顯職ニアリシモ、カノ鎌足、不比等、房前、サテハコノ冬嗣、良房ノ大臣ヲ經テ愈々ソノ勢威強大ニ赴キタリ。

(又) 皇位御繼承の事を論ず

(光孝天皇記の中)

我國は神國なれば、天照大神の御はからひにまかせられたるにや。されど、その中に御誤あれば、曆數も久しからず、又終に正路に叛れども、一旦も沈ませたまふためしもあり。これは皆みづからなさせたまふ御科なり。冥助の空しきにはあらず。

天照大神云々、我皇統ハコノ大神ノ御正系万世連綿天壤ト窮リナクオハシマセバ、何事モコノ太神ノ御ハカラヒニヨルコトナラントナリ、これは皆云々、

四六  
四七

曆數久シカラズオハシマス天皇モアレド、ソレハ自ラノ御科ナリ。神ノ御守ノ空シキニハアラズトナリ。

佛も衆生を導きつくし、神も萬姓をすなほならしめんとこそしたまへども、衆生の果報しなぐに、うくる所の性おなじからず。十善の戒力にて、天子とはなりたまへども、代々の御行迹善悪又まぢくなり、かゝれば、本を本として、正に販り、元を元として、邪を捨てられん事ぞ、祖神の御心には叶はせたまふべき。

前テウケテ論スルナリ。佛も云々、衆生トハ人間ノ事ナリ。神モ佛モ人間ヲ直キモノニナサント思ヒタマヘトモ、衆生ノ果報サマクニシテソノ性同シカラサルタメニ、佛神ノ御心ノマ、ニハエカヌトナリ。十善、佛家ニテイフコトナリ。不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不飲酒、不食肉、不貪瞋、不邪見、不毀謗、不欺誑、コレテ十善トイヒ、天子ノ位ヲ十善ノ位トイフナリ。

神武より景行まで十二代は、御子孫そのまゝに續かせたまへ



り。疑はしからず。日本武尊、世を早くしましよによりて、御弟成務へだより玉ひしかど、日本武の御子にて、仲哀傳へましくぬ。仲哀應神の御後に、仁德傳へたまへりしが、武烈惡王にて日嗣絶えましくし時、應神五世の御孫にて、繼躰天皇撰はれ立ちたまふ。これなむ珍らしき例に侍る。されど、二つをならべて争ふ時にこそ、傍正の疑もあれ、群臣皇胤なき事を愁へて求め出て奉りし上に、その御身賢にして、天の命をうけ、人の望に叶ひましよければ、どかくの疑あるべからず、その後相續きて、天智天武御兄弟立ちたまひしに、大友の皇子の亂により、天武の御流、久しく傳へられしに、稱徳女帝にて、御嗣もなし。又政も亂りかばしく聞えしかば、たしかなる御讓なくて絶えにき。光仁又傍より撰はれて立ちたまふ。これなむ又繼躰天皇の御事に似たまへる。然れども、天智は正統にてましよき。第一の御子大友こそ、誤りて天下を得たまはさりしかど、第二の皇子に

て施基の御子御科なし。その御子なれば、この天皇の立ちたまへること、正理に歸るとぞ申し侍るべき。今の光孝又昭宣公の撰にて立ちたまふといへども、仁明の太子文徳の御流なりしかど、陽成惡王にて退けられたまひしに、仁明第二の御子にて、しかも賢才諸親王に勝れましよければ、疑なき天命とこそ見え侍れ。かやうに傍より出てたまふこと、これまで三代なり。人のなせる事とは心得奉るまじきなり。さきにしるし侍る理をよよく辨へらるべきものかな。

前ヨリノ論ヲ儘ニスルヲメニ御歴代繼承ノ例ヲ引キ來レルナリ。ヨノ條文ハ一通リキコエタレド、初學ノ人ハ、御系圖ニ明カナラサレバ、分リニクキコト多カルベシ。故ニ明瞭ニ悟ラシムルヲメニ御畧系ヲ記スミン。

日本武云々

第十二代  
○景行天皇

國文講義

神皇正統記 皇位御繼承の事を論ず



日本武尊  
第十三代  
成務天皇

第十四代  
仲哀天皇

第十五代  
應神天皇

第十六代  
仁德天皇

カクノ如ク御父子繼キ玉フガ古例ナリ。成務天皇ノミ御兄日本武尊早世ノ  
タメニ隔リ玉ヘルナリ。武烈天皇ハ即仁德天皇ノ御末ナリ。惡王にてトハ  
甚シキカキサマナレド日本紀ニ既ニソノヤウニカキタレバソヲ受ケラレシ  
ナリ。サレトコハ誤ナルコト近頃ハ誰モ知り奉リ居ルコトナリ。  
應神五世の御孫にて云々。ニハ誠ニ珍ラシキコトナリ。

○應神天皇

一世  
稚瀍毛二派皇子

二世  
意富々村王

三世  
宇非王

四世  
彦主人王

五世  
繼躰天皇

我國ニテ皇統ノ危カリシコト、コノ御時ヨリ甚シキハナカリキ。されど云々、  
コノ天皇ノ御上ノ事ヲイヘルナリ。傍トハ正系ナラヌ(即父ノ跡ヲ子繼クト云  
フ如キ)事ヲイフ。天智、天武、繼躰天皇ノ御末ナレバ、天武ノ御流云々、文  
武、元正、聖武、孝謙、皆天武天皇ノ御末ナリ。稱徳云々、道鏡、押勝等ノ事ヲイフ。光  
仁、天智天皇ノ御末ニテ御位ニ即キ玉ヘルコトガ繼躰天皇ノ故事ニ似タリト  
ナリ。今の光孝云々、



第五十四代  
○仁明天皇

第五十五代

文德天皇

第五十八代

光孝天皇

第五十六代

清和天皇

第五十七代

陽成天皇

仁明の子文徳の御流トハ陽成天皇ノ事ナリ。仁明第二の御子トハ即光孝天皇ノ事ナリ。傍より出ツトハ陽成ノ御跡ナラズシテ光孝ノ繼キ玉ヘルヲイフ。カヤウノ事トモニ天命トナリ。惡王ノ字アマリニ書キ過サレタリ。三代ナリ。繼躰ト光仁ト光孝トヲ申スナリ。

光孝より上つかたば、一向上古なり。よるつゝの例を勘ふるも、仁和より下つ方をそ申すめる。古すら猶かゝる理にて、天位を嗣

きたまふ。まして末の世にはまさしき御ゆづりならては、保たせたまふまじき事と心得奉るべきなり。

コレハ餘論ナリ。當世ヲ諷シテカケルコトノ書ノ本色ナリ。

(ル) 菅原道眞 (醍醐天皇記の中)

醍醐天皇は宇多第一の御子、御母は贈皇太后藤原胤子、内大臣高藤の女なり。云々大納言左大將藤原時平、大納言右大將菅氏、兩人上皇の勅を受けて、輔佐し申されき。後に左右の大臣に任して、共に萬機を内覽せられけり。御門十四にて位につきたまふ。おさなくまししくしかども、聰明叡哲にきこえたまひき。

上皇、宇多院ナリ。萬機を内覽せられけり。萬機トハ天子ノ爲シタマフ政ヲイフ。内覽トハ内々ツノ政令ヲ覽ラル、義ニテ輔佐大臣ノ職ナリ。

兩大臣天下の政をせられしが、右相は年もたけ、才も賢りて、天下の望むところなり。左相は譜代の器なりければ、捨てられか



たし。ある時上皇の御在所、朱雀院に行幸、猶右相に任せらるべしといふ定めありて、既にめしおほせたまひけるを、右相固く遁れ申されて止みぬ。

右相は云々、菅公ハ年長クテ、學才モアリケレバ、天下ノ人望アリキ、時平公ハ藤原氏譜第ノ人ニテ、コレモ捨テラレカダシトナリ。猶右相に云々、カ、ルホドニ天皇一日、朱雀院ニ行幸アリテ、右相ヲ召サシ、父上皇ト共ニ、政ハ專ラ任セラルヘキヨシ仰セラレタリ。猶ト云フハ、兩大臣アレトモ、矢ハリ右相ノ方ニ任セムト決シ玉ヘル意ナリ。固く遁れ云々、右相ハ固辭シテ受ケラレザリシカハ、ソノマ、ニ止ミキトナリ。コレ門閥モナクシテ、大臣ニ昇リ、左相ニ惡マル、コトヲ知リタマヘンバナラム。

その事世にもれにけるにや、左相憤を含み、さまざまの讒をまうけて、終に傾け奉りしことこそあさましけれ。この君の御一失と申し傳へ侍り。但菅氏は、權化の御事なれば、末世のためにもやありけむ。ばかりがたし。

その事世にもれ云々、右相ニ内々勅セラレタルコトノ世ニ洩レ聞エタルニ、ヤトナリ、左相憤を含み云々、カテテ憎キモノニセラレタルニ、カ、ル事サヘキコユルヲ安カラヌコトニ思ヒ、種々ニ口實ヲ設ケテ、遂ニ右相ヲ罪人ニ傾ケ奉リシコソアレタル事ナレトナリ。この君の御一失、天皇ノ轍ク左相ノ言ヲ聽カレテ、右相ヲ左遷セシメラシコトハ、御一失ト申シ傳ヘタリトナリ。但菅氏云々、コハ著者ノ考ヘナリ。權化トハ、本身佛ニテ假ニ人ニ化生シテアル貴キ者ヲイフ。菅公ヲシテ取ナサレタルナリ。末世のため云々、右相ハコレガ爲ニ後ニマテ、天神ト稱セラレテ祭ラレ、又人ヲモ守リタマフトオモヘハ、反ツテ世ノタメニモヤアラムトナリ。

善相公清行朝臣は、この事いまた萌さゞりしに、かねて悟りて、菅氏に災を遁れたまふべきよしを申しけれど、沙汰なくてこの事出来ぬ。さきにも申し侍りし、わが國には幼主のたぢたまふこと、昔はなかりしことなり。貞觀元慶の二代始めて幼にて立ちたまひしかば、忠仁公、昭宣公、攝政にて天下を治めらる。



この君は十四にて、まけつぎたまひて、攝政もなくて御みつか  
ら政を知らせまじくける。

善相公、三善清行ナリ。コノ人菅公ニ早ク位ヲ去ラレヨト忠告セラレシコト  
アリシナイフナリ。菅公ハコレヲ入レテ一身ノ安全ヲハカラムハ人臣タルモ  
ノ、爲スヘキコトナラズ、身ヲ殺シテモ忠義立セムトノ心ヨリ途ニコノ災ニ  
カ、ラレシナリ。コレ實ニ菅公ノ貴キトコロナリ。我説行ハレズトテ朝廷ヲ去  
ルハ眞ニ國家ヲ擔フ大臣ノ處置ニハアルベカラズ。貞觀、清和天皇ノ時元  
慶、陽成天皇ノ時忠仁公、良房、昭宣公、基經ウけつぎ、位ヲ受繼ギタマヘ  
ルコトナリ。  
猶御幼年の故にや左相の讒にも迷はせたまひけむ。聖も賢も  
一失はあるへきにこそ。その趣經書に見えたり。されは曾子に  
は我日三省吾躬といふ。季文子は三思といふ。聖徳のほまれま  
しまさむにうけても、いよく慎みますべき事なり。  
猶御幼年、矢ハル天皇御幼冲カラシテカ、ル御過モアリシト見エタリトナ

リ。曾子、季文子、共ニ名高キ賢人ナリ。論語ニ見ユ。

昔、應神天皇も、讒をきかせたまひて、武内大臣を誅せられむと  
したまひき。かれはよくのがれて明められたり。このたひの事、  
凡慮に及ひかたし。ほどなく神とあらはれて、今に至るまで靈  
驗無双なり。末世の益を施さむため、や、讒を入れし大臣は後  
なくなりぬ。同心ありける類も皆神罰を蒙りにき。

應神天皇云々、コハ味甘師内宿禰ガ兄武内宿禰ヲ讒セシコトナイフ。ソノ時  
已ニ大臣ヲ誅セムトセラレシニ、事理明カニ分リテソノマ、ニスミシコトア  
リ。このたひの事云々、昔ハ讒言キカレズシテ濟ミシガ、コノ度ノ人ハマコト  
ニイカムトモナシカタク、凡人ノサトリエカタキコトナリトナリ。程なく神  
と云々、菅公ハ幾程モナク天滿天神トアラハレテ、世ヲ守リタマフニ至レル  
ナイフ。讒を入れし云々、時平公ノ方ハ一時勢力アリシカトモ、ソノ後モ絶エ  
剩ヘンノ同心ナリシ人々モ悉ク神罰ヲ蒙リキトナリ。右相ノ一時難ヲ蒙リ玉



ヒシモ万世ノ下マテ神トナリテ世ヲ守リタマフナド到底凡人ノ智ニテハ悟  
リ得カタシトナリ。故ニ先ニ權化トハカ、レタリ。

(チ) 平治の亂

第七十八代二條院、諱は守仁、後白河の太子、御母は贈皇太后藤  
原の懿子、贈太政大臣經實の女なり。戊寅の年即位、己卯に改元  
年號を平治といふ。右衛門督藤原の信賴といふ人あり。上皇い  
みじく寵せられたまひて、天下の事をさへきかせらるゝまで  
になりければ、おごりの心も萌して、近衛の大將を望み申し  
よを、通憲法師諫め申してやみぬ。その時源義朝朝臣が、清盛朝  
臣におさへられて、恨みを吞めりけるを、相語らひて、叛逆を思  
ひ企てけり。保元の亂には、義朝が功高く侍りければ、清盛は通  
憲法師が縁者になりて、殊の外にめしつかはる。通憲法師清盛

等を失ひて、世を恣にせむとぞ、はからひける。

天下の事をさへ、天下ヲ治ムヘキ事マデモトイフナリ。通憲、少納言信西ナリ  
コノ時、上皇テイタク諫メテ、安祿山ノ圖ヲカキテ奉リシコト平治物語ニ見ユ。  
源義朝云々、保元ノ亂以後、トカク清盛ノ威勢強ク、義朝ハ功臣ナガラ押ヘツ  
ケラレタレハ恨ヲ吞テ居タリシナリ。吞めりけるハ吞ミテアリケルノ約言ナ  
リ。清盛は通憲法師の縁者、通憲ノ子成範ガ妻ハ清盛ノ女ナレバナリ。通憲ハ  
殆ト天下ノ執權ノ如キサマナリケレバ、ソノ縁者ノ關係ニテ、清盛モ特別ニ寵  
遇ヲ蒙リ君ノ御召シ使ヒニナルトナリ。カ、レバ信賴愈憤リニタヘズ、コレヲ  
ヲ殺サムトハ思ヒ立シナリ。

清盛熊野に詣てける隙を窺ひて、まづ上皇の御座の三條殿と  
いふ所をやきて、大内に遷し申し、主上をも傍に押しこめま  
る。通憲法師遁れ、かたぐやありけむ、自ら失せぬ。その子どもや  
がて國々へ流しつかはす。通憲も才學あり、心もさかしければ、



己が非を知り、未萌の禍を防ぐまでの智分や欠けたりけむ、信頼か非をは諫め申しけれど、わが子どもは顯職顯官に登り、近衛次將などにさへなし、參議以上にあがるもありき、かくて失せにしかば、これも天意に違ふところありといふことは疑ひなし。

熊野、紀伊熊野權現ナリ。まづ上皇の御座云々、信頼ノ此叛逆ノ事、平治物語ニ詳ナリ。今摘録セムニ、信頼卿ハ左馬頭義朝を大將として、其勢五百餘騎、院の御所三條殿へ押し寄せ、四方の門々を打固め、右衛門督(信頼ガコト)乗りながら年來御いとほしみを蒙つるに、信西か讒によりて、信頼討たれまゐらすへきよし承り候間、誓の命助らむ爲に、東國へこそまかりけり候へど申せば、上皇大におどろかせたまひて何ものか信頼を失ふへかりつるぞとておきれさせ給へば、伏見源中納言師仲卿、御車をさしよせ、急きめさるへきよし申されければ、はや火をかけよと聲にそ申しける。上皇あわて、御車にめさるれば、御妹上西門

三〇

院も、一つ御所にわたらせ給ひけるが、御同車にぞ奉りける。中層前後左右に打圍みて大内へ入れまゐらせ、一本御書所に押しこめ奉る云々、トアルニテ知ルベシ、主上をも傍に押しこめ奉る、黒戸ノ御所へ押ユマツリシナリ。カクテ信頼紫宸殿ニ着座シアマタノ公卿ヲ參賀セシメシト同書ニ見エタリ。不届ノ奴ト云フベシ。通憲法師云々、信西ハ殺サレ、其子等ハ流サレシ事等、悉ク同書ニ詳ナリ。心もさかしけれど、サカシトハ賢キトナリ。わが子どもは云々、通憲ノ子俊憲ハ參議、成憲ハ近衛中將、長憲ハ少將、貞憲ハ右中辨ナリキ。天意に違ふことあり、オノガ一族ヲサマデニ顯官顯職ニ就カシメテ、榮花ヲ誇リシ果トシテ、遂ニ信西ハ殺サレ、一族ハ流サレタルト、コレモ天意ニ違ヘリトナリ。清盛この事を聞き道よりのほりぬ。信頼かたらひおきける近臣等の中に、心かばりする人々ありて、主上、上皇をしのびて出し奉り、清盛が家に遷し申してけり。則信頼義朝等を追討せらる。程なく打ちかちぬ。信頼は捕はれて首をさらる。義朝は東國



へ心さして遁れしかど、尾張の國にてうたれぬ。その首を梟せられにき。

清盛云々、切部ト云フ所ヨリ引キカヘシテ上リシナリ。近臣等ノ中云々、別當惟方、新大納言經宗等、帝ヲス、メテ清盛カ六波羅ノ邸ニウツシマツリ、藤原成頼、上皇ヲ仁和寺ニ潛幸マサシメタルナリ。信賴ハ捕れて首をきらる。信賴ハ待賢門ノ戦ニ、重盛ニ追ヒマクラン、ソノヨリ戦破レテ義朝ト共ニ落行ケルガ、アマリニ臆病ナルマ、ニ義朝鞭ニテ信賴カ頬ヲ打テ追ヒ返シタリ。信賴遂ニ捕ハレテ、命乞ヒセシカトモ叶ハズ、六條河原ニテ斬ラレタリ。義朝は東國へ云々、義朝ハ東海道ヲ下リ、尾張國野間ニ行キ、長田忠致トテ、カチヲ知リタル家ヲタヨリ行キシガ、遂ニソノガ爲ニ殺サレタリ。ソノヨリ平氏全盛トナリテ、世ハ赤旗ノミ打靡クコト、ハナリヌ。

義朝重代の兵たりし上、保元の勳功すてられかたなく侍りしに、父の首をきらせたりし事、大なる科かなり。古今にもきかず、和漢

にも例なし。勳功に申し替ふるとも、みづから退くとも、などか父を申し助る道なかるへき、名行かけはてにければ、いかでか終にその身を全くすべき、滅ひぬる事は天の理なり。凡そかゝる事は、その身の科はさることにて、朝家の御誤なり、よくよく案あるへかりける事にこそ。

コレヨリハ親房卿ノ論ナリ。重代の兵、頼義、義家以來世々武士ノ棟梁タルヲイフ。保元の勳功云々、カン時ニ父爲義ヲ斬ラセタルコトヲイフナリ。勳功に申し替ふる云々、重代ノ兵ニシテ且保元ノ勳功モ高カリケレハ、自分ノ功ニ申シカヘテ父ヲ助ルトモ、自ラ官ヲ退イテ父ヲ助ルトモ、ナソテ、ソノ道ノナキコトアルベキ、名行トモニ欠ケタル義朝ナレバ、カクアサマシクナリヌルコトモ天理ナリトナリ。必竟忠孝ノ道ニ欠ケタルモノハ、全盛タルヘキ理ナキヲ論セラレタルナリ。その身の科はさる事にて、自身ノ科ハ然ルヘキコトニテ、モトヨリナレトモ、一ニハ朝家ノ御誤ナリトナリ。



その頃名臣もあまたありしにや、又通憲法師専ら申し行ひしに、などか諫め申さざりける。大義に滅親といふことのあるは、石碯といふ人、その子を殺したりし事なり。父として不忠の子を殺すは理なり。父不忠なりとも、子として殺すといふ道理なし。孟子に譬をとりて、いへるに、舜の天子たりし時、その父瞽叟人を殺す事あらむを、時の大理なりし臯陶とらへたらば、舜はいかしたまふべきといふに、舜は位をすて、父を貢ひてぞ去らましとあり。大賢の教なれば、忠孝の道あらはれておもしろく侍り。保元平治より以來、天下亂れて、武用さかりに、王位輕くなりぬ。いまだ太平の世にかへらざるは、名行の破れそめしによれる事とぞ見えたる。

通憲法師云々、専ら天下ノ事ヲ執行セシニ何故ニ爲義殺シノ事ヲ諫メマツ

ラサリシカトナリ。大義滅親云々、左傳魯隱公四年ノ所ニアリ。カ、ル事モアレドモ、ソレハ父トシテ子ニ及ボシタル時ノ事ナリ。父不忠ナリトテ、子トシテ殺スヘキ理ナシトナリ。孟子に云々、大理トハ刑法官ナリ。舜ノ事ナラバカクゾアラムト孟子ニ譬ヘニシテイヘリ、コレ實ニ人ノ子タルモノ、道ゾトナリ。コノ論ハ必竟名行ヲ本トシテ論シタルモノニテ、實ニ東洋倫理ノ最モ肝要ナル所ナリ。百万卷ノ書ヲ讀ムトモ、コノ道ニ通セザレバ、禽獸ニ異ナルコトナカラム。ヨク、讀ミ味フベシ。

(リ) 登庸論

(後醍醐天皇記の中)

凡そ政道といふことは、所々に志るし侍れど、正直慈悲を本として、決斷の力あるべきなり。これ天照大神の明かなる御教なり。決斷といふにとりて、あまたの道あり。一にはその人を撰ひて官に任ず、官にその人ある時は、君は垂拱してまします、されは本朝にも異朝にも、これを治世の本とす。二には國郡を私に



せず、分つところ、必ずその理のまゝにす。三には功あるをば必ず賞し。罪あるをば必ず罰す。これ善を勧め、惡を懲す道なり。これに一も違ふを亂政といへり。

正統記中後醍醐天皇ノ條ハ、最モカチユメラシタルモノナレバ、字々句々皆感慨ナラサルハナシ。ユノ論ノ如キ必竟足利ナドノアルマサキ寵遇ヲ蒙リテ天下ヲ擅ニセルヲ慨セラレシアマリニカ、レシモノナリ。君ハ垂拱、手ヲ撰キ垂レテ治ルト云フコトニテ、世話ヤケズニ太平ニナルト云フ義ナリ。官ニソノ人アルヲ政道ノ第一トシ、國郡ヲ理ニヨリテ分ツテ第二トシ、眞ニ功アルモノヲ賞スルヲ第三トシテ論スルナリ。而テ暗ニ今ハコノ三ノモノ違ヘルコトイヘルナリ。

上古には勳功あればとて、官位をすゝむることはなかりき。常の官の外に、勳位といふ階をおきて、一等より十二等まであり。無位の人なれど、勳功高くて、一等にあがれば、正三位の下、從三

位の上、に列るへしとそみえたる。又本位ある人のこれを兼ねたるもあるべし、官位といへるは、上三公より下諸司の一分に至る、これを内官といふ。諸國の守より史生郡司に至る、これを外官といふ。天文にかたどり地理に法とりて、各つかさとする方あれば、その才なくては、任用せらるへからさることなり。名と器とは人にかさずともいひ、天のつかさに人それ代るともいひて、君のみだりに授るを謬舉とし、臣のみだりに受るを尸祿とす。謬舉と尸祿とは、國家のやぶるゝ階、王業の久しからさる基なりとぞ。

コノ段ハ上ノ論ヲ確實ニセム爲ニ例ヲ引イテイヘルナリ。勳位ノ説ハ、太寶令ノ制ナリ。コレハ一等ヨリ十二等マテアリテ、文武有功ノ者ニ賜ハルコトナリ。古ハ位ヲ以テ朝廷ニテノ席次ヲ定メアレトモ、勳一等ノ人ハ、タトヒ無位ナリトモ、從三位ノ上ニ列スルコトヲ得トナリ。上三公より云々、三公トハ大政大



臣、左右大臣、一分トハ諸官省ノ最モ下級ノ吏ヲイフナリ。内官、京都ノ官省ニ務メタル吏員、外官トハ地方官ナリ。必竟官職ハ天文地理ニ象リテ設ケタルモノナレハ、凡庸ナル徒ニテ任スヘカヲサルヲイフナリ。戸祿トハ無用ノモノガ官祿ヲ食ムヲイフナリ。戸位素餐ナト云フコトモアルナリ。

昔人を撰ひ用ゐられし日は、まづ徳行を盡す。徳行同じければ、才用あるを用ゐ、才用ひとしければ、勞効あるをとる。又徳義、情愼、公平、恪勤の四善をとるとも見えたり。又格條には、朝に廝養たれども、夕に公卿に至るといふことの侍るも、徳行才用によりて、不次に用ゐらるへき心なり。

コレモ大寶ノ制ヲヒキテイヘルナリ。徳行才用云々ノ事ハ、選叙令ノ文、四善ノ事ハ考課令ノ文ナリ。選叙令ハ官吏登庸ノ法、考課令ハ官吏ノ進級調退ノ法ヲ規定セルモノナリ。格條、コレハ臨時ニフレン出サレシ勅令ヲイフナリ。古ハ律令格式トテ四ツノ法典アリテ、國ヲ治ムル本トセラレタルナリ。

寛弘よりあなたには、誠に才賢ければ、種姓にかゝはらす將相に至る人もあり、寛弘以來は、譜第を先として、その中にて才もあり徳もありて、職にかなひぬべき人をぞえらばれける。世の末にみだりがはしかるべき事を、誠めらるゝにやありけむ、七ヶ國の受領を経て、合格して公文といふことか、かへぬれば、參議に任すと申しならはしたるを、白河の御時、修理正顯季といひし人、院の御乳母の夫にて、時のきらならぶ人なかりしが、この勞をつのりて、參議を申しけるに、院の仰に、それも物かきての上の事とありければ、理に伏して止みぬ。この人は歌道なども、譽ありしかば、物かゝぬほどの事やはあるべき。また參議になるまじきほどの人にもあらじなれど、和漢の才學のたらぬにぞありけむ、白河の御代までは、よく官を重くしたまひけ



りときこえたり。

寛弘 一條天皇ノ年號譜第 系圖ノヨキ家ヲイフ。七ヶ國の受領云々、受領トハ地方官即チ國司ノ事ナリ。コレヲ經テ後公文ヲ勘ヘテソレニ合格シタルモノヲ參議ニ任ストナリ。コノ事江次第ニ委シク見エタリ。時のきら、當時ノ權勢ナリ。白河の御代まで云々、コノ頃マデハ未タ人ヲ官ニ任スルモ容易ニセラレサリシコトナラムトナリ。コレアトノ文ヲカ、ムタメナリ。

あまり譜第をのみとられても賢才のいでこぬはじなれば、上古に及ひかたき事を恨むるやからもあれど、昔のまゝにては、いよく亂れぬへければ、譜第を重くせられけるも理なり。但才も賢く徳もあらはにして、登用せられむに、人の謗あるまじきほどの器ならず、今とても非重代によるまじき事とぞおぼえ侍る。その道にはあらで、一旦の勳功などいふばかりにて、武家代々の陪臣をあげて高官をさづけられむことは、朝儀のみ

だりなるのみならず、身のためもよくつゝしむべき事とぞおぼえ侍る。

いでこぬはし、出來ヌ端ニテ譜第ノミヲ取リテモ人オトヲレヌワケナレバナリ。あらはにして、才徳兩ツナカラ顯ハレタル人ヲイフ。非重代 譜第ナラヌモノヲイフ。その道にはあらで云々、才徳ナト秀ヲタリトニモアラズ、タダ一旦ノ勳功ナトヲ本ニシテ、武家代々ノ陪臣ヲ擧ケテ、高位高官ヲ授ケラレシコトハ、朝廷ノ儀ノ正シカラザルノミナラズ、擧ケラル、身モヨク慎ムヘキ事ナリトナリ。コノ數句實ニ滿腔ノ精神ノアルトコロナリ。ヨク、前ヨリ讀ミツ、ケテ味フヘシ。

(カ) 人臣の分

(全上)

凡そ王土にはうまれて、忠をいたし命をすつるは、人臣の道なり。必ずこれを身の高名とおもふべきにあらず、然れども、後の人を勵まし、その跡を哀みて、賞せらるゝは、君の御政なり、下と



してきほひ争ひ申すへきにはあらぬにや。ましてさせる功なく過分の望をいたすこと自ら危むるはしなれど、前車の轍を見ることは、誠にありかたきならひなりけむかし。

王土にけうまれて云々、コノ國ニ生レテハ忠義ヲ致シテ命ヲ捨ルハ人臣ノ道ゾトナリ。決シテソレナシタリトテ、身ノ高名トオモフヘカラストナリ。千古ノ確言ナラズヤ。カ、ル人ノミナラムニハ國家ノ安キコトハイツモ富嶽ノゴトクナラム。然れども云々、サハイウモノ、君トシテハマダソテ賞セラル、ハカヤウクナルワケゾトイヘリ。下として云々、下民トシテオノガ功ヲ誇リテ賞ナトテ競ヒ望ムモノニハアラズトナリ。况ンヤサシタル功モナクテ過分ノ事ヲ望ミ申スハ、必竟我身ヲ危クスルモノゾトナリ。コレ世ヲ慣レル言ナリ。前車の轍云々、コレハ過分ノ位ヲ得官ニ進ミタルモノハ先例ヲルキ事ナントモ、ソノ事ヲ願ミテ自分ヲ慎ムト云フコトキ習ヒハアリガタキ事ニヤトナリ。

中古までも人のさのみ豪強なるをば、戒られき。豪強になりぬ

れば、必ずおごる心あり。果して身を亡ぼし家を失ふためしあれば、戒めらるゝも理なり。鳥羽院の御代にや、諸國の武士の源平の家に屬することをもとむべしといふ制符度々ありき。源平久しく武をとりて仕へしかども、事ある時は、宣旨を給はりて、諸國の兵を召し具しけるに、近代となりて、やがてかたらはるゝ族多くなりしによりて、この制符は下されき。果して今までの亂世の基なれば、いひかひなき事になりけり。

鳥羽院の御代云々、源平武士ハ、モトハ朝廷ヲ守護スルタメニ事トアル時ニハ、宣旨ヲ給ハリテ、各國ノ武士トモテ率テ仕ヘ來リシニ、後ニハサナクトモ大カタノ武士トモ、源平二氏ノ勢ニ語ラハレテ、ソノマ、ニ附キ從フヤウニナリシカハ、ソレテ戒メントテ制符ハ下サレシナリ。

この頃よりのとわざには、一度軍にかけあひ、或は家の子郎從



節に死ぬるたぐひもあれば、わが功におきては、日本國をたまへ、もしは半國をたまはりても足るへからずなど申すめる。誠にさまでもおもふことはあらじなれど、やがてこれよりみだるゝはしともなり、また朝威のかるゝしさも、推はからるゝものなり。言語は君子の樞機なりといへり。白地フカサヤにも君を蔑にし、人におごることはあるべからぬことにこそ。さきに記し侍りしごとく、堅き氷は霜を踏むより至るならひなれば、亂臣賊子といふものは、そのはじめ心ことばをつゝしまざるよりいにくるなり。世中のおとろふると申すは、日月の光のかはるにもあらず、草木の色のあらたまるにもあらず、人のこゝろのあしくなりゆくを末世とはいへるにや。

一度軍に云々、ソノ頃ノ武士ドモノ心イカニモサゾアリケム。大義名分ナト

イツ事ハ、誰辨アルモノモナク、唯利ノ爲メニノミ戦ヒシナリ。ソノ中タマ〜  
 非常ノ忠臣アラハレクルハ、サスカニ我國ノ貴キトコロナリ。誠にさまて云々、  
 實ニサヤウマデニハアルマイケレトモ、サル諺ナドヨリ世ハヤウ〜亂ル、  
 階トモナリ、朝威ノ輕々シクナレルコトモ推量ラル、トナリ、言語は君子の樞  
 機云々、コノ以下ノ文、眞ニコノ卿ノ精神アフレ出テ、濁世ヲ救フ藥石ナリ、  
 況シテ世中のおとらふると申すは、トイヘルコトノ如キハ、コトニ深く心ヲト  
 メテ讀ムヘキトゾオホエル。世人ヨクコノ語ヲ暗誦シテ常ニラスル、コト  
 ナカラムニハ、心イカデカ正シカラサルヘキ。家イカテカ齊ハサルヘキ。國イカ  
 テカ治マラサルベキ。余ハコレニテ神皇正統記ノ講義ヲ了ラム。

\* \* \* \* \*



## 第二 徒然草

神皇正統記を終りたれば、約束の如く、これより徒然草を摘解すべし。この書今は普く教科書に用ゐられたれども、もと吉田兼好法師の隨筆にて、教育上不都合なるところも少からず。これ古人のわるきにあらず、これを悉く今日に用ゐむとするが、無理なるなり。兼好は決してあのれ教科書にせむとてかきしものにはあらず。

凡そ國文の躰は、今日より新に定むべくして、悉く古人にのみ則るべきにあらず。されば數多の古書の長所をえらみとりて、わがものとせむことは最も必要な事なり。この書をよむにもその識見はありたきものなり。

これを徒然草と名つけしるは、最初につれなるまゝにとある詞をとれるものならむ。この書枕草子の文意を深く味ひて、一機軸を出したるものと見ゆ。そのいふところ一より十まであるべきものを、僅に其二三をいひて、餘をにほはせたるどころ、無上の味ひあり。これ實に文章かく人の手本となすべきところにして、あらむ限り並へたてゝかくは、眞の文とはいひかたからむ。よく注意すべし。

### (イ) 驕奢を戒む

いにしへの聖の御代の政をもわすれ、民の愁ひ、國のそこなはるゝをも知らず、よるつに清らをつくして、いみじとおもひ、所せきさましたる人こそ、うたておもふ所なく見ゆれ。

コノ段儉約ノ必要ヲ論セリ。當代ニ慣ル所アリシニヤ。いにしへの聖の御代云々、古代聖人賢人ノ國ヲ治メシ世ニテ、我國ノ延喜天曆ノ頃ヲサセルモノト見ユ。民の愁ひ云々、人民ノ愁ヒテモ知ラズ國家ノ損セラル、コトヲモ知ラズ、萬事ニ我一人清潔ヲ盡シテ、いみじ、エライト思ヘル也。清ら、華美ナル贅澤ナリ。所せき、居ル所モ狭ク窮屈ナルヤウナルアリサマシテ、腕フリ歩クヤウナ人ハ、マコトニヘンニ、何ノ思慮モナク見ラル、トナリ。

衣冠より馬車にいたるまで、あるにまたがひて用ゐよ、美麗を



もとむることなかれどぞ、九條殿の遺誠にも侍る。順徳院の禁中の事ども、かゝせたまへるにもおほやけのたてまつりものは、おろそかなるをもちてよしとすどこそ侍れ。

我カ論ヲ儲カムルタメニ古聖賢ノ言ヲ引キタイヘルナリ。衣冠馬車ハ宮仕ヘスル人ノ必要ナル物ナレトモ有ルモノヲ用井テ驕奢ニ耽ラヌヤウ、ハヤク九條師輔大臣モ誠シメオカレシトナリ。遺誠トハ子孫ヲ誠ムル爲ニ、カチテ書キオキセラレシモノナリ。順徳院の云々、コソハ院ノ御撰ナル禁秘抄ト云フ書ニ、天位著御物、以疎爲美トアルタイヘルナリ。必竟何事モ儉素ナルガ美シトノ御意ナルヘシ。兼好コレヲノ事ヲ引イテ、當世ノ驕奢ヲ誠シメタルナリ。

(口) 栗栖野

神無月の比、栗栖野といふところを過ぎて、ある山里にたつねいること侍りしに、はるかなる苔の細道をふみわけて、心ほそく住みなしたる庵あり。木の葉に埋るゝ笥の栗ならでは、つゆ

音なふものなし。あか棚に菊紅葉など折りちらしたる、さすかにすむ人のあればなるべし。

神無月、トハ十月ノ事ナリ。栗栖野、山城國醍醐ノ邊ニアリ。尋ね入ること侍りしに、山里ニ尋テ入ル事ノアリシニナリ。ゴノ書アリト云フヘキ所ニ侍リトカケルコト、甚多シ、ソノ心シテ見ルヘシ。遙なる苔の細道云々、ハル／＼ト奥深キ苔ノ生シタル細道ヲ踏ミ分ケテ心ホソクカスカニ住ミナシタル庵アリトナリ。すみなすトハソコニ落チツイテ住メルサマナリ。木葉に埋るゝ云々、以下淋シキサマナイフ。秋ノ半過ル比トテ、滿山ノ落葉篋ヲ埋メテ、ソノ埋マリタル隙ヨリ置ニカヨフ水ノ音ヨリ外ニ、チヨツトモ音信スルモノモナシトナリ。車ならでは、車ナラズシテハナリ。あか棚ハ水棚ナリ。あかは梵語闍伽ノ字チアラタリ。菊紅葉、コレハ佛ニ献ラシメタルベシ。折ちらしたる、折り散レテアルナリ。さすかに、カヤウニ人離レテ淋シキ所トハイヒナガラ、住ム人ノアリケルヨト、コノ菊紅葉ノ折り散ラシタルニヨリテ知リタルナリ。さすかにトハソノハソノチガラト云フ義、今イフトハ異ナリ。兼好閑靜ヲ好ム心ヨリ、ア



ハレニウレシク思ヒシサマナリ。

かくてもあられけるよとあはれに見るほどに、かなたの庭に、おほきなる柑子の木の枝もたわよになりたるが、まはりをさびしくかこひたりしこそ、すこしことさめて、この木なからましかばとおもひしか。

かくても云々、カクノコトクシテモ、アハレニ在ラレケルカナト歎キ悦ヘルナリ。見るほどに、アハレニオモヒテソノ家ノサマナド見ル間ニナリ。かなたの庭に、彼方ノ庭ニナリ。柑子の木、橘ノ屬ナリ。枝もたわよ、枝モ撓ムホドニナリタルナリ。まはりを云々、ソノ木ノ周リヲ嚴重ニ圍ヒテアルヲ見テ、少シ興醒メテア、唯コノ一木ナカツタナラバイカニヨカリケムトオモヒシトナリ。コノ文初ニソノ家居ノアハレニ、メダタキ事ナイヒテ、ソノ家ノ主人マデナツカシクオモヒヤリテカキシニ、コノ一句ニテ食ル心ノ猶サメヤラヌサマテアラハシタル尤妙ナリ。手練ノ相撲ガ土俵際マデオサレテ、ヤガテ思フヤウ

ニ先方ヲ授ケヒシギタルカ如シ。

(ハ) 四季のめぐり

折節マヅメのうつりかはるこそ、ものことにあはれなれ。物のあはれは、秋こそまされと人ことにいふめれと、それもさるものにて、今一きは心もうきたつものは、春のけしきにこそあめれ。

コノ段ハ四季ノ變遷ノ面白ク感セラル、コトタイヘリ。折節トハ時節ニテ即チ春夏秋冬ノ四季ナリ。ものことに云々、何物トシテアハレナラヌハナシ、悉クアハレニ感セラル、トナリ。カク冒頭ニイヒテサテ順々ニソノ事トモニ及ベルナリ。あはれトハ感歎ノ詞ニテ。此ニテハ面白ク感セラル、タイフ。物のあはれは云々、コレハ或人ノ詞ヲカリタイヘルナリ。一事物ノアハレニ喜バシクモ、悲シクモ感セラル、ハ、四季ノ中ニテ秋ガ第一番デアルト、皆云フヤウダケレトモ、ソレモ然ルヘキコトナレトモ、ソレニ増シテ今一層ヒトミヤ心モ浮キ立テウレシキハ春ノ景色デアラウトナリ。



鳥の聲なども殊の外に春めきて、のどやかなる日影に、垣根の草もえ出る頃より、やゝ春ふかく霞みわたりて、花もやうくけしきたつほどこそあれ、折しも雨風打つよきて、心あはたしく散りすぎぬ。青葉になりゆくまで萬にたゞ心をのみぞなやます。花橘は名にこそおへれ、猶梅の匂ひにぞ、いにしへの事も、たちかへり戀ひしうおもひ出らるゝ。山吹の清げに、藤のおほつかなきさましたる、すべておもひすて、かたき事多し。

コレヨリ春ノ景色ノ面白キコトヲ叙セリ。鳥の聲なども云々、同シ鳥ノ聲ヲモ、春ニナレハ特別ニ春ノヤウスシテナリ、のどやかなる云々、長閑カナル日影ニナリ。春日遅々ナトイヘルサマナリ。垣根の草云々、垣ノ草ノ青々ト萌エ出ル頃ニテ、初春ノサマタイフ。春ふかくかすみわたりて、春ノ更ケ行ク空ノサマナリ。わたるトハ一パイニ霞ニオホハル、コトナリ。花もやうくけしきたつ、花ノ咲キ出テントスルケシキタイフ。花時風雨多トカイヘルヤウニ、ソ

二六  
二七

ノ頃ハ雨風ツ、クモノナレハカクイフ。程こそあれハ丁度花ノサク時分ト云フコト。心あはたしく、今ヤ咲クラン、雨ヤイカナランナド花ニ心ヲ盡スイソガシキ中ニ、ハヤ散リスヤヌトナリ。青葉になりゆく云々、花チリテ新樹ノ比トナルマデ、萬事ニ唯心バカリテナヤマストナリ。コレガ風流ノ上ヨリノコトナレハ實ハ面白キナリ。花橘は名にこそおへれ云々、橘ハカノ田道間守ノ故事アリテ、昔ヲ忍ブトイフ感情ニツイテハカレゾ名高キモノナレド、矢張梅ノ匂ヒニソ、古ノ事モ立カヘリテ戀シク思ハル、トナリ。おへれハ負ヘレナリ。立カヘリハ引キカヘシテナリ。山吹の清げに、藤のおほつかなき、コレ對句ナリ。清げにハ山吹ノ黄金色ニ清サウニ、ハツキリトシタルサマタイフ。おほつかなきハ、色ノハツキリトセズ、紫ノ薄キヤウニテボンヤリトシタル大ヤウナル色タイフ。和泉式部カ歌ニ、見ても猶おほつかなきは、春の夜の霞の内にさける藤波。すへて云々、コレラノ色合ヒナド、ドレモく取り捨テニクイ事多キトナリ。

灌佛のころ、祭のころ、若葉の梢すゞしげに茂りゆくほどこそ、



世のあはれも、人のこひしさもまされど、人の仰せられしこそ、  
げにさるものなれ。五月あやめふくころ、早苗とるころ、水鶏の  
たしくなと心ほそからぬかは。六月のころ、あやしき家に夕貌  
の白く見えて、蚊やり火ふすふるもあはれなり。六月はらへま  
たおかし。

コレヨリ夏ノ事ヲ叙セリ。灌佛トハ四月八日釋迦ノ誕生セシ日ナリ。コレノ日經  
説ニ本ツキテ、釋迦佛ノ躰ニ水ヲソ、ク儀アル故ニイフ。ソノ比トハ、即チ夏ノ  
初メナリ。祭ノころ、賀茂ノ祭テイフ。四月中ノ酉日ノ葵祭ナリ。すししけに、  
涼シサウニナリ。世のあはれも云々、世中ノ嬉シク悲シキ感情モコレノ比ゾマ  
サルトサル人ノ仰セラレシハ、實ニ然ルモノトナリ。あやめふく、五月五日ニ  
ハ軒毎ニ菖蒲ヲ嘗クハ、邪氣ヲ拂フトイフ心ニテ、古クヨリ行ハレ來シ儀ナリ。  
早苗とるトハ苗代ノ苗ヲトリテ更ニ植ルコトナリ。水鶏のたしく、水鶏ノ鳴  
聲ハ戸ヲ叩ク音ノヤウナレバイフナリ。心ほそからぬかは、心細クアラヌカ  
心ホソイトナリ。コレノ心ホソキカ即チ物ニ感シテオコルコトナレハ、初ノ物コ

三九

とにあはれなれト云フニ應スルナリ。あやしの家、賤シキ家ナリ。夕貌サキテ  
蚊遣火ノモエタツサマ、イカニアハレナラザラム。六月祓、即チ名越祓ナリ。上  
古ヨリノ儀ニテ、六月晦ト十二月晦トニ行ハレ。今モ宮中ニテ行ヒ玉ヘリ。

七夕まつるこそ、なまめかしけれ。やうく夜さむになるほど、  
鴈なきて來るころ、萩の下葉色つくほど、わさ田かりほすなど、  
取あつめたる事は、秋のみそ多かる。又野分の朝こそをかしけ  
れ。いひつゞくれば、皆源氏物語、枕草子などに、ことふりにたれ  
ど、同じこと又今さらにいはじともあらず、おぼしきことい  
はぬは腹ふくるゝわさなれば、筆にまかせつゝ、あぢきなきす  
さびにて書いやりすつべきものなれば、人の見るへきにもあ  
らず。

七夕祭、七月七日ナルコト誰モ知レルガ如シ。なまめかし、上品ニ優美ナル  
コト。夜さむ、夜ノ寒ク成リユク。萩の下葉色つく、萩ハ下葉ヨリ黄色ニナ



リテ枯ル、モノナリ。あさ山、早く出來ル田ヲイフ。かりほす、稻ヲ蒔リテ干スナリ。取あつめたる、色々取り集メテ感情ノ多キハ秋ニアリトナリ。野分トハ秋ノ暴風ナリ。野ノ花ナトテ吹アラヌホドノ風ナリ。源氏物語云々、段々トカヤウナルコトヲイヒツ、ケテユケハ、皆古人ノ源氏枕草子ナトニカイテアル事カラトナリテ、舊メキタンド、同シ事ヲ更ニイフマイトイフ法律モナクレバ、イフトナリ。又イハネバ腹フクレテセンカタナキマ、ニ筆ニマカセテカクトナリ。あちきなき、ウマイトモノキナリ。筆すさひ、筆ノス、ミナリ。書いやり、書キ破リ捨ツヘキモノデアレバナリ。カ、ルワケナレバ、人ノ見ルヘキニモアラズ、我カオモフマ、チカクトナリ。

さて冬枯のけしきこそ。秋にはをさくおどるましけれ。汀の草に紅葉のちりとよまりて、霜いと白うおけるあした、やり水より烟のたつこそをかじけれ、年のくれはてよ人ことにいそぎあへるころぞ、またなくあはれなる。すさまじきものにして、

見る人もなき、月のさむけくすめる、廿日あまりの空こそ、心ほそきものなれ。御佛名、荷前の使たつなどぞ、あはれにやんごとなき。公事どもまげく、春のいそぎにとりかさねてもよほしおこなはるよさまぞいみじきや。追離より四方拜につゞくこそ、おもしろけれ。晦の夜、いたらくらきに、松どももとして、夜半すくるまで、人の門たよきはしりありきて、何事にかあらむ、ことくしく、のよしりて、足をそらにまどふが、暁かたよりさすがに音なくなりぬること、年のなごりも心ほそけれ。亡き人の來る夜とて、靈まつるわさは、このころ都にはなきを、あつまのかたには猶爲ることにてありしこそあはれなりしか。かくてあけゆく空のけしき、昨日にかはりたりとは見えねど、引かへめつらしき心地そする。大路のさま松たてわたして、はなやかに



うれしけなるこそ、またあはれなれ。

此ノ段ハ冬テイヘリ。冬枯トハ冬ニナリテ萬木ノ枯レ凋ミタルケシキナリ。をさく、アノマリトイフカゴトシ。汀ノ草云々、コレヨリ以下秋ニ有ラシトオモフトモテノブルナリ。遣水、用水ナリ。ソレヨリ烟ノ立ツハ冬ノ朝ノクシキナリ。いそきあへる、誰モく急キ合ヘルナリ。見る人もなき月云々、寒夜ノサマヲソノマ、ニカケル只見ルカ如シ。御佛名、十二月十九日ヨリ廿一日マデ三日間、宮中ニ於テ諸佛ノ名號ヲ唱ヘテ懺悔ヲ行ハル、儀スルテイフ。承和年中ヨリ初マレヨシ元亨釋書九靜安傳ニ見ユ。荷前ノ使、ノサキノツカヒト訓ムヘシ。十二月ノ末諸國ヨリ貢進スル荷ノ初穂ヲ取リテ、山陵ニ奉ラル、儀ナリ。コハモトハ悉ク奉ラレタリケムヲ、貞觀以來十陵四墓或ハ八墓トナリシ事モアリニ奉ラル、禮トハナレリ。拾芥抄、江家次第ナドヲ見テソノ詳ナル式ハ知ルベシ。公事、朝廷ノ禮典ヲ博クイフ稱ナリ。春のいそき、春ニナル用意ナリ。いみしきや、イミシク貴キヤト云フ意ナリ。追儼、十二月晦ニ疫ヲ拂フトテ宮中ニテ行ハセラル、儀ナリ。オニヤヲヒトイフ。桃ノ弓蘆ノ矢ニ

テ鬼ヲ追フサマヲスルナリ。支那ノ禮ノ移レルモノ。四方拜、正月元旦寅ノ時ニ、天皇、天地、四方、屬星、山陵ヲ拜セラル、儀ニテ、宇多天皇ノ御時ヨリ始マル。松どもどもして、タイマツトモシテ走り歩クナリ。ことくしく、仰山ニサワヤテナリ。足を空ニ、足を空ニアゲテ歩クトハ急カシキサマヲ形容セラルナリ。さすかに、サヤウニイツガシキ夜モ、曉方トナリヌレハ、靜マリヌルガアハレナリトナリ。亡き人の來る夜、報恩經ノ説ニヨリテ行ハレ來シ儀ナリ。一年六度、二月十五日、五月十五日、七月十四日、八月十五日、九月十六日、十二月晦ニ亡靈ノ來ルトイフ事アルヨリ、ソノ祭アルナリ。後撰集に、なき人のどもにしかへる年ならば、くれゆくけふはうれしからまし。和泉式部カ歌ニ、なき人の來る夜とさきけど君もなし、わがすむ宿や玉なしの里。ナドアリ、考へ合スヘシ。大路のさま云々、都大路ノ正月ノケシキテイフ。コノ章春夏秋冬ノ景色ニツイテ思フマ、テ書キツラチタル筆ツキ凡人ノ及ブトコロニアラズ。能くくクリカヘシ見テ感慨ノコモレル所ヲ味フベシ。

(二) 飛鳥川



飛鳥川の淵瀨常ならぬ世にしあれば、時うつり事さり、たのし  
ひ、かなしひ行きかひて、花やかなりしあたりも人すまぬ野ら  
となり、かはらぬ住家は人あらたまりぬ。桃李物いはねば、誰と  
共にか昔をかたらむ。まして見ぬいにしへのやんことなかり  
けむ跡のみぞ、いとはかなき。

飛鳥川云々、飛鳥川ふちはせになる世なりとも、おもひそめてし人はあすれ  
じ。世中は何か常なる飛鳥川、きのふのふちはけふのせとなる。ナドイヘル古歌  
ノアルコトク、コノ川ハ一夜ノ爲ニ淵瀨ノカハルヨリ人世ノハカナキニタト  
ヘテ昔ヨリイヘルナリ。人すまぬ野ら、野らは野原ト云フニ同シ。桃李物いは  
ねば云々、桃李ハ物イハチバ、タトヒソコニ立テリトモ談ラムヤウモナキト  
イヘルナリ。やむとなかりけむ云々、コトニ古昔貴カリシ跡ノハカナクナリ  
シガアハレナリトナリ。

京極殿法成寺など見るこそ、志としまり、事變しにけるさまは

あはれなれ。御堂殿の作りみかよせたまひて、庄園多くよせら  
れ、我御像のみ御門の御うしろみ、世のかためにて、行末までと  
おぼしおきしとき、いかならむ世にもかばかりあせはてむと  
は、おぼしてむや。大門、金堂など、近くまでありしかど、正和のこ  
ろ、南門はやけぬ。金堂はその後たふれふしたるまゝにて、取立  
るわざもなし。無量壽院ばかりぞ、其のかたとてのこりたる、丈  
六の佛、九躰いとたふとくてならひおはします。行成大納言の  
額、兼行がかける扉、あざやかに見ゆるぞ、あはれなる。法華堂な  
ども、いまた侍めり。これもまたいつまでかあらむ。かばかりの  
名残だになきところ、は、おのつから石すゑばかり残るも  
あれど、さだかに知れる人もなし。されば、よろつに見ざらむ世  
まてをおもひおきてむこそ、はかなかるへけれ



コノヨリ例ヲ引テイヘルナリ。京極殿、法成寺、共ニ道長公ノ住マレシト云  
 ロナリ。志とまり云々、コハ漢文ノ志留事變トイフヲウツセルナリ。カヤウ  
 ニ貴キ所モ衰ヘハテ、ハセムナキヨシタイヘルナリ。御堂殿云々、御堂殿ト  
 ハ道長大臣ノ事ナリ。堂塔ヲアマタ作ラレシ故ニ御堂トハイフトゾ。庄園ノ  
 ノ家、ソノ寺ニツキタル私田ナリ。よせ、寄付ノ事ナリ。御門の御うしろみ、我  
 子孫タル人々ノミニテ、關白攝政始メ奉仕スヘク行末チカチテ、考ヘオカレシ  
 時分ニハ、カヤウニ破レソコナハレムトハ思ハレサリシナラムト云。あせ、海  
 水ノ盡ルヤウニ、カハリユク事ノ甚シキコトナリ。大門、金堂、共ニ法成寺ニ  
 アリ。正和、花園帝ノ年號。無量壽院、阿彌陀堂ナリ。そのかた、法成寺ノ形ト  
 テナリ。丈六佛、一丈六尺ノ佛タイフ。コレノミアハレニオハストナリ。行成、  
 藤原氏伊尹ノ孫、義孝ノ子ナリ。有名ナル書家ナリ。兼行、大和守兼行トイフ。屏  
 阿彌陀堂ノ屏ナリ。あさやかに、明ラカニナリ。法花堂、法花三昧ヲ行フトコ  
 ロ。これもまた云々、コレヲノ人モイツノ世マデガ生キテアラムトナリ。さた  
 かに、明ガニ、ハツキリナト云フコトシ。さればよろづに云々、サアレバ、萬事

ニツケテ、我見ザラム世マデモ思ヒ構ヘンハ、ハカナキ事ナリトナリ。世ノ定メ  
 ナキ事タイヘル、實際ニアタリテ、感深キ文ト云フベシ。

(ホ) 夜寒の風

あやしみの竹の編戸の内より、いと若き男の、月影に色あひさだ  
 かならねど、つややかなる狩衣に、濃き指貫いとゆるづきたる  
 さまにて、さよやかなる童一人を具して、はるかなる田の中の  
 細道を、稻葉の露にそぼちつゝ、分けゆくほど、笛をえならず吹  
 きすさびたる、あはれときゝしるべき人もあらじとおもふに、  
 行かむかたを知らまほしくて、見おくりつゝ行けば、笛をふきや  
 みて、山のきはに惣門のある内に入りぬ。

あやしハ賤シキナリ。色あひさだかならねど、裝束ノ色合ハツキリト見エヌ  
 タイフ。さだか、定カニテ慥カナド、同シ。つややかな、光彩ノアル事。濃キ指貫、  
 紫ノ色濃キ指貫ノ袴ナリ。ゆるづき、一故アルニテ、並々ナラヌタイフ。さよやかな



小サキナリ。稻葉の露に云々、田ノ中ノ細道ヲ行クコトナレバ衣ノソノ露ニ  
濕ル、サマナリ。えならず、一通リナラズ笛ヲ吹キナガラユクナリ。すさひ、  
慰ムナリ。惣門、寺ノ惣門ナルベシ。

コノ所ノ景色畫ナドニアラハサバイカニメテタカラム。能ク味ヒ見ルベシ。あ  
はれどきしるへき云々トイヘルアタリコトニ感引カンヌ。

榻タに立たる車の見ゆるも、都よりは目とまることちして、下人  
に問へば、志かくの宮のおはしますころにて、御佛事などさ  
ぶらふにやといふ。御堂の方に法師とも参りたり。夜さむの風  
にさそはれくる、空カラ焼物ヤキモノの匂ひも、身にしむことちす。寢殿より  
廊にかよふ女房の追風オモカゼ用意など、人目なき山里ともいはず、心  
つかひしたり。

コ、ハンノ惣門ノ中ノサマナリ。榻トハ車ノ牛ヲハツシテ立テオク時トキ、  
ニシ又車ヨリ下ル、時ノ臺ニモスルモノナリ。コノ頃ノ車ハ牛ニ引カセタル

モノニテ、甚大ナルモノナリ。都よりは云々、田舎ニカ、ル貴人ノ乗ルヘキ車  
ノ見ユレバナリ。志かくの宮、何々親王ナドイフナリ。夜さむの風、秋ノ夜  
ノ寒キニ吹ク風ナリ。さそはれくるトハンノ風ニ誘ハレテ匂ヒクルコトナリ。  
空焼物、香ノ事ナリ。身にしむ、ソノ匂ヒガ身ニシミ、スルコトナリ。寢殿  
ハ正殿、母屋ノアル所。廊ハ廊下ナリ。女房の追風用意、ソノ邊ヲ通フ女房ドモ  
ノコトナリ。追風トハ人ノ行過ギシアトノ風ニテ、コノ女房ドモノ着タル衣ニ  
薫キ染メタル香ノ匂ヒクルナリ。用意トハ妄リニ歩行セズ人ガラニ往來スル  
サマナリ。人目なき山里、人モカヨハサル山里ヲイフ。サル所ナレトモ猶心ツ  
カヒスル女房ドモヲホメタルナリ。

心のまゝに繁れる焔の野らは、おきあまる露にうつもれて、虫  
の音、かごとがましく、遣水のおど、のどやかなり。都の空よりは、  
雲のゆきしもはやきことちして、月のはれくもること定めが  
たし。



コノ一段コトニメテタシ。心のまゝトイヘルニテソノ草ドモノ繁レルアリサ  
マハ知ラルベシ。野らハ野原トイフガコトシ。おきあまる露、露ノタツプリト  
草木ニ置キワタシタルサマナリ。かことかましく、アマリ露ノフカサニ出ノ  
音モ不足ガマシキマデ鳴クトイヘルガ面白キナリ。都の空よりは云々、コソ  
ヨリ以下一層文勢セマリテ、ヨムモノヲシテ田舎ノ山寺ノ秋ノ夜深ケテ、月ノ  
照リ曇リスルサマタ、ソノ折ニ逢ヘルカ如キ思ヒアラシム。カクテ猶世ノ定  
メナキサマヲ思ハセタル、コノ著者ナラデハ書得カタキ文ナリ。

(へ) 名利心

蟻のことくにあつまりて、東西にいそぎ南北に走る。高きあり、  
卑しきあり、老いたるあり、若きあり、行くところあり、歸る家あ  
り、夕にいねて朝におく、營むところ何事ぞや、生をむさほり、利  
を求めて止む時なし。

コノ段ハ著者ノ本意ナルカラニ、文章興味アリテ且ツ勢ヒアリ。蟻のことくに

トイヘルニテ世俗ヲ輕蔑シタル趣オノツカラ見ユ。東西南北云々ト十條バカ  
リニ書キ立テ、コソ必竟生ヲ食リ利ヲ求ムル爲ナリト斷シタル筆力ヨク味  
フベシ。

身を養ひて何事をかまつ、期するところ、たゞ老と死とにあり。  
その來ることすみやかにして、念々の間にとゞまらず。これを  
待つ間、何の樂かあらむ。

コレ生ヲ食ルコトノ非ナル故ヲ辨セリ。期するところ云々、身ヲ養生スレバト  
テ、遂ニ老人ニナルコト、死ヌルコトヲ待ツ外ナシトナリ。ソノ老ト死トノ速ニ  
來ルコトハ、一念々々ノ間ニモ止ラズ、常ニ無常ハ人間ヲ襲ヒツ、アリトナリ。  
まどへるものはこれをおそれず、名利に溺れて、先途の近き事  
をかへり見ねはなり。愚かなる人は、またこれをかなしふ。常住  
ならむことをおもひて、變化の理を知らねばなり。

まどへるもの、感ヘルモノ之。これをおそれずトハ老ト死トノ近ツクコトヲ



ナリ。コレ名利ヲ求ムルニ溺レ居レバ、サルコトヲカヘリ見ル暇ナキナリ。愚かなる人は云々、元來愚痴ナル人ハ、ソノ老ト死トノ來ルコトヲ悲シムナリ。コレハ生物ニ變化ノ理アルコトヲ知ラズバナリ。常住トハイツマデモ、コレノ世ニ住マントオモフコトナリ。

徒然草ニハ世ヲ厭フコトノ所々見ユルハ、兼好ノ志素ヨリソコニアレバナリ。サレハコレヲ普通教育ニ用井テ、イマダ志操堅固ナラザル青年ニ教フルハ、不可ナルコト甚多シ。思フニ彼カ佛道ニ心ヲ深ク入ル、カ如ク學問事業ニ心ヲ入ル、ヤウニ取リナシタキモノナリ。今世國語科ノ讀本ニ、何ノ思慮モナクシテ、コレノ本ヲ片ハシヨリ教ヘタルモノモアルハ、大ニ猛省セサルヘカラス。

(ト) あるじの嗜み

屏風障子などの繪も文字も、かたくなよる筆やうして、かきたるが見にくきよりも、宿のあるじの拙くおぼゆるなり。大かたもてる調度にて、心おどらせらるゝことはありぬべし。

コレノ段ハ人ハソノ嗜ミモノ、如何ニヨリテ、ソノ心ノ推シハカラル、コレイフ

ナリ。障子トハ今ノ衝立障子ノコトナリ。繪も文字も云々、ソレヲニ貼リツケナドシタル書畫ノ頭ナニ拙キヲ見レバ、ソノ書手ノ如何ヨリモ、ソチ嗜ム主人ノ心ノ拙サガ推シハカラル、ヨトナリ。大かた云々、大抵ハ持テル道具ニヨリテモ、主人ノ心ノヨサ、アシサハワカルモノゾトナリ。

さのみよきものを持つべしどもあらず、損せさらむためとて品なく、見にくきさまに志なし、めつらしからむとて、用なき事ども志そへ、わつらはしく好みなせるをいふなり。ふるめかしきやうにて、いたく事々しからず、費へもなくて物からのよきがよきなり。

右ノ如ク云ヒテモ、サノミ贅澤シテヨキモノヲ持テトニモアラズ、タゞ損セヌヤウニトテ品ナク見悪キ形ニナシ、或ハ珍ラシク見セントテ、用ナキ事トモテ爲添ヘテ、煩ハシク事好ミセルガワルキトナリ。いたく事々しからず、非常ニ仰山ナラズナリ。費へもなくて、金銀ノ費ナクテナリ。

總ヘテ調度類ハ贅澤ニスルハ非ナレトモ、ソノ身分相應ニ下品ナラサルモノ



ヲ持ツベシ。コレヤガテ人ノ美術心ヲアラハスモノナレバナリ。頗ハシク事好ミテ飾リ立テタランニハ、誰カ見ル目モ苦シカラサル心カクベキコトナリ。

(チ) 人の心

人の心すなほならねば、偽なきにしもあらず。されど、おのつから正直の人、などかなからむ。おのれすなほならねど、人の賢を見て、うらやむは、よのつねなり。

コノ段ハ、人ノ心ノ用非カタヲ論セリ。すなほトハ眞直ナルコト。偽なき云々、大方ノ人ノ心ハ正直ナラヌモノナレバ、偽ナキトイフコトハナイトナリ。されど云々、サヤウニハイヘド、マダ正直ナル人ノナキコアラムヤト云。おのれすなほならねど云々、自分ハタトヒ正直デナクトモ、賢人ノ上ヲ見テ羨ム心オコルモノハ、尋常ノ人ノ心ナリトナリ。

いたりて愚なる人は、たまく賢なる人を見てこれを悪む。おほきなる利を得むかために、すこしき利をうけず、偽り飾りて、名をたてむとす。誹る。おのれか心にたがへるによりて、この嘲をなすにてしりぬ。この人は下愚の性、うつるへからず。偽りて小利をも辭すへからず。

いたりて愚かなる人云々、前ニハ尋常ノ人ノ事ヲイヒ、コ、ニ至リテ至愚ノ人ノ上ヲ論セリ。たまく賢なる云々、サヤウナル人ハタまく賢人ヲ見レバ、羨マサルノミカ、彼ノ人ハ大利ヲ得ムカ爲ニ、小利ニ汲々セズ、表面無慾ヲ見セカケテ實ハ名利ヲ貪ラムトスルモノナリナド誹ルトナリ。おのれが心にたがへるによりて、至愚ノ人ノ心ニ賢人ノ考ヘノ違フニヨリテナリ。カ、ル事ニテ至愚ナル人ノ上ハ知ラルトナリ。下愚の性うつるへからず。素ヨリ下愚ナルモノハヨキニウツサムトシテモウツラズトナリ。コレ賢ニ習ハムトセサルノミカ反ツテ賢ヲニクメバナリ。偽りて云々、サハイヘサヤウナル人ハ、人ヲ嘲リナガラオノレハ小利ヲモ辭セズシテ取ルトナリ。へからずトイヘルハ性質上、取ラズニハチラレヌトイフ意味ニテ面白シ。

かりにも愚を學ぶへからず。狂人のまねとて、大路をはしらは、



則狂人なり。悪人のまねとて、人を殺さは悪人なり。驥を學ぶは、驥のたぐひ、舜を學ぶは舜の徒なり。偽りても賢をまなばむを賢といふへし。

かりにも云々。前ヨリノ文ヲウケテイヘリ。タトヒ假リニモ愚ヲ學ブヘカラズトナリ。大路をばしらは云々。コ、ハ文法ニ聊カカヘリ。走ラバ狂人ナラムトカ、又ハ走レバ狂人ナリトカアルベシ。悪人云々モ同シ。驥ハ八千里ノ馬ニ、舜ハ支那ノ聖人ナリ。コハヨキコトヲ願フモノハ、猶ソノ徒ナリトイフタトヘナリ。偽りても云々トイヘル結句大ニカアリ。

○(リ) 弓射る心得

或人弓射る事をならふに、もろ矢をたはさみて、的に向ふ。師のいはく、初心の人、二つの矢を持つことなかれ、後の矢をたのみで、はしめの矢に、なほざりの心あり。毎度たし得失なく、この一矢にさだむべしとおもへといふ。わづかに、二の矢、師の前にて、

一つをおろかにせむとおもはむや。懈怠の心、みつからしらずといへども、師これをしる、この戒め萬事にわたるべし。

もろ矢たはさみ、矢二筋ヲ握リ持ツコト。たはさみハ手挾ミナリ。毎度たし得失なく云々。矢ノ前後テイハズ慎ミテ得失ナキヤウニ射ヨトナリ。わづかに云々、兼好ノ評ナリ。タゞ二筋ノ矢イカテ師ノ前ニテ、ソノ一ヲダニ疎ニセムトオモハム。懈怠ノ心ハ射ル人ミツカラ知ラズトイヘトモ、師ヨク知レリ。コノ戒メ世間萬事ニワタリテ貴シトナリ。

道を學ぶ人、夕には朝あらむことをおもひ、朝には夕あらむことをおもひて、かさねて懇に修せむ事を期す。いはむや、一刹那のうちに、懈怠の心ある事をしらむや。何ぞ只今の一念において直にする事の甚かたき。

道を學ぶ人、コレハ兼好ハ佛道修業ノ事ニイヘド、我々ハ總テノ學問道ニ説キテ服膺スヘキコトナリ。夕には朝あらむとをおもひ云々、歲月再ヒ來ラズ



青年ノ時豈再ヒアラムヤ宜シク務ムヘキコトナリ。かさねて云々、ユルリト重テテ丁寧ニ學バムトテ等閑ニ附シ去ル事ナリ。一刹那、タゞ一念ノ間ノ事佛語ナリ、何ぞ云々以下尤カテコメタリ。學ニ志スモノクリカヘシ見テ懈怠ノ心ヲ増長セシムル事ナカレ。

(又) 高名の木登り

高名の木のほりといひしをのこ、人をおきてゝ高き木にのぼせて、梢をきらせしに、いと危く見えしほどは、いふこともなく、て、おるゝ時に、軒丈ばかりになりて、あやまちすな、心しておりよと言葉をかけ侍りしを、かばかりになりては、飛ひおるとも、おりなむ、いかにかくいふぞと申し侍りしかば、その事に候、目くるめき、枝あやうきほどは、おのれがおそれ侍れば申さず、あやまちには、安きところにありて必ず仕ることに候といふ。あや

9/26

しき下臈なれども、聖人の戒めにななへり。鞠もかたき所を蹴出して後、やすくおもへは必ず落つとなむ。

高名の木のほり、名高き木ノボリナリ。人をあきて、人ヲ命令シテ木ニ登ラスルナリ。おきて、ハ旋テ、ニテ登リヤウテ定メテ登ラスルヲイフ。梢をきらせしに、ソノ高キ木ノ枝ヲ切ラシムルナリ。いふこともなく、何ニトモイフ事モナキナリ。軒丈ばかり云々、段々ト下リ來テ、今ハ家ノ軒ノ丈ばかりノ低キ所ニナリテナリ。あやまちすな云々、過スルナシツカリトセヨト詞ヲカケシナリ。かはかりになり云々、コレハ兼好ノ高名ノ木ノボリニ問ヒシ詞ナリ。カホドニ低クナリテ何故ニ戒メノ詞ヲカケシソ、飛ヒオリラモタカノ知レタルモノヲトシ、意、其事に候云々、高名ノ木ノボリノ返事ナリ。目くるめき、目ノクル、トマルコト、おのれトハ木ニ登リ居ルモノ。あやまちは云々、コレ尤味ヒノアル詞ナリ。あやしき下臈なれも云々、兼好ノ評言ナリ。コレハ易ノ繫辭ニ君子安而不忘危、存而不忘亡、治而不忘亂、云々ナトアルニ思ヒ合セテカキシナルヘシ。鞠もかたきところ云々、鞠ハ當時貴紳ノ間ニ專ラ行ハレ



シ遊戯ナリ。ソレモ難儀ニ六カシキ所ヲ蹴出シテ、サテ安心シテ居レバ、地ニ落  
チテ負トナル事アリトナリ。必竟油斷ノ心生スレハ過チアルチイフナリ。  
此ノ段高名ノ木登リノ話ヲカキテ、寸時モ油斷スヘカラサル事ヲ論セル、尤妙  
ナリ。學者宜シク心ニ銘スベシ。

(ル) 人の才能

人の才能は、文あきらかにして、聖の教を知れるを第一とす。

此ノ段ハ人タルモノノ學フベキ才智藝能ノ事ヲ述ヘタリ。文あきらかにして  
云々、文トハ學問ノ事ヲ博クイヘリ。四書六經等ヲアキラメテ、聖人ノ教ヲ知  
ルガ第一ナリトナリ。

次には手かく事。むねとする事はなくとも、これを習ふへし。學  
問にたよりあらむためなり。

手かく事、書ヲ上手ニカクコトナリ。むねと云々、筆道ヲ専門トシテ學ブコ  
トハナクトモ、一通リハ習ヒオクヘシトナリ。コレ大ニ學問ニ便リアレバナリ。  
次に醫術を習ふべし。身を養ひ人をたすけ、忠孝のつとめも、醫

にあらずばあるへからず。

醫術ヲ心得テレバ、タ、ニ自衛ニ足ルノミナラズ、人ヲモ助クルニ足ルトナリ。  
况ヤ忠孝ノ務メモ、コノ道ト大ニ關係アリトイフテヤ。小學ニ云、伊川先生曰、病

臥於牀、委之庸醫、比之不慈不孝、事親者亦不可不知醫トアルナド思ヒ合スベシ。  
次に弓射馬に乗ると、六藝に出せり。必ずこれをうかゞふべし。  
文武醫の道、まことにかけてはあるへからず。これを學ばむを  
ば、いたつらなる人といふへからず。

六藝、禮、樂、射、御、書、數、コレヲ六藝トイフナリ。周禮ニ見エテ古ヨリ人ノ學フベ  
キ事ニ定メタリ。文武醫ノ道ハ人タルモノ必ス學フベシトナリ。

次に食は人の天なり。よく味を調へしる人、大なる徳とすべし。

書經帝範務農篇ニ、夫食爲人天爲農政本、云云トアリ。  
次に細工、萬の要多し。

簡ニシテ盡セリ。



此外の事ども、多能は君子の恥つるところなり。詩歌に巧みに糸竹に妙なるは、幽玄の道、君臣これをおもくすといへども、今の世には、これをもちて、世を治ること漸くおろかなるに似たり。金はすぐれたれども、鐵の益おほきに志かざるかことし。

君子多乎不多也ナトイヘルコトモアリテ、アマリニ多能ナルハ反ツテ恥チトスルコトナリ。幽玄の道、幽微玄妙ノ道トイフ事ニテ、詩歌管絃ノ事ニイヘルナリ。今の世には云々、古ハコレヲ以テ君臣共ニ九重ヲタレントモ、今ハ漸々未ニ流レテ、反ツテソノ益ナキ事チイヘリ。當時ノ紳縉、タゞコノ道ノ末流ヲノミ汲ミテ、ソノ本ヲ忘レタルヲ戒メタルベシ。金はすぐれたれども云々、トイヘル、尤價アル詞トイフベシ。

此ノ段初ニ人ニ學問修身ノ大切ナル事チイヒ、次ニ習字、次ニ醫術、次ニ弓馬、次ニ衛生チイヒ、次ニ細工ノ事ニ及ヒ、終ニ詩歌管絃ノ本ヲ失ヒタル事ヲ憤レル、讀ムモノイカデ一々身ニシミテ覺エサラム。今世ノ人、或ハ文事ヲ弄ビテ、牀ノ損ハル、ヲモ願ミサルアリ、武ニ偏シテ高尙ナル人ノ嗜好ヲ味フ事ヲ知ラサ

ルアリ、宜シク猛省スベシ。

(チ) 物に争ふべからず

物にあらそはず、己を枉けて、人にしたかひ、我身を後にして、人を先にするにはしからず。

コノ段ハ人ニ謙讓ノ徳ノナカルヘカラザル事ヲ論セシナリ。己を枉けて云々、タトヒ少シハ無理ナリトモ、自身ヲ枉ケテ、人ニ從フニ若クコトハナシトナリ。よろづの遊ひにも、勝負を好む人は、勝ちて興あらむためなり。おのれか藝のまさりたるをよろこぶ。されはまけて興なくおほゆへきことまた知られたり。我まけて人をよろこばしめむとおもはゞ、更にあそびの興なかるべし。人にほいなくおもはせて、我心をなぐさめむこと徳にそむけり。

よろづの遊、萬ノ遊ヒニモ勝負事ヲ好ムモノ、不徳ナルコトチイヘリ。勝ちて云々、我勝チテオモシロガラン事ヲ願フハ、己カ藝ノマサリタルコトヲ悦ブモノニテ、甚不徳ナリ。勝チテ喜ブホドノ心ニテハ、負ケタル時ハ、イカニ不興



ニオモシロカラサラントナリ。ほいなく、本意ナクナリ。圍碁トランブ、將碁ナ  
ドテコノ上モナキ遊ヒトオモヒ、甚シキハ賭事サヘナシテ、我藝ヲ誇ラントス  
ルモノ、コノ文ニ對シテ一考セサルヘカラズ。

むつまじき中にたはふる人をはかりあさむきて、おのれか  
智のまさりたる事を興とす。これまた禮にあらず。

コレ親友ノ間ニ於ルモ、勝負事スルノ非禮ナルタイヘルナリ。ばかりあさむき  
てトハ人ノ智ノホドヲオシハカリアザケリテナリ。

されば、初め興宴よりおこりて、なかき恨みをむすぶたぐひお  
ほし。これみなあらそひをこのむ失なり。

初メハ興宴ヨリ事オコリテ、親シキ朋友長キ恨ミナドテ結フコトアルモ、必竟  
勝負ヲ争フヨリノ心ナリトナリ。

人に勝たむことをおもはざ、たゞ學問して、その智を人にまさ  
らむとおもふべし。道を學ぶとならば、善にほこらず、ともがら  
に争ふべからずといふことを知るべきなり。大なる職をも辭

し、利をもすつるは、只學問の力なり。

以上論シ來リテ、眞ニ人ニ勝タントオモハ、眞ノ學問スベシ、學問ハ眞ノ智ヲ  
求メテ、徒ニ人ニ誇リ、人ト争フモノナラサルタイヘル尤カアリ。結句大ナル職  
ヲモ辭シ云々トイヘルガ如キ、蓋シ著者ノ本領ナラム。

(ワ) 月花の弄ひ

花はさかりに月はくまなきをのみ見るものかは。雨にむかひ  
て月をこひ、たれこめて春のゆくへ知らぬも、猶あはれに情ふ  
かし。さきぬへきほどの稍散りしをれたる庭などこそ、見どこ  
る多けれ。

此ノ段ハ、普通ノ情ヲハナレタル著者ノ見識ヲ書キタルモノニシテ、事々思ヒ  
ノ外ニ面白シ。蓋シ風流士眞情ノ趣味ハカ、ル所ニアルベシ。  
花はさかりに云々。人毎ニ花ハ盛リテ愛シ、月ハ隈ナク晴レタルヲノミ見  
トイフメンド、メレノミガ月花ヲ弄ブモノニアラシトナリ。かはハ反語。見ルモ  
ノデナイト云フコト。雨にむかひて云々。雨ノアル夜ニ向ヒテ、今夜月ガアリ



タラバヨイト戀シウオモフナリ。たれこめて春のゆくへ云々。たれこめてハ籬ヲ垂レテ家ニ籠リテナルコト、春のゆくへ、暮レ行ク春ノサキヲ知ラヌコトナリ。一躰春ハ花ヲ見、ソノ花ノ春ノ末ニ散リ行クヲ惜シムナドカ普通ナレドサノミニテハ面白カラス、遂ニ花ヲ見ズシテ家ノ中ヨリ思ヒヤルナドガ尤情フカキモノトナリ。前ノ雨にむかひて云々ハ、朝詠ニ對雨戀月序、源順、楊貴妃歸唐帝思、李夫人去漢皇情云々トアルニカナヒ、たれこめて云々ハ、古今集藤原因香ノ歌ニ、たれこめて春のゆくへもしらぬまにまちし櫻もうつろひにけりトアルニカナヘリ。さきぬへきほどの梢云々、今咲カントスル花ノ梢、若クハ散リ萎レタル庭ノサマハ反ツテ眞盛ノ花ノ庭ヨリモ見所多シトナリ。歌のことばがきにも、花見にまかれりけるに、はやく散りすぎにければとも、さはることありて、まからでなどもかけるは、花を見てといへるにおとれるとかは、花のちり月のかたふくを慕ふならひは、さることなれど、ことにかたくなふる人ぞ、この枝かの枝ちりにけり、今は見どころなしなどはいふめる。

コレヨリ愈々前論ヲ確カムルナリ。タトヘハ歌ノことはかきトテ歌ノ前ニソノヨメルアケテカキタルモノモ、花見ニユキシニ既ニ散リ過キニケリ、或ハ用事アリテ花見ニハエユカズ、サレドコノ歌ヨメリナドカケルハ、花ヲ見テト打ツクニカケルモノニ比ヘテ、ソノ情決シテ劣ルモノニアラズトナリ。まかるトハモトハ退クコトナレトモ、コノ頃ヨリ行クコトニモイフナリ。さはるトハ何事ニモアレ差支アルコト。花のちり月のかたふく云々。散ル花傾ク月ヲ慕フハ誰モサアルコトナレド、コトニ頑固ナル人ゾ、コノ枝ハ既ニ散リタリ、カノ枝ハモハヤ用ナシナドハイフトナリ、コレ眞ニ花ヲ愛スルモノハ散過キタル枝トテ、ソウ無情ニハイハヌトナリ。

望月のくまなき千里の外までながめたるよりも、曉ちかくなりて待出たるがいと心ふかう、青みたるやうにて、ふかき山の杉の梢に見えたる木のまの影、うちしぐれたる村雲かくれのほど、またなくあはれなり。椎柴白かしのなどの、ぬれたるやうなる葉の上いきらめきたるこそ身にしみて、心あらむ友もがな



と都こひしうおほゆれ。

此ノ前一節アレド、イカバシキユトアレハ除キタリ。望月。十五夜ノ月ナリ。コ、モ例ノ筆法ナリ。十五ノ月ハ隱ナク千里ヲモ照ラスモノニテ、眺メヨロシクレトモ、夫レヲ見ノヨリモ、曉近ク待出タル月ガ情アリテアハレ深シトナリ。青みたるやうにて。トハ月ノ色ヲイフ。うちしくれたる云々。時雨ノ打ソ、ク村雲ノ間ニ出沒スル月ノサマナリ。椎柴白樫云々。コレラノ木ノ葉ノツヤクトシテヌレタルコトキ上ニキラメク月ヲ見レハ、二層身ニシミクトシテ、サルカタニ心アラソ友入ト共ニ見タキト、都ノ事戀シウサヘオモハルハトナリ。

すべて月花をば、さのみ目にて見るものかは。春は家を立さらでも月の夜は闇のうちながらも、おもひやるこそいとたのもしうをかしけれ。

コ、ニ至リテ月花ヲ合セ論シテソノ局ヲ結ヘルナリ。さのみ目にて見るものかは。目バカリテ月花ヲ見ントオモフガ間違ヒナリ。心ノ中ニオモヒヤリテ見ルカ面白キトナリ。コノ實ニコノ段ノ眼目ナリ。月花ヲ弄スル風流士一考スル價アルヘシ。コレヨリ以下サマクノ例ヲ引テコノ主義ヲ述ヘタレト、今ハアマリニ煩ハシケレバ、悉ク省キタリ。

(カ) 草木のさだめ。

家にありたき木は、松、さくら。松は五葉もよし。花はひとへなるよし。八重櫻は、奈良の都にのみありけるを、このころぞ世におほくなり侍るなる。吉野の花、左近のさくら、みなひとへにてこそあれ、八重櫻は、ことやうのものなり。いとこちたくねぢけたり。うゑずともありなむ。おそさくら、またすさまじ。虫のつきたるもむつかし。

コノ段ハ、多クノ庭木ヲ品評セルモノニテ、枕草子ヨリ脱却シタル文ナリ。何トハナケレド、イト趣アリ。八重櫻。コレハ古ヘハ奈良ノ都ニノミアリシモノト見エタリ。誰モ知レルコトク詞花集ニ一條院の御時、奈良の八重櫻を人のたてまつり侍りけるを、おまへに侍りければ、その花を給はりて、歌よめとおほせら



れければよめる、伊勢大輔いにしへのならのみやこの八重さくらけふこゝのへに匂ひぬるかなトアルヲモ思フヘシ。左近の櫻。内裏ノ紫宸殿ノ階ノ左右ニ橘ト櫻トヲ植エラシタルヲ左近櫻、右近橘トイフナリ。カヤウナル大庭ニウエラレ、又吉野山ノ名高キ花ナトモ皆一重ナリトナリ。ことやう。異様ナリ。こちたぐぬちけ。こちたぐハ言痛クニテ、仰山ニ事々シキコト、ぬちけハ倭ノ字ナドニアタリテ、煩ハシキ意、コレハ花ナドノアマリ多クサツパリセヌテ卑シメテイヘルナリ。うゑすともありなむ。植エズシテアリタイトナリ。すさまじ。時候ニハゾレテ咲レハナリ。虫のつきたる云々。普通ノ花ノ散ルコロハ、毛虫ノ生スルモノニテ、遅櫻ニハヨクアルモノナリ、ソレヲ忌ミタルナリ。

梅は白き、薄紅梅、一重なるが、とくさきたるも、重りたる紅梅の匂ひめてたきも皆をかじ。おそき梅は、櫻にさきあひて、おほえおどりけおされて枝にしほみつきたるころうし。

梅ハ一重ナルモ、八重ナルモヨキトナリ。とくとハ疾クナリ早クサキタルナリ。おそき梅云々。オンサキノ梅ハ、櫻ノ咲ク頃ト全シクシレハ、ソノ方ニ壓セラレ、

ソノ方ノ寵ニ劣リ、技ニ恭ミツキタルハ心愛シトナリ。けおされハ氣壓サレナリ。オシツケラルハ、コト。

一重なるがまづさきて、散りたるは、心とくをかじとて、京極入道中納言は、なほひとへ梅をなむ軒ちかく植ゑられたりける。京極の屋の南むきに、今もふた本侍るめり。柳またをかじ。卯月はかりの若かへで、すべて萬の花紅葉にもまさりて、めてたきものなり。橘、桂、いつれも木はものふり大なるよし。

京極中納言ハ、正二位權中納言定家卿ナリ。風雅集ニ、定家卿はやうすみける家にまはし立入りて、ほど経侍けるをり、かのみつから植ゑて侍りける梅の木、の枝にむすひつけたる永福門院内侍、わすれじな宿はむかしにあどふりてかはらぬ軒に匂ふ梅かえ。かへし前太納言爲世、くちのこるふるき軒はの梅がえもまたとほるへき春をまつらし。トアル思ヒ合スヘシ。卯月、四月ナリ。若かへて、楓ノ芽サシノ美ハシキタイプものふり、古ヒタルコト。

草は山吹、藤かきつばた、なでしこ。池には蓮、秋の草は萩、すゝき。



きちから、萩をみなへし、ふぢばかま、紫苑シロヤシロ、われもかう、かるかや、  
 りんたう、菊、黄菊もつた、くずあさかほ、いづれもいと高からず、  
 さよやかなる垣に、志けからぬよし。この外世にまれなるもの、  
 からめきたる名のきよにく、花も見なれぬなどいとなつか  
 しからず。おほかた何もめつらしくありかたきものは、よから  
 ぬ人のもて興するものなり。さやうのものなくてありなむ。  
 草ハ云々ヨリ池ニハ蓮マテハ春夏ノ事ナリ。惣シテ草花ハ秋ヲ專トスルモノ  
 ナレハ春ハ大畧ニカキタルナリ。きちかう、桔梗ナリ。われもかう、葉蒨アキハヒ葺ノ  
 如クシテ穂アリ。りんたう、親膽ナリ。菊トノミイヘハ白菊ナリ。さよやかなる  
 小サキ垣根ナリ。世にまれなる云々、珍ラシキ花ソノ名モ唐風ナルハ見テレ  
 ネバナツカシカラズトナリ。おほかた云々、惣テ稀有ノモノヲ好ミ珍ラシガ  
 ルハアマリヨカラヌ人ノスルコトニテ、ソノナモノハナクテホシイトナリ。  
 (ヨ) 老と少と

若き時は血氣うちにあるにあり、心ものに動きて情慾多し。身をあや

ふめて、くだけやすき事、珠を走らしむるに似たり。美麗をこの  
 みて寶を費し、是をすて、苦のたもとにやつれ、いさめる心さ  
 かりにして物とあらそひ、心に恥うらやみ、このむどころ日々  
 にさたまらず、色にふけり、情にめで、行をいさきよくして、百年  
 の身をあやまり、命を失へるためしねがはしくして、身のまた  
 く久しからむことをばおもはず、すけるかたに心ひきて、長き  
 世かたりともなる。身をあやまつとは若き時のしわざなり。

此ノ段老少ノ情ヲ能ク書キトリタリ。コハ、ハ先ツ若キモノ、事ヲ戒シメタリ。  
 若き時は云々。少年ハ血氣ニハヤリテ自然身ヲアマツコト多キナイフ。論  
 語ニモ少之時血氣未定、戒之在色ナドイヘリ。情慾。七情六欲ノコト。七情トハ  
 喜、怒、哀、樂、愛、惡、欲、ヲイヒ、六欲トハ、眼、耳、鼻、舌、身、意、ヲイフ。珠を走らしむるに似た  
 り。如板上走玉ナトイヘルト同シ意ナリ。落チツガヌサマヲ形容セルイト妙  
 ナリ。是をすて、云々。サバカリ何事ニモ美麗ヲ好ミテ寶ヲ費シ、モ一朝ノ  
 價ニ世ヲ棄テ、苦ノ袂ニ隠ル、ナイフ。いさめる心云々。物ニ勇ム心盛リナ



レハ遂ニ争論ヲモオコシ、ソレガ爲ニ心ニ恥チ羨ムコトナドモサマクアリ  
 テ心常ニ安カラヌサマナリ。行をいさきよくして云々。色情ナドノ爲ニ命ヲ  
 抛ツコトアルチイフ。サヤウノ事ヲノミ願ヒテ、生レ得タル身ヲ全クシ久シク  
 世ニアテムコトヲ思ハズ、自分ノ好メル方ニ偏シテ、ソレガ爲ニ身ヲ誤リ、後世  
 マアノ語リクサトナルトナリ。カハルワケナレバ、若キ時ハ尤身ヲ慎シ、戒シ  
 ムヘキ事ナリ。

老ぬる人は、精神おとるへ、あはくおろそかにして、感じうごく  
 ところなし。心おのつからまつかなれば、無益のわざをなさず、  
 身をたすけて愁なく、人のわつらひなからむことをおもふ。老  
 て智のわかき時にまされること、わかくして、かたちの老たる  
 にまされるかことし。

コ、ハ專ラ老者ノ上チイヒテ前ニ應ス。あはく、淡ノ字ノ義、コ、ノ意ハ老人  
 ハ氣血淡薄ニシテ事々ニ感動ウスク、從ツテ心モ自然ニ閑清ニ無益ノ事ヲセ  
 ヌトナリ。身をたすけて云々。我身ヲ助ケテ成ルヘク愁ヒナク、人ノ煩トナラ

ヤウナル事ヲオモフトナリ。是ラコトノク若キ時ノ考へト違ヘルチイフ。老  
 て智の云々。コノ一句簡ニシテ言ヒ盡セリ、全篇ノ文コレニテ活動ス、眞ニ味  
 ヒアリト云フベシ。

(タ) 酒の論

世には心得ぬ事の多きなり。ともあるとには、まづ酒をすゝめ  
 て、強ひ飲ませたるを興とする事、いかなる故とも心えず。

コノ段酒ノ事ヲ論セル自由自在ニシテ、長將ノ兵ヲ用井ルカ如キ觀アリ。冒頭  
 マツ酒ヲ強ヒ飲マスルコトノ心得ガタキユエチイフ。

飲む人の顔、いとたへがたけに眉をひそめ、人目をはかりて捨  
 むとし、遁むとするを捕へて、引きとめて、すゝるにのませつ  
 れば、うるはしき人も、忽に狂人となりて、をこかまじく、息災な  
 る人も、目の前に大事の病者となりて、前後も知らず倒れ伏す。  
 祝ふべき日などはあさましかりぬべし。あくる日まで頭いた  
 く物くはず、によびふじ、生を六たてたるやうにして、昨日の事



おぼえず、公私の大事をかきで、わづらひとなる。人をして、かよるめを見ずること、慈愛もなく、禮義にもそむけり。かゝからきめに逢ひたらむ人、ねたくくちをしと思はざらむや。人の國にかよる習ひあなりと、これらになき人ことにて傳へきよたらむは、あやしく不思議におぼえぬべし。

ユレヨリ飲酒ノ心得カタキ事ヲユマカニイヘルナリ。たへかたけに。飲ミタクナサソウニナリ。酒ヲ強ヒラル、ニ堪ヘカタキナリ。人目をばかりて云々。人ノ見ヌ中ニソノ酒ヲ捨テトシ、マダ坐テ立テ遁ソトスルヲ引捕ヘテ強ヒテノマスルナリ。ずゝろ。ムシヤウニナリ。うるはしき人。端正ナル人ナリ。をかましく。馬鹿ノヤウニナルナリ。息災。无病ナル人。によひふし。呻吟シテ打伏シ居ルコト。生をへたて云々。身ノ前生ノ事ヲ隔テ、知ラヌヤウニ、昨日ノ事ヲサナガラ忘ル、トナリ。人をして云々。飲マスル人ヲ論スルナリ。かくからきめ云々。飲マセラレタル人。ねたくくちをし。残念ニ遺憾ニオモフベシトナリ。人の國に云々。カヤウナル習俗、外國ニアルナリト傳ヘキカバ、誰モ

怪シク不思議ニオモフヘシトナリ。タゞ我慣習ナル故ニ無禮トモ無慈悲トモオモハヌ事ニナレリトナリ。人の上にて見たるだに心憂し。思ひ入たるさまに心にくしと見し人も、思ふどころなく笑ひのゝしり、詞おほく、烏帽子ゆがみ、紐はづし、脛たかくかよげて用意なきけしき、日ころの人ともおぼえず。

人の上云々。カク飲マセラレ、飲マスルコトヲ人ノ上テ見テモ、オモフヲ、自分ガソノ境界ニソゾマ、バイガニ愛キ事ヲラントナリ。思ひ入たる云々。心憂キコトヲ更ニイフナリ。平生ハ思慮モアリテ、奥床シク見エシ人モ、コノ酒ハ爲ニ更ニ思慮モナクナリテ、笑ヒノ、シリ多言トナリテ、蒙リタル烏帽子モ、ユガミ、装束ノ紐ヲモハツシテ、見苦シクナルナリ。マシテ脛高クカ、グルチヤ、女は額髪はれやかにかきやり、まばゆからず顔うちさよけてうち笑ひ、盃もてる手にとりつき、よからぬ人は、肴とりて口にさしあて、みづからも食ひたるさまあし。聲のかきり出してお



のくうたひまひ、年老たる法師めし出されて、黒くきたなき身を肩ぬきて、目もあてられず、すぢりたるを、興し見る人さへうとましくにくし。

額髪はれやかに云々。酒ニ酔ヒテ用意ナキ女ノサマタイフ。抑モ女ハ垂髪ナルガ當時ノ風俗ニシテ、男ノ前ナトニテハ、殊更ニソノ長キ髪ヲ前ヘフリミダシテ顔ノアテハニ見エヌヤウニセシモノナリ。サルニ酒ノメバ自ラソノ髪ヲ晴々シクカキヤリテ、少シモ恥ルケシキモナク、顔サシ上ケテ笑フナリ。盃もてる手にどりつき云々。カハル事ハ今モ酒ノム人ノスルコトナリ。みづからも云々。ココマテハ女ノ事ナリ。聲のかきり。聲ノ出ル限リナリ。すぢり。腰ナトチヒチリテ躍リマハルコト。見る人さへ。ソノナアリサマヲ打興シテ見ル人マデカニク、イヤニオモハルトナリ。

あるはまた我身いみじき事ども、かたはらいたく言ひきかせ、あるは酔ひ泣きし下さまの人はのりあひいさかひて、あさましくおそろし。恥かましく心うき事のみありて、はてはゆるさ

ぬものどもおしどりて、椽よりおち、馬車よりおちてあやまちしつ。物にも乗らぬきは、大路をよるほひゆきて、ついでひぢ、門の下などにむきて、えもいはぬことども、志ちらし、年若い袈裟かけたる法師の、小わらはの肩をおさへて、聞えぬ事どもいひつよよるめきたる、いとかはゆし。かゝる事をして、この世も後の世も益あるへきわざならばいかにせむ。

いみじき事。我身ノエライ事トモテ自慢シテ語ルナリ、のりあひ、嘗リ合フナリ。いさかひ、争フコト。おしどりて、許サヌモノヲ無理ニ奪ヒ取ルナリ。よろほひ。ヒヨイ〜ト歩クナリ。ついでひぢ、樂地ナリ。えもいはぬ事。物ヲハキチラスコトキコトナリ。聞えぬと。ワケノ分ラヌコトタイフナリ。かはゆし。ソノ愚ヲ憐ムコトナリ。かゝる事云々。一句カアリ。コノ世後ノ世少シモ益ナキモノヲサテモ〜トナリ。

此世にてはあやまち多く、財を失ひ病を受く。百薬の長とはいへど、萬の病は酒よりこそおこれ。憂をわするといへど、酔たる



人ぞ、過に<sup>ひ</sup>しうさをも思ひいて、泣くめる。後の世は人の智慧を失ひ、善根をやくこと火のごとくして、悪をまし萬の戒をやぶりて地獄におつべし。酒をとりて人に飲ませたる人、五百生の間、手なきものに生るとこそ、佛は説きたまふなれ。

コノ段此世後ノ世酒ハ害ノミアルコトタイフ。百藥の長云々。味ヒアル文ナリ。後の世云々。經文ノ意ニテカケリ。善根トハヨキコト、ソヲ燒キ盡ストナリ。酒をとりて云々。梵網經ニ云ク、若自身手過酒器、與人飲酒者五百世無手、何況自飲云々トアル是ナリ。

かくうとましと思ふものなれど、おのつから捨てかたき折もあるべし。月の夜、雪のあした花のもとにても、心のどかに物語して、盃さし出したる萬の興をそふるわざなり。つれづれなる日、思ひの外に友の入來て、とりおこなひたる心もなぐさむ。上ニサバカリ酒ノワロキ事ヲ論シテ、コノニ至リテ又一向ニ捨テカタキヨシタイヘル操縦自在ノ筆ツキ、ソノ凡ナラヌヲ汲ミ見ルベシ。おのつから捨てか

たき折もあるべし。コノ句尤強クコノ段ノ骨子トナレリ。心のとかに。心落付テユルくナリ。とりおこなひたる。盃トリ行フコトナリ。思ヒノ外ナル友トイヘルオモシロシ。

なれづしからぬあたりの御簾の中より、御くだものみきなどよきやうなるけはひしてさし出されたるいとよし。冬せばきどころにて、火にてもものいりなどして、隔てなきどちさしむかひて、多く飲みたるいとをかし。旅のかり屋、野山などにて、御着なになどいひて、芝の上にてのみたるもをかし。いたういたむ人の志ひられて、少しのみたるもいとよし。よき人のとりわきて、今一つ上すくなしなどのたまはせたるもうれし。ちかつかまほじき人の上戸にて、ひしくとなれぬるまたうれし。

なれづしからぬ。アマリ馴レサルアタリニテ高貴ノ家ノ女ナドナリ。けはひ、ヤウスものいり。何モノニモアレサシムカヒテ鍋ナドニテ煎ルナリ。御さかななに云々。肴ハ何カヨガラムト云フコトニテ、催馬樂ニ我家は戸は



り帳をも垂れたれば、大君來ませ聲にせむ、みさかなにも何よけむ、あはび、かたをか、かせよけむ。トアル歌ノ詞ヲトリナシテカケリ。カ、ル所ガ文章家ノ用意ト云フモノナリ。いたういたむ人。酒ヲ甚イヤガリテ辭スル人ナリ。今一つ上少し。酒ヲシヒル時ノ詞ナリ。ちかつかまほしき云々。兼ネテ近ツキタキト思ヒ居ル人ノ酒ノ席ニテ馴々シクナレルコトノウレシキチイフ。此レヨリ以下ニ少々文ノコソド、今ハ省キツ。

徒然草の講義はこれにて終るへし。初にもいひしかごとくこの書も随筆にて、教科としては、悉く讀むには及ばざるなり。中にも厭世の多かるは、この書の眞面目のところなれども、この事は決して普通教育にいふへからず。今日は、國家を富強にして、人々護國の念を涵養することを務むるを第一とすべき時なれば、あるにもあらぬ佛じみたる物語は、更に益なき事なり。本書をよみては、たゞ思ふまゝをかきとれる筆つきの輕妙なることを味へば可なり。著者の眞意に訴りて、厭世のことなどを考ふるは、この書に醉ふものなり。人もしこの書

に醉は、遂には危き淵にも陥らむ。さはいへ、右引きたる文の外に、手本とすへきどころもあまたあれど、時間に制限あれば、これにてやむべし。餘はあの一隙を求めて讀むべきなり。さてその参考となるへきものは、あまたあるか中にも、

### 徒然草諸抄大成

### 徒然草文段抄

などやよからむ。また近來各所よりすり出せる活字本の畧註めくものもあまたあり。



### 第三 土佐日記

土佐日記の紀貫之朝臣の筆になりしこと、誰人か知らざるものあらむ。國文の中興はこの人にありしこと、また何人か諾はざる。そもく大化大寶の改新を経て、世は唐囀りをのみ貴きこと、思ふに至れるを、この朝臣みづから一機軸を出して、大に國文の美を唱道せられたる、その功の高き萬古たれか仰かざるものあらむ。朝臣は實に國語の靈なり。國文の精なり。

かゝれば今この日記を解するにあたりては、例によりてそのよき處を摘出せむとあもひしかども、條々削るに忍ひざることも多ければ、かのみむじき諧龍の一節を除きては、さながらに解釋せり。これたゞにその文をよむのみならず、朝臣の當時に於る氣概の一旦を知らしめむと之。

今や我帝國は、はからずも支那と戦を開くに至りぬ。北京城下の盟を爲さしめむことは遠きにあらざるべし。人々各その職を以て事に盡す精神は治世の時よりも、一層迫れり。文に従事せむもの、かの四百餘州の頑民にわが國文を奉讀

せしめむことを務るも、また報國の一ならずや。豊太閤のいろは文字を習はせむとの説、今日まさに試るべき時にあらずや。

#### 本記の成りし年代及其目的、文體

此日記は延長八年に貫之朝臣土佐の國守となり、承平四年に任滿ちて歸京せられし時の船路の紀行なり。香川景樹氏は、延長六年、古今集撰録の時を、四十五六歳と定むれば、この時は七十三四歳なるべしといへり。

文の目的は亡見の悲みを主とし、傍海賊の恐るべき事を叙し、文體は古今集序、大井河行幸序の如く、正格ならず。押なべて、俳諧をもて、書きかすめられたるものから、反てその力量あらはれて、あもしろし。歌の如きも、水手船取のものも、そのまゝに載せられたるは、彼の鳥語蛙聲も、歌ならざるはなしといふこの朝臣の本意より起りて、世人の歌といへば殊更に思考を費して、天真爛漫を欠く恐あるを、戒めたるもの、如し。此事既に頼山陽の論あり

朝臣の本傳は、大日本史歌入傳、古今集目錄等に詳なれば、こゝにはいはず。

#### 諸註釋本



本記の文のめでたき事、意想の高妙なる事は、既に世人に愛せられて、ふるくよ  
り、註釋の書頗る多かるにてしるべし。今此に其重なるものをあげて、この書を  
よまむ、人の参考とせむ。

土佐日記附註

一卷 三本

万治四年、人見卜幽の著なり。卷首に紀氏系圖をあげ、林道春の貫之傳などを  
擧げたり。宣長翁の説に、季吟の抄は、専らこれによれるならむといはれたり。

土佐日記抄

二卷

北村季吟の著なり。寛文元年刊行。

土佐日記註(寫本)

一卷

僧契沖及び賀茂眞淵翁の説を、藤原宇万伎氏が記せるものなり。  
土佐日記創見 四卷附録一卷  
香川景樹の著なり。専ら評論を主とせり。學者よろしく味ひ見る可し。

土佐日記船の直路

二卷

橘守部氏の著なり。俗譯にして初學に便なり。地理圖を附けたり。

土佐日記考證

三卷

岸本由豆流氏の著なり。諸本を校合して註も甚だ丁寧なり。且頭註に、諸説を  
並べ擧げれば、甚だ讀者に便なり。必一本を備へ置く可し。

土佐日記讀本

鈴木弘恭氏、教科用にとて、近頃發刊せられたり。標註あり。

校註土佐日記

一卷

増田于信氏、假字の本文の傍に、漢字をあて、よみ安らしめんために、撰せら  
れたり。活字小本にして、提携に便なり。  
その他、古人今人の註せるもの多かれども、大抵右擧げたるものを見なば、よか  
るべし。余等が校註せし文學全書、地理の事は、土佐入鹿持氏の地理辨尤もよき  
が如し。

土佐日記

をどこのすといふ、日記といふものを、女もして見んとてする



なり、

をどこの云々。此時代の風として、日記といへば、多くは漢文にて、男の爲る業になり居れり。それを、今度女ながらも、試にかきて、見んと思ひて、爲るなりとなり。これ紀氏みづから女になりて、かけるなり。

この冒頭は、一編の骨子にして、いづこまでも、自分を自分とせず、めしき女のさまにとりなして、かけるなり。能々注意すべし。といふものを。これと取出して、いふ時に用ゐる詞なり。今の人かゝる場合に、なるものといふ詞を用ゐるは、非なり。例へば、某々なるもの、仁義なるもの、法律なるものなどの如し。なるはニアリ。

その年の十二月の廿日あまり、一日の戌の時に、門出す、そのよし、いさゝか、ものにかきつく、

その年の十二月。承平四年十二月なり。かくおぼめかしいふも、女の筆にしたらばなり。戌の時。初更なり。門出す。土佐國なる、紀氏の館を出ることなり。もの。ものとは何事にもひろくかけていふ詞なり。こゝにては、紙にか

きつくといふほどの意なり。一日の。一本にはひとひの日とあり。それもよろし。古は、大かた、かやうに唱へしものなり。今世とても、十日の日などいふものあり。

ある人、あがたの四年、五とせはで、例の事ども、皆志をへて、解由などとりて、住む館よりいで、舟に乗るべき所へわたる。

ある人。紀氏みづからをいへるなり。あがたの云々。あがたは縣にて、地方のことをいふ。紀氏の土佐の國守となりて、その住はてゝかへらるれば、かくいふなり。四年五年は國司交替の年期の事なり。此時分は四年交替にて、五年めにかはれば、かくいへるなり。例の事。例とは交替の時に例として、必有る事務の事にて、官税公事など、いろくあるべし。志をへて。爲し竟りてなり。解由。これは解由状といふものにて、官税公事など、惣て、滞りなく、後任の人に、引きわたせば、後任者より、その算勘滞りなきよしの證文を、渡すなり。此かきつけを、解由といふ。それをも、請取てなり。住む館より云々。あがすむ館より出でて、舟にのるべき所、即ち大津へ行かれしなり。この文は、てゝ志をへて、いで、など



て。字の重れるは、古文の法にて、古事記などにも見えたり。かれこれ、**志る**、**志らぬ**、**おくりす**、**年ころ**、**よく具じつる**、**人々なん**、**わかれ**がたく思ひて、**志きり**に、**とかくしつよ**の、**よしする**うち**に**夜ふけぬ。

**志る**、**志らぬ**。知る人。知らぬ人も見おくりせりとなり。年ころ云々。多くの送別人のある中にも、年來、能く召使し人々等は、ことに別れが悲く思ひて、頻に兎や角やして、即ち酒肴などを取出して、彼是と騒ぎ居る中に、夜更ぬとなり。の、しるとは喋々と騒ぐ事にて、晉罵することにはあらず。なんといふは、ぞといふに同じく、**志つ**は、しつ、志つといふことなり。

廿二日、和泉の國まで、たひらかに、**ねかひたつ**。藤原言實舟路なれど、馬のはなむけす。かみ、なかしも、**ゑひ**すぎて、いとあやしく、**志ほう**みのほどりにて、**あざれ**あへり。

和泉國云々。都にかへらん旅路なれど、土佐より海をしのむかひなる、畿内の和泉國まで、先づ平らかにあれかしと願ひて、この津をいで立つとなり。これ當

時海賊多く、かつ波もいと恐ろしかれば、平安なれかしと、心に願はるゝなり。是らも、女になりてかけるあど、明らかなり。船路なれど、馬のはなむけす。馬のはなむけとは、餓別の事なり。古へ旅立つ人ある時は、そののれる馬の鼻を行先へむけて、恙なく歸りこよなどいひし事ありしより、おこれり。されば陸地にて馬より行く旅ならば、**餓別**も相應せんを、今度は船路なるに、馬の鼻むけすることよど、詞の上につきて、諧謔にかゝれたり。かみは上、なかは中、**志**もは下にて上中下の人々が、その送別の馳走に酔ひ過ぎて、たはれるさまなり。**志ほう**み、潮海なり。**あざれ**。鱧なり。魚の腐ること。この意は魚は潰しおけば、鱧るゝやうのとはなく、鹽は即腐敗を止むるものなるに、今この人々は鹽海の邊に在りながら、**あ**のく、**鱧**れく、て酔へるは、いかにもあやしきことよど、これも諧謔なり。あへりとは、大勢の人が、誰も誰も騒ぎあふ事なり。船路なれど、云々、**志ほう**みのほどりにて云々、かやうの牀この日記に極めて多し、よくく、前後を合せて味ふ可し。

廿三日、山の康教といふ人あり。この人、國に必しも、いひつかふ



ものにもあらず。これぞ、たゞしきやうにて、馬のはなむけしたる。守がらにやあらむ、國人の心の常として、今はとて、見えざるを、心あるものは、耻ずになん來ける。これは、物によりて、ほむるにしもあらず。

山の康教。一本には八木とせり。孰も系圖は詳ならぬと、土佐國にて由ありし人に見ゆ。國に必しも云々。この康教といふ人は由緒ある人にて國守などに、勝手にいひつかはるゝごとき人にてあらずとなり。相應なる資格ありし人なるべし。これぞ云々。されば康教一人ぞ禮義正しきやうなる、餞別せしとなり。ぞとは外の人々の中より、取分けていふ詞なり。守がらにやあらん。守故にやあらんといふに同じ。これは自らを褒めていへる例の滑稽なる筆つきなり。謙遜の辭とせるはいかゞ。國人の心のつねとして。國人とは惣て地方の人の心の常をいふ。土佐一國にあらず。今はとて云々。今は別るといふ時には、送りてもこず、影も見せぬものなるにとなり。ぞなるはズアルナルといふことの急言なり。心あるものは云々。心あるよき人々には、さる薄情なる人

には耻ることなく、こゝまでおくりくれたりとなり。衆人皆薄情なるに、たゞひとり禮儀を重んずるは、薄情なる人に對しては、反て耻しきやうなるものなれど、それに耻ずして、禮をつくしたりといふなり。さて守がらにや云々。より此までの文意を、とりまどめていへば、全牀に國人の風として國守などの任に居る程は、彼是と騒ぎて、親愛なる様子を見するものなれど、其人が其國を去る時には、一向に見むきもせぬ薄情なるものなるに、このおくり來し人は、さる事はなく、いとも正しき禮義をつくせるは、ちのれが治めかたのよかりし故にやあらん、おざらむが事をほめて、かゝれたる文なり。されば守がらにやあらんといふ文は、心あるものといふに係るなり。この所よく、味ひ見る可し。古注のみを墨守しては、解しがたかるべし。これは物によりて云々。但しかくほめたて、いふも、この人が贈物のよかりし故にはあらず、まことに、其人の心のよかりしなりと、ことわりたる文なり。

二十四日、講師馬のはなむけしにいでませり。ありとある、上下、わらはまで、酔ひしれて、一文字をだにしらぬものしが、足は十



文字にふみてぞあそぶ。

講師。これは國々にある國分寺の住職なり。中古の制、いづれの國にも、必これありき。こゝなるは、即、土佐國の講師なり。紀氏の在國中、常の談ひ人なりけむ。いでませり。かく敬語をもちわたるも、講師なればなり。ありとある云々。そこにありあふ、上下の人、さては童蒙に至るまでなり。酔ひ忘れて。講師のもて來りし、餞別の酒に酔ひたはれてなり。忘れてとは、痴になるまでに、酔ひたるさま。一文字をだに云々。此にある人々は、一向に無學の者にて、一の文字テサヘモ知らぬものなれども、今酒に惹ひすぎ、其足のみは十文字にふみて遊ぶは、いかにもあもしろき事よとなり。ものしが。しは強めの助辭、者がといふことを強くいはんとて、狹めるなり。さて此は初に講師の餞別なるよしをいひし因みにて、一文字十文字など、ことさらに學者に縁あるやうに取出して戯れかける筆つきのほど、おもひやるべし。さて一といひ、十といふは、字音のまゝに訓むべし。

二十五日、守の館より、よびに文もて來たり。よばれて、いたりて、

日ひと日夜ひと夜、とかくあそぶやうにて、明にけり。

守の館。守とは紀氏に替りて、來れる新任の國守なり。そこよりよびにきたりとなり。よばれていたりて云々。呼ばるゝまゝに、其館に至りて、一日一夜とや角やして遊ぶやうにして、遂に夜が明たりとなり。これ交はり深き中なれば、さまざまに臨みて、談笑せられたるなるべし。一日一夜の事を日一日夜一夜といふは、古言の格なり。

二十六日、なほ守の館にて、あるじゝのゝしりて、をのこままでに、あまたにもものかつげたり。からうた、聲あげていひけり。やまど歌、あるじも、まらうども、こと人もいひあへりけり。

なほ云々。今日も矢張守の館にて、馳走にあへりとなり。あるじゝ。主人の禮を盡すといふことにて、即、禮應をする事なり。のゝしりて。騒ぎあひてといふこと。をのこままでに云々。我のみか、郎等までに、澤山に品物などをくれたりとなり。からうた。詩なり、やまど歌に對へていふ。まらうど。客人の事。いひあへりけり。あへりとは、互に、いひあふこと、誰も彼も歌よめりとい



ふ意なり。  
からうたは、これにはかゝらず。やまと歌あるじの守の、よめりける。

都いて、君にあはむとこしものをこしかひもなくわかれぬるか。

となむ、ありければ、かへる前の守のよめる。

まろたへの浪路を遠くゆきかひてわれに似へきは君ならなくに

こと人々のもありけれど、さかしきもなかるべし。どかくいひて、前の守も、今のも、もろともにおりて、今のあるじも、前のも、手とりかはして、あひことに心よけなることとしていてにけり。

からうたは云々。詩の事は女なれば知らず。故にこゝにはかゝらずとなり。都いで、云々。私は京都をいで、から、君にあはんことを樂しみに、來ましたものを、そのかひもなく、直におわかれ申すが、残念なりとの意。かへる前の守。

即紀氏のことなり。まろたへの云々。京をいで、和泉の大灘より、この土佐まで、はるく、と、おそろしき浪の上を、私とゆきかはりて、からきめ、見給ふ人は、誰にかあらん、即私が尤愛し尤親しむ、あなたであるとは、さてもく、あやにくなることよとなり。これ自ら浪にくるしめられしことを、おもひいで、よまれしなり。俗に我身をつみて、人のいたさを知るといふが如し。まろたへ。波の枕詞。ゆきかひ。行き違ひなり。似べきは。似るべき人はといふことを、かくいふは一格なり。ならなくに、ならぬのになり。即誰てあらふ、あなたであるといふ意。さかしきも云々。さて歌は、この外にもありけれど、めでたき歌はなきやうなりと也。さかしき。かしく、貴くめでたき意。前の守も。紀氏自らのことなり。ありて。館をありてなり。今のあるじ。新任の國守なり。前のも。とは自らの事なり。これ國司の官廳なれば、前には紀氏が主人なりければなり。手とりかはして。手を握りあひてなり。これ送別の禮なるときは、握手の禮は、必しも歐洲風のみはいひがたきか。心よげなる云々。首途の祝など、こゝろよきこと、もして出てけりとなり。よげ。はよさそう



といふが如し。此にて、初て新任の守と別れられたるなり。

二十七日、大津より、浦戸をさして漕ぎいづ、かくあるうちに、京にて、生れたりし女子、こゝにして、俄にうせにしかば、このごろのいでたちいそぎを見れど、なにこともえいはず。京へかへるに、女子のなきのみぞ、かなしみこふる。ある人々も、えたへず。このあひだに、ある人の、かきていませる歌。

みやこへと思ふもものゝかなしきはかへらぬ人のあれば  
なりけり

大津浦戸、土佐國の地名、惣て地名の事は、鹿持氏かける地理辨につきて見るべし。京にて生れたりし女子云々。こはこの里にて、死せしにあらず。土佐にありて、たつ前に死にけるなり。こゝにては、この國にてといふが如し。いそぎを見れど、旅立の何くれと、忙はしきさまを見れど、取るものも、手につかず、物もいひ得ぬとなり。これ、かなしき情のせまりたるにて、實にこの日記の骨子なり。この女子のかなしみありて、この日記は出來しものなり。ゆめくあるそか

に見すことなかれ。この女子は、幾年ばかりにかありけむ。知られされど、漸く七ツ八ツばかりにやあらむ。さては、久しぶりに、京にかへるに、その女子のなきは、いかばかり悲しき事なりけむ。今より思ひやるだに、涙こぼるゝばかりなるを、ましてこの父母には、いかばかりか。えたへず、悲しみに堪ふる事を得ずとなり。みやこへと云々、京の人にて、久しく地方にありしものが、再びその故郷なる、京へかへるは、嬉しくたのしみ極みなれど、たゞ悲しきは、初めつれて來りし人の此國にて死にて、再びつれかへるとの、出來ぬこととなり。かへらぬ人、とは、即京より、國へはゆきて、國より京へはかへらぬ女子のことぞいふ意。みやこへ、とは、都へかへらむといふ意。おもふは思ふにも、さても、といふ意。

またある時には、

あるものと忘れつゝなほなき人をいづらと問ふぞかなし  
かりける

といひける間に、鹿兒の崎といふところにいたるに、守のはら



から、またこと人、これかれ、酒などもて、おひきて、磯におりゐて、  
わかれがたきことをいふ。守のたちの人々の中にこのきたる  
人々ぞ、心あるやうには、いはれほのめく。

あるものと云々、餘りこひ悲きまゝに、亡人も、また世に生きてあるもの、や  
うに覺えて、どこにゐるか、そこにあるか、など問ひ迷ふか、まことに悲しき事、よ  
となり、愛子の死をかなしむ情、溢れて、千載のしも、猶人を泣かしむべし。守の  
はらから、新任の守の兄弟、ちりゐて、船より磯におりゐて、いはれほのめ  
く、この來たる人々ぞ、厚情のやうに、船中の人々に、ウス／＼いはれ得るとなり。  
かくわかれがたくいひて、かの人々の、くちあみも、もろもちに  
て、この海邊にて、荷ひいだせる歌、  
をしとおもふ人やとまるとあしがものうちむれてこそわ  
れは來にけれ  
といひて、ありければ、いといたくめで、行く人のよめりける。  
掉させどそこひまられぬわだづみのふかき心を君に見る

かな

といふあひだに、梶どり、物のあはれも知らで、おのれし、酒をく  
らひつれば、はやくいなむとて、潮みちぬ、風も吹ぬべし、とさわ  
げば、舟にのりなむとす。

くちあみも云々、今も江網奥網とて、廣さは六七尺ばかり、長さは五六十丈も  
あるを、遠く海中へ引き延べて、魚をとる。その引き上ぐる時には、海士ども大勢  
荷ひて運ぶとぞ。此事は、本居翁の、金原清方といふ人の話を、かゝれたるもの  
による、今もかゝる事ありや、海邊の人に尋ねべし。諸持とは、即その大勢にて、  
荷ひものするさまなり。さてこゝにては、彼の江網を海士が大勢にて、ヤット重  
たげに荷ひ出す如く、苦み苦みて、大勢にて一首の歌をつくり出したるを、時に  
とりてをかしく形容せる、例の滑稽なり。歌のたやすく、出来ぬとを、ウメキ出す、  
ヒキリ出すなどいふと全し意。をしとおもふ云々、我が別れを惜しいと思  
ふ人が、もしや留まるかと、我々は打群れて、こゝまで來ましたといふ意なり。  
葦鴨のは、葦にゐる鴨のやうに、群れてといふを、又それにむかへて、初句のをし



むといふとを、鶯鷺にかよはしたり。いといたくめでし、甚しく感じてなり。ゆく人、紀氏をいふ。棹させと云々、棹させともく、底のしらぬこの海のやうに、深き厚き心を、君加上に見るかなといひて、その厚情なるを謝したるなり。そこひは、底といふに全じ。わたづみは、海のとまり。ものゝあはれ云々、人情をも知らぬ、梶取。あはれし、しは、例の強助辭、自分がといふに全じ。いなん、行かんなり。潮みちぬ云々、恰もよし。潮もみちぬ、風も吹き出つ可し、早く此處をはなれんと、自分が酒を食ひつれば、物の哀れも、老らで即かく別れかたき情をも、汲まずて、とく行かん、とく行かん、と騒げば、残念ながら、今は愈、船に乗らんとするなり。食ひつればといふと、にくみたるさま見ゆ。このをりに、ある人々、折ふしにつけて、から歌ども、時に似つかはしきをいふ。又ある人、西の國なれど、甲斐歌などいふ。かくうたふに、ふなやかたの塵も、そらゆく雲も、たゞよひぬとぞいふなる。こよひ浦戸にとまる。藤原の言實、橘の季衡こと人々おひきたり。

時に似つかはしき、別れ相應の歌をうたふ也。甲斐歌、古今集にのせたる、かひがぬをねとし山としふく、風を人にもがなもつけやらんなどいへる類あまたありしなるべし。さて甲斐は、東國なれば、西の國なれど、はいふなり。ふなやかた、即蓬庫なり。謠ふ聲に、梁塵を動かし、行雲を過めきといふ、支那の故事をおもひよせてかけり。塵も雲も漂ふとは、塵は散り、雲はそこに漂ふといふとを、畧してかけるなり。言實、季衡、共に紀氏の知人なるへし、系圖明ならず。さて、廿一日に家出して、船にも乗らで、そここに、別ををしまれて、やうく今日、船に乗られたる、當時の人情おもひやるべし。廿八日、うら戸より、漕きいで、大湊をおふ。このあひだに、はやくの守の子、山口の千岑、酒よきものども、持て来て、舟に入れたり。行くく、のみくふ。

うら戸大湊、共に地名なり。土佐の國にあり。あふとは、物と物と、重なる意に、用ゐる詞。子を食ふ、名に食ふ、などいふもあなじ。こは、浦戸より、大湊をさして、船をやるより、かくはいへるなり。はやくの守、紀氏より前の、土佐の國



守なり。よきもの、肴などのめでたく、甘きものをいふ。行く／＼云々、船中にてなり。

廿九日、大湊にとまれり。くすし、ふりはへて、屠蘇、白散酒加へて、もてきたり。心ざしあるに似たり。

くすしは、醫師なり。當時の制、國毎に、必醫師一人をおくことなり。職員令に、凡國博士、醫師、國別各一人とある是なり。ふりはへて、俗にわざ／＼といふが如し。袖ふりはへてなどいふと同じ。屠蘇云々、屠蘇、白散は、孰も正月元日に用ゐるものなること、今の世もちなむ。但し白散は處によりて用ゐぬもあり。延喜の典藥式に、白散一劑、白散歳旦以温酒服五分、一家有藥則一里無病、帶是散病氣皆消、屠蘇一劑、屠蘇酒治惡氣温疫辟邪風毒氣と見ゆ。酒加へて、藥のみならず、酒をも加へて、くれたるは、頗志あつきに似たりとなり。醫師のおくりものには、いかにも適當なり。

元日、なほおなじとまりなり。白散をあるもの、夜のまとして、舟やかたに、さしはさめりければ、風にふきならさせて、海にいれて、

えのまづなりぬ。

元日、承平五年正月元日なり。同じとまり、大湊なり。白散を云々、昨日醫師より貰ひたる白散を、夜の間の事として、丁寧にままひもあかず、たゞ舟蓬のはしに、挿みおきたりければ、風の爲めに、海に吹きいれられて、飲むとを得ずなりたるが、残念なりとなり。めりければ、挿みてありければなり。風に云々は、風といふものを、一の生きものとして、其風に勝手にせられたりとかける。非凡の筆つき味ふへし。ならさせて、といふも、風を本にたて、かける文勢なり。かゝる筆法西の國人のかけるものに多し。

芋も海帶も、はがためもなし。かうやうのものなき國なり。求めしもおかず。たゞおしあゆの口をのみすふ、このすふ人々の口を、おしあゆもしおもふやうあらむや。

芋海帶、共に正月に用ゐる具なり。はがためとは、鏡餅をはじめ、それに取りあはせて、元日に必ず用ゐる、大根、申柿などをいふなり。儀式書には、齒固とかけり。かうやう、かやうなり。國なり。國とは、紀氏の乗れる、船中の事



を滑稽にいはれたるなり。今も一家の事を我が國此家の世界など戯れいふとあり。決して土佐國といふとにあらざ、旅立の時いそぎたれば元日の用意もなさず、かやうなるものもなき國ぞといへるなり。土佐の國にかゝるものゝなき理あらむや。海士の子さへも元日にはかゝるもの用あるは一般の習はしなりけるものを。求めしも、求めもあかずとなり。あしあゆ、押年魚にて鹽に押したる鮎なり。これも元日の一具なるがたま、是のみありしかば、大勢にて、こを食ひきとなり。口をのみすふ、鮎は口の大なる魚にて、其口に吸ひつきて、食ふさまを滑稽にいへるなり。このすふ人々の口云々、押鮎なれば、定めて普通なるよりは、堅かりけん。されば人々唇をさまぐの貌になして、すふさまをもしこの鮎心あらば、いかにか思はん。必ず思ふむねあるべしと口をすふとより、おもひよせてかける戯れなり。

けふは、京のみぞおもひやらる。こへのかどの、きりくめ繩の、なよしの、かしら、びらき等、いかにとぞいひあへる。

けふは云々、元日なれば、京の方の事のみ思ひやらるゝとなり。そのおもは

るゝ、一つ二つをあどにかけり。即ちこへのかどのしりくめなは、こへとは小家なり。元日には、賤夫が門までも、きめなはをひきはへて、めでたきさまをいふ。さてこの文一本に、こへのとあり。されば九重にて、宮城の御門のこととなる。いつれにてもきこゆべし。きりくめなは、今いふきめなはなり。こはわらの尻をこめて、なふもの故に、かくいふなり。なよしのかしら、なよしは鮎なり。鮎の頭をとりそつて、祝ひしなり。ひらきは、椀なり。維新前は多く節分の日に、このことをなしたりとあほゆ。いかに云々、きめなはのこと、椀の枝の事、なよしのかしらをかざれることなど、いかにありけんといふ。忍はしきよしに、都のさまを互にいひあふなり。あへる。とは、大勢にてそこからも、こゝからもいふこと。

二日、なほ大湊にとまれり。講師のもの、さけ、おこせたり。講師のこと、前に出てたり。ものは、惣て贈物のことを大よそにいふ。極まりたる品にはあらず。

三日、おなじどころなり。もし波風の志ばしと、をしむ心やあら



む。こゝろもとなし。

もし波風云々、あまりに、こゝに日數經て、船の出しかたきは、もしや波風の、おのれらを、暫らく々々々と、別ををしむ心やあらんかとなり。これ風波のため、に隔てられたる、苦しさを、述べたる詞なり。心もとなし。は、氣がオチツカヌさまなり。さままゝに、おもひわびて、待ちどほにおもふことなり。

四日、風ふけば、え出てたゞず。まさつら、酒よきもの、たいまつれり。かうやうに、物もてくる人に、なほしもえあらで、いさゝけわざせさすものもなし。賑はしきやうなれど、まくる心ちす。

風ふけは云々、今日こそ、はとちもひしに、風ふけば、出立することを、得すとなり。まさつら、系圖詳ならず。たいまつる。は、献るの音便なり。なほしもえあらで、なほは黙してなり。しは例の強助辭。えあらで、は、あるを得ずてなり。黙つても居られずになり。いさゝけ云々、いさゝけは、聊といふにあなじ。かやうに、ものもてくる人に、せめて、聊ばかりの、返禮しやうとちもへど、船中なれば、さるものもなし。されば、酒肴など、打ちみだれて、一寸にぎは

しきやうなれど、人の馳走のみなれば、それらに對して、何か心に負くるやうなる氣がするよとなり。

五日、風波やまねば、猶おなじどころにあり。人々たえず吊ひに來。

六日、きのふのことし。

七日になりぬ。おなじみなど、にあり

去年の十二月廿九日より、波風のため、大湊に碇泊し、さて遂にこの七日まで、になりぬとなり。なりぬの句、簡にして、味甚ふかし。

けふは、青馬をおもへど、かひなし。たゞ波の白きぞ見ゆる。

正月七日には、朝廷にて、青馬節會アヲウマノキマエとて、天皇豊樂殿トヨガクノミヤに出御し給ひて、馬を見たまふ定めなり。こは支那の月令などの、故事に基かれしものにて、彼國にては、古き儀と見えたり。我朝にては、大化改新以後の事とちもはる。こは元日白馬踏歌ハツヒノウマノフミウタと並べ云ひて、年頭の節會となり、大に重んぜられし事なり。青馬は、青陽の氣を調ふものなる故に、年頭に見れば、邪氣を遠ざくなど、いへる説より起れ



り。後には、白馬を引くことゝなれど、猶アヲウマとよむは、古の語のこれ  
るなり。たゞ波の云々、さてさるめでたき節會にも、逢ひ申すことを得ず、た  
い波の白きをのみ見て、おもひやるとなり。この頃は、已に白馬にかへられた  
る時にもあるか。但し延喜式には、青馬とかき、日本紀畧には、村上天皇以後こ  
そ白馬とは見ゆれ、白と青と一なりといふ説は、諸ひかたし。  
かゝる間に、人の家の池と名あるところより、鯉はなくて、鮒よ  
りはじめて、川のも海のものも、長櫃に荷ひつゞけて、お  
こせたり。若菜籠にいれて、雉など花につけたり。若菜ぞ、けふを  
知らせたる。歌あり。その歌は、  
あさちふの野へにしあれば水もなきいけにつみつる若菜  
なりけり  
いとをかしかし。

池と名ある、池といふ地名のある所の家よりといふとなり。鯉は云々、池  
といふからには、鯉はあるべきやうにもはるれど、それはなくて、鮒以下の魚

どもを、おこせたりとなり。例の文法おもゑろし。川のも海のもの、川のも、  
海の魚もといふと。ことのもとは、川海の魚の外のものなり。長櫃に荷ひつ  
ゞけ云々、かやうなる贈物どもを、長櫃に荷ひつゞけて、持て來たりといへる  
にて、其數の多かりしを知るべし。雉など云々、風流の贈りものには、雉など  
を、花の枝につけてものするわざあり。こゝは正月なれば、梅花などにてやあ  
りけん。若菜云々、そのもて來たりしものゝ中に、若菜一籠あり。これぞ今  
日を知らせたるとなり。そは七日には、若菜を摘むべき習ひありければなり。  
それにつけての歌は、一向につまらぬ若菜と卑下していへりしなり。あさち  
ふは、淺茅生にて、茅の淺く生したる野といふにつゞけたり。にしあれば、  
にあればなり。水もなき池、一鉢池には、水のあるべき筈なれど、今は水もな  
き池にて摘みける若菜である。されば、味もいかゞあらんとやうに、謙遜した  
る意なり。いとをかしかしは、この歌の評なり。いかにもおもゑろきこと  
よといふが如し。かしは、強辭にて、別に深き意はなし。  
この池といふは、所の名なり。よき人の男につきて、降りて、住け



るなり。この長櫃のものは、皆人、わらはまでにくれたれば、あき  
みちて、舟子どもは、腹つゝみをうちて、海をさへおどろかして、  
波たてつべし。かくてこの間に事多かり。

この池云々 は、今この贈物につきて、作者の註せる詞なり。よき人云々、都  
などにて、相應なりし女の、さるべきことにて、男につきて、はるく〜と降りて、こ  
ゝに住みけるものなり。されば都風の、みやびやかなるおくりものをしたり  
といふなり。さてこの贈物は、皆人々に、くれたれば、よろこびて、飲み食ひつる  
に、はては、飽き満ちて、舟子等は、腹鼓を打ちて、うれ志かりきと云ふ。海をさへ  
云々、こはその腹鼓といふことより、戯れにかき出たる文なり。あまりさわ  
ぎて、腹つゝみ打つにつけては、海までも鳴りといろかして、波をも立つべくも  
もはるとなり。かくいひて、あまり馳走に過ぎたる爲に、極めて忌み恐るべき、  
波をもたてんさまなりと、戯れかける、よく味ひ見るべし。このあいだに云々、  
この間に、書くべきことも多かりしかど、皆はぶきてかゝぬと云ふことを、合め  
たるなり。

今、わりごもたせて來たる人、其名などぞや、いま思ひ出ん。この  
人歌よまんど思ふ心ありてなりけり。どかくいひくして、波  
の立つなる事とうれへいひて、よめる歌  
行くさきに、たつ白波の聲よりも、おかれてなかむわれやま  
さらむ。

とよめるいと大こそなるべし。

わりご、今いふ重函やうのものなり。和名抄、行旅の具に云、櫛子(漢語抄云、  
櫛子、加禮比計、今案俗所謂破子、其破子讀和利古)櫛子中有障之器也云々と見ゆ。  
旅行などの時には、専ら携へ行きしものと云ほゆ。即ち贈物にとて、是に品々  
を入れて、持たせて來たる人なり。その名などぞや云々、其もたせて來たり  
し人の名は、何とかいひけん。今オツケ思ひ出すべしといひて、わざと名をか  
いぬは、跡にて、この人の歌を嘲らんとての用意なるべし。どかくいひ云々、  
この人は歌よまん心ありて、こゝにどかくの話などもし居りしが、波のたたま  
すことよど歎きいひて、歌よめりとなり。これおのが歌に、波のことをいひた



るを、まかせんとて、かくおぼせといへるなり。行く先に云々、今別れて、あなた  
がゆく、その行くさきに、立んところの、白浪のこゑよりも、別を惜しみて泣ん、私  
の聲の方が、まさりて高からんとなり。かくいひしかば、その聲はいかに大聲  
ならん、波よりも音の高きとは、例の評せるなり。

持てくるものよりは、歌はいかゞあらむ。この歌を、これかれ、あ  
はれかれども、ひとりも、かへしせず。まつべき人も、まじはれ  
ど、これをのみいたがり、物をのみくひて、夜ふけぬ。この歌ぬし、  
またまからずといひて、立ちぬ。

持てくる云々、此人の持て来た物品よりも、歌は劣りて見ゆといふことをい  
かゝあらん、ドゥテアラウトといへるなり。この歌を云々、この歌を大勢の人  
が、これかれとほめはやせど、一人も返歌するものもなし。さりどて、返歌位は、  
する程の人は、交はり居れども、この歌ばかりを、大層にいひはやして、返しはせ  
ず。たいそのもてこし物のみをくひて、夜更けたりとなり。かゝれば、歌ぬし、  
キマリワルクなりて、又参りマセウといひて、その席をたちたりとなり。これ

行先に立つ白波など、不吉なる歌をいひければ、かく嘲けられしものと見えたり。  
まからず、は退るといふことの一格也。但し或人の説にまだ、罷らず  
の義なりといふあり。考ふべきことにや。

ある人の子のわらはなる、ひそかにいふ。まるこのうたのかへ  
しせむといふ。おどろきて、いどをかしき事かな。よみてむやは。  
よみつべくば、はやいへかといふ。まからずとて、立ぬる人を  
待て、よまむとて、求めけるを、夜ふけぬとやありけむ、やがて、い  
にけり。そもく、いかゞよみたる、いぶかしがりて、問ふ。この  
わらは、さすがに、耻ぢて、いはず。強ひて、問へば、いへるうた。  
行く人もとまるも、袖の涙川みきは、のみこそぬれまさりけ  
れ

となむよめる。かくはいふものか。わらはごとにては、何かはせ  
む。おんな、おきなにおしつべし。あしくもあれ、いかにもあれ、た  
よりあらば、やらむとて、おかれぬめり。



ある人の子のわらは、紀氏の子なるべし。わらはとは童子のこと也。ま  
ち。は、自分のことを卑下していふ詞。この歌のかへし云々、私か此歌即ち  
前に嘲られし人の歌のかへしせんといふなり。あどろきて云々、小供の言  
なれば聞く人あどろきて面白きことをいふものかな。詠出づることができ  
るかよみはせじとなり。やはは反語。よみつべくば云々、もしよみいづ  
べくは早くいへよと也。かしはつよめていふ詞。まからずとて云々、小  
供の言なり。さきにまたまからずといひて、行きける人のかへりくるを待ち  
て返しせんとてその人を尋ねあるきしが夜が更けたりとてにやありけん。そ  
のまへに、かの人、これによればまだまうずの説よきかとし、歸り行きけり  
なり。そもくいかがよみたる云々、そもくとは上を押へて、下を起す  
詞。それハソウにて、いかによみたるかと、不審かりとて、ば其童さはいひし  
もの、耻ぢていはずとなり。さすがにとはソウハソウナガラと、いふが如  
し。強ひて問ひければいへる歌。行く人も云々、互に別を惜みて、泣く涙の  
多く出ること、川にたどへ、さてそれより汀といひなして、この邊に居る人々

は、皆涙に濡れまさるといへるなり。かくはいふものか。小供ながらかやう  
に、あもしろくも、いひたるものか、と打あどろきたる詞なり。わらはごとにて  
は云々。小供の言にては、何かせんよく出来たれば、姫翁の歌に爲すべしと  
なり。にをのをは意味なし。たゞ休めにおけるなり。雨はを止むなどの詞  
あしくもあれ云々、この歌よくもあれ、あしくもあれ、便りありたらば、かの人  
におくらんとて、打たかれしやうすなりといへり。みつからを、女にして、脇よ  
り見たるやうに、かきなせるは、例の筆法なり。  
八日、さばる事ありて、猶れなじどころなり。こよひ、月海にぞ入  
る。これを見て、業平の君の山のはにげて、入れずもあらなん。ど  
いふ歌なん、おほゆる、若し海邊にて、よまししかば、波立さへて、  
入れずもあらなん。とよみてましや。いま、この歌を思ひいで、  
ある人のよめりける。

さばる事、は波風などの障なるべし。山のはにげて云々、古今集雜上にあ



かなくにまだきも月のかくるる。か山のはにけて入れずもあらなんといへる歌なり。マダあかぬのに、早くも月のかくるることか。ドウゾ山のはを遁して月をいれないやうにしてほしいといへる心なり。これ月は山にいろものなればなり。もし海邊にてよまゝしかば云々、若しこの歌を海邊にて、こよひのやうなる時に、よみたらんには、波立遮りて月を入れないやうにしてほしいとよむであらふとなり。海邊の月は、海に入りて、おのづから異なるけしきを、そのまゝに、をさなくいへるが、めでたきなり。ある人とは、紀氏自らのとなり。てる月の云々、今月を見れば、海に流るゝやうなるが、その海のはてど、天とは、一つになりて、更にその別なきやうなり。さては、天の川をいつる漕は、海でありけるよとなり。これ一天さえわたりて、海と空と一つに見ゆるに、月のくまなくかゝりて、潮にうつれるさまをよめるなり。海邊にいでたらん心地にて、味ふべし。ざりけるとは、ぞありけるの急言なり。とや、はどかやといへること。是或人の歌なれば、かくはいへるなり。

九日、つとめて、大港より那波のとまりをおはんとて、漕き出け

り。これかれ、互に國の境のうちはとて、見おくりにくる人あまたあるが中に、藤原言實、橘季衡、長谷部行政等なん、御館より出てたまひし日より、こゝかしこにおひくる。

つとめて、は早朝なり。國の境のうちには、土佐の國境の中は、見送らんとて大勢來しとなり。その來る人々の多かる中に、藤原以下の人々ぞ、國司の館を出でしより、つねにおひつきて、來けるとなり。

この人々ぞ、心ざしある人なりける。この人々の、ふかき心ざしは、この海には、おとらざるべし。これより、今は漕ぎはなれて行く。これを見おくらんとて、この人どもはおひきける。

この人々とは、藤原以下の人々をいふ。この人々の深き志は、この海の深きにも劣らずといへるなり。

かくて、こぎゆくまに、海のほとりに、どゞまる人も、遠くをりぬ。舟の人も見えなくなりぬ。岸にもいふことあるべし。舟にも思ふことあれど、かひなし。かゝれど、この歌をひとりごとにし



てやみぬ。思ひやる心は海を渡れどもふみしなればしらずやありけん

まに／＼漕ぎ行くにつれてなり。とまる人云々 この文簡にして情ふかし。且實際のさまなり。味ふべし。岸は止る人、舟は行く人なり。さるを舟なる人も見えずなりぬといふは自分舟に居りながら向ふの人の心を思やりていふとなり。されば舟の人も見えすなりけんなどかくべきなれど、さては落つかぬまゝにわざとかくはかけるならん。強て文法に拘泥すべからず。かゝれど云々、甲斐なきことながら、唯この歌を獨言にして止みぬとなり、別のかなしき情あふれたり。おもひやる、岸にとまれる人の事をおもひやるなり。こゝろは我心なり。ふみしなればは文なければなり。心ばかりは向の岸にわたれども海上にて文やるつでもなければ、そのおもふむねをば知らずやありけんとなり。ふみしのしは強助辭なり。かくて、宇多の松原をゆき過く。その松のかず、いくそばく、いく

千年経たりとも知らず。本ごとに波うちよせ、枝ごとに鶴とびかふ。おもしろしと見るにたへずして、舟人のよめる歌。見はたせば松のうれごと、にすむ鶴は千代のどちどおもおべちなる。とやこの歌は、所を見るに、えまさらず。

いくそばく、幾十許なり。本は松の根なり。とびかふ、飛び違ふなり。松のうれごとに、うれとは末の事なり。松の枝の裏のこと。どちは、友どちなり。鶴は千年のよはひあるものなるに、かくこの松の末に、すみをるをおもへば、これをおのが友どちとおもへるにやとの意なり。この歌は云々、評語なり。簡にして味ふかし。けしきをいひつくさずといへるなり。

かくあるを見つゝこぎゆくまに／＼、山も海もみなくれ、夜ふけて、西東も見えずして、てけのこと、かちどりの心にまかせつ。をのこともならはぬは、いとこゝろほそし。まして女はふなぞこにかしらをつきあて、ねをのみぞなく。かくおもへど、舟子か



ちどりは、ふなうたうたひて、なにともおもへらず、そのうたふ歌。

春の野にてぞねをばなく。わかすよきにて、手をきるく、つんだる菜を、親やまほるらん。しうとめや、くふらん。かへらや、よんべの、うなるもがな。錢乞はん。そらごとをして、おきのりわざをして、錢ももてこず。おのれだにこず。

かくあるを云々、海邊の松原のけしきなどを見ながら、漕ぎ行くまゝに、夜ふけて、東西も見えず、天氣のこと、たゞ舵取が心に任せつとなり、心ほそきさまなり。をのこも云々、男子さへ馴れぬ船路のさまは、ものこころほそきに、まして、女等は氣もよわきものなれば、船底に頭をつきあて、泣てのみありとなり。かくおもへど云々、かやうに、苦しく思へど、舵取等は、何とも思はず、船歌謡ひて、平氣に漕ぎ行くとなり。春の野にて云々、これ即船歌にて、舵取等の仲間に流行したりしものなるべし。この歌の大意は、春の野にて、我が漕の葉手に、手をきるく、泣てつみたる菜を、おもふ人は食はで、親や、姑などか食ひ、食ふ

らん。甲斐なきことよとなり。かへらや、は、拍子の詞なり。よんべの云々、是より、は、又別段なり。昨夜の童子が来ればよい、錢を乞はんにとなり。そらごとをして云々、虚言をして、賒カキわざをして、錢も持て来ず、當人だにも来ずといへるなり。まほる、は、食ることいへるよろし。つんだるといひ、よんべといへるは、即ち田舎人のいへる儘を寫せるにて、なか／＼おもしるじ。賒とは、カケにて、品物をもちゆくことなり。この二つの歌の意も詞も、下品なるは、もとより、船頭等の中に、流行せるうたなればなり。されど、おのつから、この世の人情の一般も、まられて、おもまろきは、今となりては、こよなき賜ものなり。この舵取あり、此筆者ありて、は、じめて、千年以上の、俗歌の一端を、伺ひ知ることを得るは、妙ならずや。今の世に、紀行などか、いん人も、かゝる所に、よく意を用ゐるなば、よからん。

これならず、おほかれど、かゝらず。これらを、人の笑ふを聞て、海はあるれど、心はすこしなぎぬ。かくゆきくらして、どまりにいたりて、おきな人、ひとり、たうゆ、あるか中に、こゝちあしくて、物も



ものしたまはで、ひそまりぬ。

これならず云々、この歌のみならず、多加れど、今はかかずとなり。これらをとば右の歌どもをさす。海はあるれと云々、例の文法なり。なきぬとは、波の治まれるが如くに、心のおちつきたるをいふ。おきな人、老翁一人。たうめ、専女にて、老嫗の事。あるが中に、大勢あるが中になり。船に酔ひ、物もくはずて、ひそまりたりとなり。ひそまるとは、鑑の字にて、玉篇に憂愁不樂之状とあり。見合すべし。酔客のさま見るが如し。

十日、なはのとまりに、とまりぬ。

十一日、曉に船を出して、室津をおふ。人みなまだねたれば、海もありさまも見えず、たゞ目を見てぞ、西東をば知りける。かゝる間に、皆夜あけて、手あらひ、例の事どもして、ひるになりぬ。

例の事とは、毎朝きはまりて、することなり。月の大空にのこりて、まだほのぐらき海上のありさま、そのまゝなりといふべし。

今しはねといふ所に來ぬ、若き童、このところの名をきゝて、は

ねといふところは、鳥の羽のやうにやある、といふ。また、をさなきわらはのことなれば、人々笑ふにありける女わらはなん、この歌をよめる。

まことにて名にきくところは、ねならば飛ぶが如くに都へもがな

とぞいへる。

今し、のじ、ハ強助辭なり。はね、ハ地名なり。鳥の羽によそへて、おもひ出せるなり。歌の意も全く然り。まことにて云々、名にきくはねといふところが、真にてあるならば、その羽にて、とぶやうに、早く都の方へゆきたいものとなり。

かな、ハ願辭。おさなき心のまゝに、よみいでたるのみが、おもそろきなり。男も女も、いかで、とく都へもがなと、おもふことよるあれば、この歌よしとにはあらねど、けにとおもひて、人々忘れず。このはねといふところ問ふ、わらはのついでに、また昔の人をおもひいでよ、いづれの時にか、わするよ。けふは、まして、母のかなしむ



ことはくんだりし時の、人のかずたらねば、ふるきうたにかずは  
たらでぞかへるべらなる。といふことを、おもひいで、人のよ  
める。

世中におもひあれども子をこふる思ひにまざるおもひな  
きかな  
といひつゝなん。

男も女も云々、船のくるしさに男女ともに速に都へ々々とおもひ居る中に、か  
ゝる歌よみたりしかば、そのうたのよしとにはあらねど、いかにもさることよ  
とおもひ、皆人この歌をわすれずとなり。いつれの時にかわするゝ、とはい  
つ忘るゝ時あらふかないとなり。ときにかのかはかほの意、ふるき歌云々  
古今集の編旅の部よみ人知らずの歌に、北へ行くかりぞなくなるつれてこ  
い、かずはたらでぞかへるべらなる、といへるものなり。鴻雁の連を失ひて、かへ  
れるを表にいひて、その下心は、男にわかれて、女一人かへれるわびしさをいへ  
るなり。これをおもひいだして、女兒の死で、數の足らぬをなげかれしなり。世

中に云々、世間に、人のおもひは多かれども、親の子を戀ふる程、深きおもひは、  
なしといへるなり。慈母の情あふるゝが如し。いひつゝなん、かやうなる歌  
をいひながら、漕ぎ行くとなり。

十二日、雨ふらず。文時、維茂が舟のおくれたりし、ならしつより  
室津にきぬ。

雨ふらず、は降らんけしきして、ふらざるをいふ。  
十三日、曉にいさゝか雨ふる。まはしありて、止みぬ。男女ゆあみ  
などせんとて、あたりのよろじきとるに、おりて行く。海を見  
やれば、

雲もみな波とぞ見ゆるあまもがな止まいづれか海といひて知  
るべく  
となん歌よめる。(下)

ゆあみ、浴みなり。久じぶりに陸に上りて、浴みするなり。あたりのよろじき  
其邊の可なりのところなり。おりてゆく、船よりなり。海を見れば、そ



の下りて、行く道より海をふりかへりて見やればなり。あまもかな、蟹もあれかしとなり。雲と浪と一つのやうに見えるを、何れか海であるか、蟹に問ひて知らんとなり。

さて十日あまりなれば、月おもしろし。船に乗りそめし日より、船には紅濃く、よき衣着ず。それは海の神におぢでといひて、云々

乗りそめし、乗り初めし日よりなり。紅濃く云々、船中では美服を着ず、それは海神に見こまる、といひおそれ、各鹿服にてありしとなり。

十四日、曉より雨降れば、おなしどころに、とまれり。船君せちみす。さうじものなければ、午の時より後に、梶取のきのふ釣りたりし鯛に、錢なければ、米をどりかけて、おちられぬ。かゝること多くありぬ。梶取また鯛もてきたり。米酒志ばくく。梶取、けしきあじからず。

せちみとは、節忌とて物忌することなり。この頃は、六齋日とて、一ヶ月の中に

八日、十四日、十五日、廿三日、廿九日、三十日には、魚類などもくはで、忌みつゝし、じものなり。さうじもの、精進物なり。ちちられぬ。船中不自由にて、精進

物にすゑきものなければ、午前二時即十より、昨日梶取が釣りたりし鯛をくひて、精進おとしせしとなり。られぬ。敬語を用ゐたるは、船君のことなればなり。

錢なければ、云々、鯛を求むるには、錢もてすゑきなれども、それなかりし故に、米にて購ひ得たりといふことを、米の縁にてどり掛るとはいへるなり。これ米を以て、通貨とせし名残りならん。錢なければ、といへるは、或は米をいふために、出たる例の筆つきか。くる、くれてやるといふこと。けしきは、機嫌といふ意なり。

十五日、けふあづき粥煮ず。くちをしく、猶日のあしければ、あざるほどにぞ、けふ廿日あまりへぬる。いたづらに、目をおくれば、人々海をながめつゝぞある。めのわらはのいへる。たてはたつゝあれば、またある吹風と浪とはおもふとちにああるらん



いふかひなきものいへるにはいと似つかはし。

正月十五日には、小豆粥煮る、一般の俗なるを、旅中なれば、それも出来ざるか、口惜しくおもふとなり。なほ、矢張なり。あざる、膝行なり。船の一向に進みかぬるをいふ。ながめとは、物案じて、打むかふさまなり。たてはたつ云々、波が立てば、風もたつ、波が居れば、風もある。かく進退去就を共にするを、おもへば、風と浪とは、親友ならん。さて、この二つのものが、我々をこまらすることかなとなり。いふかひなき、言ふ甲斐なき、小供のいへる言葉には、相應せる歌なりとなり。

十六日、風浪やまねば、猶おなじところにとまれり。たゞ海に波なくして、いつしか、みさきといふところ、渡らんとのみなんおもふ。風浪、ともにやむべくもあらず。ある人の、この波たつをみて、よめる歌。

霜だにもおかぬかたぞといふなれど  
八日十四日浪の中には雪ぞふりける

さて、船にのりし日より、けふまで。廿日あまり、五日になりけり。

いつしか、何時かなり。海に風がなくて、何時かみさきにわたらんとばかりおもふとなり。やむべくもあらず。止むやうもないとなり。霜だにも云々、南海には、霜アサへもおかぬといふなれど、浪の中には、雪がふりけるよど、浪のたつさまを、雪に見なしてよめるなり。かたは、方なり。さて、船に云々、さておもへば、この船に乗りそめし日より、廿五日にもなりけるかな。されど、いまだかゝるところに、逗留せりと、一向に進まぬを恨みいへるなり。去年十二月廿一日に船に乗りて、今日正月十六日まで、廿五日なり。

十七日、くもれる雲なくなりて、あかつき月夜、いとおもしろければ、船をいだして、すぎゆくこの間に、雲の上も、海の上も、同じごとくになんありける。うべも、むかしのをのこは、棹は穿つ波の上の月、船は襲ふ、海の中のそらとはいひけん。ききさしに、きけるなり。またある人のよめる



みなそこの月のうへよりこぐ船の棹にさはるはかつらなるらん

これをきよて、ある人またよめる。

かけ見れば波のそこなる久方のそらこぎわたる我そわびしき

かくいふあひだに、夜やうやくあけゆくに、梶取等、黒きくも、俄に出できぬ。風もふきぬべし。みふねかへしてん。といひて。かへる。このあひだに、雨ふりぬ。いとわびし。

雲の上も浪の底も云々、一天すみわたりに、月かげなどの海にうつりたらんけしき、まのあたりみるがごとし。うべも、宜もにて、尤の事ぢやといふがごとし。棹はうがつ云々、こは漁隠叢話といふものに出たる詩にて、棹穿波底月船壓水中天、といへる、買島といひし人の句なり。きよさしに云々、聞きかぢりに、きよたりとなり、これも女のさまなれば、詩などのことを、かしくいはんは、いかしとおもひたるかきかたなり。みなそこの云々、海底に月がう

つりて居る、その上に、船をうかべて、漕ぎゆけば、誠に大空を行くが如し、されば棹に觸るるは、彼の月中に、生したりといふ、桂ならんといへるなり。かけ見れば云々、かけは月影なり。波の底に、月が沈て居る。その上を、漕ぎわたるは、とりとめもない、おそろしき、大空を行くやうなる、心地して、つらきこととなり。久方はそらの枕詞。この二首は、いづこまでも、海を空と見なしての感想なり。月中の桂のことは、支那にて古くよりいふことなり。かくいふあひだに云々、やうく、夜明行くに、黒雲俄に出来て、船かへせること、いかにつらかりけん。雨さへもふりいでぬといへは、ことなり。

十八日猶おなじどころにあり。海あらければ、船いださず。このとまり、遠く見れども、近く見れども、いとおもしろし。かよれども、くるしければ、何事もおぼえず。男どちは、心やりにやあらん。から歌などいふべし。船もいださで、いたづらなれば、ある人のよめる。

いそふりのよするいそには年月をいつともわかぬ雪のみ



そふる

この歌は、つねせぬ人のことなり。

このとまり云々、この湊のけしきの、遠くより見ても、近くより見ても、ちもしろきをいふ。くるしければ、船酔などならん。心やり、鬱心をやるにて、慰むことなり。からうたは、唐詩なり。いそふり、磯觸にて、岸にうちよする波のつよきものをいふ。波のうちかへし、折かへして、よする磯邊には、年月をいつとわかちなく、雪のふることとなり。波を雪にたとへて、その雪の、いつもく、止む時なきが奇なりとて、風波のはげしきをかこてるなり。つねせぬ、常に歌などのことをせぬ人の、よめるものなりとなり。こと、は言なり。即ち歌をいふなり。

また人のよめる。

風による浪の磯には、鶯も春もえしらぬ花のみぞ咲く  
この歌どもを、すこしよろしときよて、船の長しけるおきな、月ころのくるしき心やりによめる。

立つ浪を雪か花かと吹く風によせつゝ人をはかるへらなる

このうたどもを、人の何かといふを、ある人のまたきよて、ふけりて、よめる。その歌、よめる文字、三十文字あまり、七文字。人皆えあらで、笑ふやうなり。歌ぬし、いとけしきあしくて、急まず、まねべども、えまねばず。かけりども、えよみあへがたかるべし。けふだに、いひがたし。まして後には、いかならん。

風による云々、風のために、打よせらるゝ、海岸には、鶯も春も知ることを得ざる。花のみ咲くとなり。初なるは、雪にたとへ、こゝなるは、花にたとへたるなり。すこしよろしとは、この二首の歌どもをいふなり。船長の翁は、即ち紀氏なり。立つ波を云々、前に波を雪と見、或は花と見たるを受けて、波といふものを、雪であらふか、花であらふかと、吹風にうちよせて、人を誑かすやうであるとなり。これは海を本として、それがその浪を、風に合して、雪にせさせ、花にせさせて見するをいふなり。人の何かと、何かとは、何かくゝと、どりはやすをいふ。



たゝきて云々、紀氏もさきの歌どもをきいて、この歌をよめるに、ある人もまたこれをきいて、いと耽りてよみたりとなり。耽るとは熱心になるをいふ。三十文字云々、歌は三十一文字の正則なるに、三十七字とは、あまりなれば、堪へ得ずして、笑ふやうすであるとなり。歌ぬし云々、人々の皆笑ふに、歌主は機嫌あしく、唯獨黙として、笑ひもせず、キマリワルク居る躰なり。まねへども云々、全躰この歌は、真似せんとおもへど、真似られず、またかきて出したりとも、讀まれざるべし。あへがたかるべし。とは、讀みオホスルコトは出來マイとなり。けふだに云々、只今よみたる席にてても、かくむつかしく、よみにくく、いひにくき歌なれば、とても、後世に傳へたりとも、マルテよまれざるべし。それゆゑにこゝには、書きしるさずといふことをいかならんと、大よそにいひなしたるべし。

十九日、日あしければ、船出さず。

日あしければ、とは、日よりのわるきことなり。

二十日、きのふのやうなれば、船出さず。皆人々憂へなげくくる

しく、心もとなければ、たゞ、日の經ぬる數を、けふいくか、廿日、三十日と、かぞうれば、およびも、そこなはれぬべし、いとわびし。

心もとなければ云々、甚待遠にもへば、唯日數の經ぬるをのみ指折りつゝ、かぞうるに、あまりいくひも、立ちければ、指も損はれぬべしといへるなり。および、とは指のことなり。和名抄に、指ユビ和名ユビ由比ユビ俗云ユビ於與比ユビ手指也ユビとあり。

夜はいもねず。廿日の夜の月、出にけり。山のはもなく、海の中よりぞいでくる。かうやうなるを見てや、むかひ安部仲麿といひける人は、もろこしにわたりて、かへりきたる時に、舟にのるべきところにて、かの國人馬のはなむけし、別を惜しみて、かしの、からうたなどしける。あかずやありけん、廿日の夜の月出るまでぞありける。その月は、海よりぞいでける。これを見て、仲麿のぬし、我國には、かゝる歌など、神代より、神もよみたび、今はかみなかしの人も、かうやうに、別ををしみ、よるこびもあり、



かなしみもある時にはよむとて、よめりけるうた。

あほうなはらふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし  
月かも

とぞよめりける。

いもぬず、いとよくぬむることにて、此は舟をいださいるがつらさに、寐も  
せずといへるなり。山のはもなく、月は通例山の端より出るが常なるに、  
こゝは海上なれば、海の中よりいできとなり。さてこの海中の月を見て、昔あ  
りし仲麿の事思ひ出しなり。この人は奈良朝のころ、留學生となりて、唐に行  
き、やがて其國の官吏となり、遂に彼の地にて死せし人なり。事は續日本紀に  
見えたり。この人、一たびかへらんとて、明州といふところの海邊にて、互に別  
を惜しみしことありしを、こゝにはかけるなり。もろこしは唐土のこと、  
あかすや云々、別れがたく、飽ずしもやありけん、廿日の夜の月が出るまであ  
りけりとなり。我國とは、唐土に對して、日本國をいふ。よみたひ、よみた  
まひといふこと。今はかみなかしも云々、今は上中下の人おしなべて、かや

うに、別を惜しみ、又は喜びかなしみなどある時には、よむことなりとて、仲麿の  
よみにし歌はとなり。あをうなはら、青海原にて、海は青々とあればいふな  
り。原とはすべて廣きところをいふ。ふりさけとは、遙々と見やる心なり。  
春日云々、大和の地名なり。かも、は、カマアといひて、歎きたる詞なり。一  
首の意、今この海邊より、はるくと見渡せば、月いとけしきよく、さしのぼれり。  
アレアノ月は、我が故郷なる、春日の三笠山を出しものかマア、と本國をきたふ  
の情溢れて、よみいだせるなり。外國にて月などを見たらんには、いかにもか  
ゝる感あらん。

かの國の人聞きまゐるましくおほえたれど、ここの心を、をどこ  
もじにさまをかきいだして、こゝの詞つたへたる人に、いひし  
らせければ、心をやきうえたりけん、いとおもひのほかになん  
めでけるもろこしと、この國とは、こと異なるものなれど、月の  
かげは、おなじことなるべければ、人の心もをなじことにならん。



この心を云々、一首の意を漢字にかきあらはして(男文字とは漢字のこと)我國の詞傳へたる人即ち通辨をよくする人にいひしらせければ、その意のあるところをやきとえたりけん、思ひの外に感嘆せしとなり。もろこしと云々、さて是にておもへば、唐土と日本とは言語は異なれども、月影は同じ事なるべければ、人の心もおなじことじやあらん、さればこそかく意外に感歎しけれとなり。面白き文なり。

さて、今そのかみをおもひやりて、ある人のよめる。

都にて山のはに見し月なれど

なみよりいでし波にこそいれ

ある人 とは、紀氏なるべし。そのかみ とは、仲麿の時なり。都にて云々、都にては、月といへば、山より出でし山にのみいるを見しが、此にては、波よりいでし波に、いふことよといひて、日數經て海上にあるをかこちしなり。

廿一日、卯の時ばかりに、舟出す。皆人々の舟いづ。これを見れば、春の海に、秋の木の葉しも、散れるやうにぞありける。おぼろげ

のねかひによりてにやあらん、風も吹かず、よき月いできて、こぎゆく。

おぼろげの云々、真淵翁のおぼろげならぬといふを省きたる詞なりといはれたるに従ふべし。即ち一通りならぬ願にどの意なり。

この間に、つかはれんとて、つきてくるわらはあり。それかうたふ歌

猶こそ國のかたは見やらるれわが父母ありとしおもへば  
かへらや

どうたふそあはれなる。

猶こそ、猶はヤハリといふが如し。かく御供して來しもの、矢張故郷の方が見やらるゝとなり。そはわが父母があはすとおもへばとなり。かへらやは、飯りゆかんとなり。

かくうたふを、ききつゝ、漕きくるに、くるとりといふ鳥いはほの上にあつまり居り。そのいはほのもとに、浪白くうちよす。か



ぢどりのいふやう、黒鳥のもとに、白き浪をよすとぞいふ。この詞、何とにはなけれど、ものいふやうにそきこえたる人のほどにあはねば、どがむるなり。

くろどり、黒色したる水鳥ならん。いかなる鳥とも定めかたし。和名抄には鴉の字を、久呂止里とよめり。黒鳥考といへる一冊の書もあつてさま／＼説あれども、或人はこは鴉の事にして今もその邊の人はくろどりといふとき

けり。こゝは、黒と白と對して、舵取がいひしが、めづらしと云へるまでなり。何とにはなけれど云云、何ぞこれといふほどのことはなけれども、舵取等が言としては、めづらかなれば、一寸聞き答めしとなり。物いふやうにといへるは舵取等の身分としてかゝるめづらしきことをいひ出せるをいへるいとおもしろし。

かくいひつゝゆくに、舟君なる人、浪を見て、くにより乗りはじめて、海賊むくいせんといふなることをおもふ上に、海のまたおそろしければ、かしらも皆しらけぬ、な／＼そぢやそぢは、海に

あるものなりけり。

わか髪の雪といそべのまら浪と

いつれまされりおきつままもりかちどりいへ

海賊 紀氏任國の間、是等をいたく戒しめられしことなどのありしかば、今歸京に臨みて、寇せんとするなり。こは、藤原純友などの黨類なりといへり。むくい、返報なり。この海賊のおそろしきうへに、海の浪さへ立ちて、おそろしければ、頭髮もみなまらけぬとなり。心配して、髪は白くなるをいふ。さて、かく海上は、つらきものなるをおもへば、人間の七十八十になりて、髪は白くなるといふ、そのほどの事は、皆海にあるものなりといへるなり。この文簡にして海上のおそろしきさま、さながら、いひつくしたり。能く味ふべし。な／＼そぢやそぢのち、は、路にて、たゞ七十八十のことなり。わか髪の云々、心配して、かくまで白くなれる我髪と、磯邊によする白波とは、何れかまさりて、白きか、沖つ島守(島の番人)いで答へよといひて、島守はあらざれば、そこに居る舵取にむかひて、汝それを判断していへと命令せるなり。かちどりいへ、の詞は、歌につ



くけてよむべし。

廿二日、よへのどまりより、ことよまりをおひて行く、はるかに山見ゆ。年九つはかりなるをのわらは、年よりはをさなくぞある、このわらは、舟をこくまにく、山も行くど見ゆるを見て、あやしきこと、歌をぞよめる。そのうた  
こきてゆく舟にし見ればあしひきの

山さへゆくを松はまらすや

とそいへる。をさなきわらはのことにては、似つかはし。けふ海あられ、磯に雪ふり、波の花さけり。ある人のよめる。

なみとのみひとへにきけどいろ見れば

ゆきと花どにまかひぬるかな

をのわらは、男の童なり。年よりは云々、年よりは幼しとなり。舟をこくまにく云々、舟を漕くまにくに、山も行くやうに見ゆるをいふ。あやしきこと云々、この男の子の山も行くやうに見ゆるが、幼ければあやしきことに

思ひて歌よめりとなり。こきて行く云々、漕て行く船に乗りて見れば、山までも行くやうに見ゆるを、その山に生したる松は、知らすやとはいへるなり。  
あしひきは、山の枕詞。をさなき云々、小供の歌としては、相應なる出来の歌となり。海あられ云々、海かあれて、磯に浪のうちよするを、雪と花どに見たてたるなり。浪とのみ云々、波とのみ一句に聞きつれど、その色を見れば、雪と花どにまかふとなり。

廿三日、日照りてくもりぬ。このわたり、海賊おそりありといへば、神佛を祈る。

わたりは、邊といふか如し。おそりは、今はおそれといふ。即恐の義なり。廿四日、きのふおなじどころなり。

廿五日、舵取等の北風あしといへは、舟いたさず。海賊おひくといふことたえすぎこゆ。

あしは、悪しなり。今の人多くはあしといふ。あひくは、おひ来るなり。かゝること絶えずきこえては、いかに恐しかりけん。



廿六日、まことにやあらん。海賊追ふといへば、夜なかばかりより、舟をいだして、漕きくる道に、たむけするところあり。舵取して、ぬさたいまつらするに、ぬさの東へちれば、舵取の申したいまつることは、このぬさのちるかたに、御舟すみやかに漕かしまつるまへと申して、たいまつる。これをきよて、あるわらはのよめる。

わたつみのちふりのかみにたむけする

ぬさのおひかせたえすふかなん

とそよめる。

夜なかばかり、夜半ほどといふが如し。たむけするところ、たむけは手向なり。神に物を奉ることなり。舵取して、舵取に命してなり。たいまつるたてまつるの音便なり。ぬさの云々、今神に奉る幣はたらきの東の方へ散れば、そのちる方に速に御舟をこかせたまへといふなり。舟はもとより、舵取が漕くものなれども、波風あらくては漕かれざるものなれば、神にそれを祈るなり。

さて幣とは、絹布などを、或は大きく、或は小さく切りて、奉るものにて、古旅行の時には之を袋に入れて、道の神々に奉り、その恙なきを祈りつゝ行きしものなり。

わたつみ は海のことなり。ちふりのかみ、道觸にて、水路にははす神の事を申すなり。ぬさのおひ風、幣の追風は、即西方より吹く風にて、この風たえず吹けば舟の東方にすゝみて、都へ上ること一日も早くなれば、止す吹なんとはいへるなり。なんは願の辭なり。

このあひだに、風よければ、舵取いたく誇りて、舟に帆かけなとよることぶ。そのおとをきよて、女もいつしかとおもへばにやあらん、いたくよろこぶ。この中にはあはぢのたうめといふ人のよめる歌。

おひかせのふきぬる時は行く船の

ほてうちてこそうれしかりけれ

とぞ、ていけのことにつけつゝいのる。

そのおと、舵取等が風よじとて、舟に帆あくる音なり。あはぢのたうめ、下



文に淡路のちほい子とある人のことならんといへり。ほで、眞淵翁は、ほでとは帆の横手に繩を多くつけて、左右へ開んとする綱のとなりといはれたり。されば、ホテと稱する一種のものありしならん。又或説には、たゞ手を拍つことを、ほでうつといひしにやあらん。されば、上句は全く序なりともあり。必竟、手を拍てよろこぶさまにて、ホテを實物といひ、實物ならずといふ二説あるなり。いつれにても、心のひかへ方に従はゞよからん。ていけは、天氣なり。天氣よかれかしと、うたひながら心にいのるなり。

廿七日、風吹き、波あらければ、舟いたさず。これかれかしこくなけく。男たちの心なくさめに、からうたに、日をのそめば都遠し、などいふなること、のさまをきよて、ある女によめるうた、  
日をたにもあまくもちかく見るものを

都へとおもふ道のはるけさ

又ある人のよめる、  
ふくかせのたえぬかきりし立ければ

波路はいとゞはるけかりけり

日一日、風やます。つまはじきをして、寐ぬ。

かしこくなけく、甚歎息することなり。男たち云々、みつから女になりて、かけりし筆つきよく、味ふ可し。日をのそめは云々、晋書明帝紀に、明帝幼き時、日と長安といつれか近きと問ひしに、人の日邊より來れるをきかされは、長安の方近しと答へられしに、其後再び問ひければ、仰き見れば、日は直に見ゆれども、長安は見えずされは、日の方近しとこたへられきといへることあり。これによりて、作れる詩などをうたふをいふ。日をたにも云々、この歌、明帝の後、のこたへの意なり。即ちからうたの心なるべし。極めて遠き日アサへモ、天雲近く見らるゝものを、都へ行かんともおもふ道の遠きことよ、目にも見られず、さてもくといへるなり。たえぬかきりし、絶えぬかきりは、波のやまぬをいふなり。しは例の強助辭。つまはじき、爪はしきなり。ものを恨め嘗る時に、することにて今も同じ。こゝは浪風をうらめるなり。

二十八日、よもすから、雨やます。けさも。



けさも、猶やますとひへることを省きてかける一の文法なり。

二十九日、船いだして行く。うらくとてりて、こきゆく。爪いと長くなりたるを見て、目をかぞふれば、けふは子の日なりければ、きらず。むつきなれば、京の子の日のこと、いひいで、小松もがなとおもへど、海なかなれば、かたしかし。ある女のかきて、いたせる歌、

おほつかなけふは子の日かあまならは

うみまつをだにひかましものを

とそいへる。海にて子の日の歌にては、いかゝあらん。ある人のよめる歌、

けふなれど若菜もつます春日野の

わかこきわたるうらになければ

かくいひつゝ、こきゆく。おもしろきところに、舟をよせて、こゝやいつこと問ひければ、土左のとまりとそいひける。むかしと

さといひけるところに、すみける女、この舟にまじりけり。それかいひけらく。むかし志はしありしところの、各たくひにそなる。あはれといひてよめる歌、

としころをすみしところの名にしおへば

きよるなみをもあはれどそ見る

うらく、長閑なる義。爪いと云々、少し安心して、手の爪の長くなりたるに氣のつきたるさまなり。さてそれにおもひよそへて、目を數へて見れば、

子の日なりとなり。子の日に爪きらずとは、このころ行はれし陰陽家の法なり。むつき、正月のこと。小松もかな云々、京にては、子日に、小松を引きて、

邪氣を除くなどいふことあれば、それをおもひいだしたれど、海中なれば難しとなり。かし、は例の強助辭。おほつかな云々、さても今日は、子の日であ

るか。松は海中にあるへき筈なし。若し海士であつたならば、海松即ミル也。でもせめてひくべきものを、海士にもあらざれば、それも意にまかせずとて、海上なるをうらみてよめるなり。海士は、海中にくもりて、海松など取るものな



ればなり。けふなれと云々。今日子の日に當れど、若菜だにも摘まず。それは春日野といふ都より、若菜つみに行く所の野か、今我漕きゆく浦になければと、これも海上なるをうらみてよめるなり。むかし土左と云々。こは紀氏自らをいへるなり。名たくひ、名の類なり。としころを云々。年來我が住みし所の名を(即土左)負ひてあれば、來寄る波をもあはれとおもひ見るとなり。こは同名なるより、おもひ出たる情なり。

卅日、雨風ふかず。海賊は夜ありきせざなりと聞て、夜なかばかりに、舟をいたして、阿波のみとをわたる。夜なかなれば、西ひんがしも見えす。をそこ女、からく神佛を祈りて、このみとをわたりぬ。寅卯の時ばかりに、ぬしまといふところを過て、田無川といふところをわたる。からくいそぎて、和泉の灘といふ所にいたりぬ。けふ海に波に似たるものなし。神佛のめくみあはれふに似たり。けふ舟に乗りし日より、かぞふれば、卅日あまり九日になりにけり。今は和泉の國にきぬれば、海賊ものならず。

せざなり、せすあるなりなり。阿波のみと、みとは水門なり。こは阿波の鳴戸の流れなりとぞ、まことの鳴戸はもとより舟のゆくへきところにはあらず。されど、その同しすぢなれば、海水いと早くて、舟も動き剩へ夜中なれば、男女ともに辛く一心に神佛を祈りしなり。波に似たるもの云々、波のかけだにもなしといふが如し。これは、神佛の恵み恤みたまふ故ならんとなり。海賊ものならず、最早こゝまできぬれば、海賊は何でもないもの、數でもないとなり。

二月朔日、朝のま雨ふり、午の時ばかりに止みぬれば、和泉の灘といふところより出て、漕ぎ行く。海の上きのふの如くに風浪見えず。黒崎の松原を経て行く。所の名は黒く、松の色は青く、磯の浪は雪の如くに白く、貝の色は蘇枋すけにて、五色に今一色を足らぬ。この間に、今日ハはこの浦といふところより、つなで引きて行く。かく行く間にある人のよめる歌、  
玉くしげはこのうち浦たよぬ日は



海をかゞみとたれか見さらん

所の名は云々、黒崎の黒といふ色よりちもひちこして、松と浪と貝とをとりあはせて、五色に一色足らぬといへる、ちもしろきかきかたなり。つなて、船を挽く綱なり。玉くしげ、箱の枕詞。鏡とたれか見さらん、鏡として誰か見さらん、必見るであらふとなり。波の治りたるさまを、鏡に譬へていへるは、玉くしげの枕詞に、何となく、照應せさせたるなり。櫛笥は、鏡を入れおくものなればなり。

また船君のいはく、この月までなりぬることよて。歎きて苦しきにたへずして、人もいふことよて、こゝろやりにいへる歌、ゆく船のつなての長き春の日を

よそかいかまで我は經にけり

聞く人の思へるやう、なぞたゞごとになると、ひそかにいふべし。船君のからくひねりい出して、よしとおもへることを、えしもこそ誣へとてさゝめきて止みぬ、俄に風波たかければ、とゞま

りぬ。

船君、紀氏なり。人もいふことよて云々、感に觸れては、人も歌をよむものなればとて、自らも心やりによめりとなり。つなてのなかき云々、船のつなでのやうに長き春の日を、四十日五十日まで、このくるしき船の中に暮したりとて歎きたるなり。聞く人のちもへるやう云々、この歌をきく人、何でコソナ唯言(當りまへのこと)をよみたるならん、とひそかにいふへしとなり。船君の辛苦して、ヤットよみ出して、よしとおもひてよめりし歌を、さはいへ、得もこそ誣へ。ソソナにわるくいふでもあるまいとて、さゝやきて止みぬとなり。

二日、雨風やまず。日ひと日、よもすがら、神佛を祈る。

三日、海の上きのふのやうなれば、船いださず。風の吹くこと、やまねば、岸の波立かへる。これにつけて、よめる歌。

緒をよりにてかれなきものは、おちつもる  
なみだの玉をぬかぬなりけり

かくてけふは、くれぬ。